神を喰らう者～夜明けの開花～

白レン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神を喰らう者～夜明けの開花～

【Ｎコード】
Ｎ９９６６Ｘ

【作者名】
白レン

【あらすじ】
神を喰らう者たちの戦いは今日も続いていた……そんな中、激戦区と呼ばれる極東支部に初の新型神機使いが誕生した。
人類が全てを取り戻すための戦いが今始まる…。

一喰：贖罪の街（前書き）

基本原作に沿った流れで行くつもりですが、日常生活の描写やオリジナルの展開もしていく予定です。だいぶ先の話になりますし、小説書くのは初めてなので優しい目で見て頂ければ幸いです。

一喰：贖罪の街

えぐられた様な大地、風穴を開けられたビル群。かつて多くの人々が生活していたとはにわかにも信じ難い。そしてその世界を徘徊する異形達……。

鬼のような顔と模様のある尻尾、「オウガテイル」と呼ばれるその化物は今、集団で息絶えた獲物を捕喰していた。

そこへやってきたのはオウガテイルよりも遥かに大きい、獅子のような姿をした化物「ヴァジュラ」だ。獲物を見つけたヴァジュラは一気に距離を詰めて、その命をあっさり奪う。

オウガテイルの群れを貪るヴァジュラは食事に夢中で、近くの廃ビルに潜んでいた気配に気付かない。

そこには巨大な武器を担いだ人間が三人いた。ヴァジュラの様子を窺い、その剣で切り掛かるタイミングを狙っている。

そしてわずか数分でその戦いに決着がついた。

力尽きたヴァジュラに三人の内の一人が近づくと、武器を上へ持ち上げた。

武器のパーツがゴソゴソ動いたかと思ったら、中から黒い大きな口が出てきた。それを向けられたヴァジュラの肉体はあっという間に食いちぎられた。

口を武器に収めた男が口を開いた

「おっとレアモノだな」

捕喰を通して武器から手に入った素材を見て雨宮リンドウが呟く。

「戦果は上々ってやつね」

そう口にするのは橘サクヤ。

リンドウは頭を掻いて「またサカキのオッサンがはしゃぎそうだ」とぼやいた。

「さ、帰りましょ。お腹すいちゃった」

サクヤのその一言で一行はその場から引き上げる。

「今日の配給なんだったかしら？」

「うん？確かこの前の食糧会議で何か言ってたな……あぁそうだ！新しい品種のトウモロコシだ」

「え～またあのでかいトウモロコシ～？あれ食べづらいんだよね～……」

「このご時世だ、食えるだけでもありがたいと思えよ～」

と、リンドウはたしなめる。

「ねえソーマ、何かと交換しない？」

「……断る」

ソーマと呼ばれた青年はたった一言でサクヤの申し出を拒否した。

「おーいお前ら！おいてくぞ」

リンドウの呼び声で再び二人は歩きだし、数少ない安息の地「アナグラ」へと飛ぶヘリの待機地点へ向かった。

一喰：贖罪の街（後書き）

主人公は次の話に出て来ます。名前は「神霧ハイド」です。同じですハイ。作者名でいい名前が思い浮かばなくって・・・。

「神霧」は神斬りクレイモアから、「ハイド」はリスペクトしている人から拝借しました。

作中では別の理由になりますが・・・。

ちなみにこの名前はゲームのメインデータです。

二喰：適合試験（前書き）

ミス修正しました。ただでさえ少ないページ数が更に減りました。

二喰：適合試験

帰投中のヘリの中でソーマはイヤホンをつけて音楽を聴き、リンドウとサクヤは他愛のない会話をしていた。

やがてヘリは人類最後の砦「フェンリル」に到着した。ミッションの報告を行うためオペレーターのもとへ向かっている途中、ふとサクヤが軽いグチをこぼした。

「それにしても、やっぱり人手が足りないのよね～」

生きるか死ぬかの戦いを繰り広げる彼らは、常に人員不足に悩まされている。

「早く新しい人が来てくれるとありがたいんだけど……」

「そういうことならとっておきの情報があるぞ」

サクヤの言葉にリンドウが反応する。

「え？まさか新人が入ってくるの！？」

「ああ二人な」

リンドウはサクヤに応える。

「一人は旧型銃身神機、もう一人はなんと新型神機の適合試験を受けるらしい」

「新型神機！うちの支部では初めてね～」

サクヤは「素直な子だといいわね～」と顔を綻ばせて言った。が、一歩後ろを歩いていたソーマは正反対の事を考えていた。

（チッ……面倒が増えそうだ）

「ようこそ…人類最後の砦フェンリルへ…今から対アラガミ討伐部隊『ゴッドイーター』としての適性試験を始める」

演説で多くの人々を魅了するであろう美声が円形の広い部屋に響き渡る。壁にはあちこちに傷や弾痕などがついている。その部屋の中央には台座が置かれていた。

普通ではなかなか目にしない光景に少々気圧されている青年を見て、その声の主「ヨハネス・フォン・シックザール」は再び声をかける。

「少しリラックスしたまえ。その方がいい結果が出やすい…心の準備ができたら中央のケースの前に立ってくれ」

「…はい」

青年はそう答えると部屋の中央へゆっくりと向かっていく。

ケースは上下半分に分かれており、それぞれに半円型の赤い物体がはめられていた。その物体がある場所は、あいだに置かれた剣の柄の部分……

……なんだかものすごく嫌な予感がしながらも柄手を伸ばす。

すると案の定、上の蓋がギロチンのように落ちてきて腕をバクンと挟まれた。

「ぐっ…うおおおぉぁぁぁぁっっっ！！！」

グチャグチャと嫌な音をたて、手首に堪えがたい激痛が走る。

そしてケースの上蓋が開いくと赤い腕輪をつけた青年の腕と、その手に柄をしっかりと握られた剣が出てきた。

青年はその剣を持ち上げ、まじまじと見つめていた。と、その時、柄のすぐ上にある黄色い球状の物体から黒い触手が伸びてきて腕輪に刺さった。

「おめでとう。君がこの支部初の新型ゴッドイーターだ」

シックザールの声が響く。どうやら終わったようだ。青年は緊張が解けて安堵の表情になる。

「次に、適性試験後のメディカルチェックが予定されている。後ろの扉から出て、指定された場所まで行って待機していてくれ。尚、『気分が悪い』など症状がでた場合は即座に申し上げるように。期待しているよ、神霧ハイド君。」

「はいっ！」

『神霧ハイド』と呼ばれた青年は、これから始まる激しい戦いに身を引き締め、自分の上司にしっかりと返事をして部屋を出ていった。

二喰：適合試験（後書き）

すいません。この話で酷いミスを犯しました。修正を施したので、今後は気をつけて書きます。

三喰：挨拶回り（前書き）

サブキャラ登場回です。大分字を打ったつもりだったんですが以外と量が少なくて「まだまだだな」と思いました。

三喰：挨拶回り

待機場所に着いたハイドは、自分と同い年くらいの男の子がソファに座っていることに気づいた。

（あの服…確か外部居住区で人気のブランドだったっけ…同い年…いや、いっこ下くらいかな？）

そんな思考を巡らしながら自分もソファに腰掛けると、その男の子が話し掛けてきた。

「ねぇ、ガム食べる？」

ところが「あ、うん」と言おうとする前に

「あ、切れてた。今食べてるので最後だったみたい。ゴメンゴメン」

「え？ああ、そう…」

ハイドはそう答えると少しの沈黙が訪れる。

「あんたも適合者なの？」

「うん、まあね」

「俺と同じか少し年上っぽいけど…でもまあ、一瞬とはいえ俺の方が先輩ってことで！」

無邪気な顔でそんなことを言うその少年に、自然とハイドも笑顔に

なる。

「俺、藤木コウタっていうんだ。よろしくぅ！」

「俺は神霧ハイド。よろしくな、コウタ」

互いの自己紹介が終わったところでハイヒールの鳴る音が近づいてきた。

音のする方へ顔を向けると、見る者を圧倒するような真っ白い服に身を包んだ女性がこちらへやってくる。多分上司…それも厳しいタイプのだと悟ったハイドはソファから立ち上がる。やがて自分達の前で足を止めるとまだ座ったままのコウタに顔を向けた。

「立て」

「へ？」

「立てと言っている。立たんか！」

そう言われてコウタは素早く立ち上がり姿勢を正す。

「時間がないので手短に話す。私の名は『雨宮ツバキ』。お前達の教練担当者だ。今後の予定はメディカルチェックを受けた後、基礎体力の強化、戦術理論の習得、各種兵装の扱いなどのカリキュラムをこなしてもらう。今までは守られる側だったかも知れんが、これからは守る側だ。つまらないことで死にたくなければ私の命令にはすべてＹＥＳで答えろ。いいな？」

「はい！」

「分かったら返事をしろ！」

「はいっ！！」

またもやコウタが怒られ、若干恐怖の入り混じった返事をする。

（俺たちこの先大丈夫かな？）

とハイドは思う。

「まずは神霧ハイド、お前からだ。榊博士の研究室に一五〇〇までに集まるように。それまでこの支部を見回っておけ。今日からお前達が世話になる、通称『アナグラ』だ。挨拶の一つでもしておくように」

「はい！」

するとツバキの後ろから声がした。

「あ、ツバキさん！ちょうどよかった。ミッションの報告書の件で話が…」

そう言ったのは赤いジャケットを着た二十歳くらいの男性だった。隣に青いジャケットを着た男性と、緑のワンピースを着た薄桃色の髪の女の子もいる。

「ああ、お前達。ちょうどよかった。今日から極東支部に配属になった新人を二人紹介する。」

「新人ですか！じゃあ名乗るときは自分から。俺は第二部隊、防衛班隊長の大森タツミだ。よろしくな！」

爽やかかつ快活そうな声でタツミは自己紹介する。

「俺はブレンダン・バーデル。同じく第二部隊に所属している。頼りにしてるぞ」

と、ブレンダンは挨拶する。低くてしっかりしている声は逆にいざという時本当に頼りになりそうなイメージを与える。

「あの、私台場カノンっていいますっ。お菓子作ったりするのが好きなので、二人にも作ってあげますね。」

カノンは可愛らしい挨拶で二人に（この時だけは）いい印象を与えた。

「本日付けで入隊となりました、神霧ハイドです。皆さんに少しでも早く追いつくために一生懸命頑張ります」

「おう！頼むぜ。新戦力はいつでも大歓迎だ」

ハイドの挨拶にタツミが答える。本当に気さくな人だとハイドとコウタは思った。

「俺、藤木コウタ！よろしくお願いしまっす！」

「フ、明るく元気だな。今時珍しい」

ブレンダンは穏やかな表情でコウタを見る。

確かに今、人類は窮地に立たされている。死ぬ可能性が高いこの世界で、これだけ明るい人間は逆に珍しいだろう。

「まあとにかく死ぬなよ？絶対生き残るんだ！いいな？」

『ハイ！』

二人が返事をしたのを見てツバキが口を開く。

「よし。ところで書類に関する話とはなんだ？」

「ああ、そうでした！今日のアラガミとの戦闘で破損した外壁のことなんですけど……」

なんだか難しい話になってきたのでハイドとコウタはその場を離れた。

「はぁ～…怖かった～…」

ツバキから離れた場所でうなだれるコウタ。

「大丈夫か？」

「まあね。でもよかったよ～…厳しい人ばかりってわけじゃないみたいだし」

「ああ、タツミさん達のことか。確かにね」

「でもさ～…やっぱり後輩いびりとかする先輩もいると思うんだよ

な～」

「あれ？お前ら見ない顔だな？」

『え？』

二人が振り返ると、帽子を被ってパーカを着た少年と首に直接ネクタイを巻いた金髪の青年、そして胸元を大胆に露出させ、眼帯を装着した銀髪の女性の三人が立っていた。

「お前ら新人か？」

「ええ、そうですが」

金髪の青年が質問したのでハイドが答える。

「本日付けで入隊した神霧ハイドです」

「俺、藤木コウタ！よろしく！」

二人が挨拶したところでコウタの挨拶を聞いた帽子の少年が一歩前に出てコウタと向き合う。

「お前先輩に対する口の聞き方がなってねぇな。」

「え？」

「先輩に対して今の口の聞き方が馴れ馴れし過ぎるっつってんだよ」

「やめなさいシュン。あなた本当は後輩ができて嬉しいんでしょう

？素直じゃないわね」

横から入ったのは眼帯の女性だった。シュンと呼ばれた少年は苛立たしげに女性を睨む。

「うるせぇっ！…ったく、まあいいや。俺は第三部隊所属の小川シュンだ。ま、せいぜい死なねーように気をつけな！」

そう言ってシュンは行ってしまった。

「まったく、生意気なのはお前も同じだろっての…。同じく第三部隊所属のカレル・シュナイダーだ。よろしくな。言っておくが、俺より活躍するのはやめろよ。配給の低い任務が回ってくるからな」

そう言い残しカレルも行ってしまった。

「な…なんなんだあの二人…」

二人…特にコウタの方は唖然とした表情で固まっていた。

「気にしないで。あの二人はいつものことよ…。私はジーナ・ディキンソンよ。ジーナってよんでちょうだい」

「は、ハイ」

大人の女性らしい色っぽい声にコウタは思わず緊張してしまう。

「あ、あの…ジーナさん…」

「何？」

「失礼なこと聞きますけど…あの…その…どうしてそんなに胸を開いてるんですか…？」

「ああ、これね…私なりの価値観ってやつかしら…戦っているときはこの世に私とアラガミだけ…私はアラガミと命で向き合っているだけなのよ…その間を隔てるものは私には必要ない…」

ジーナの独特の感性に二人は呆気に取られる。

「あ…二人共行っちゃったからミッションの報告私がしなくちゃいけないのね…悪いけどもう行かなくちゃ。じゃああなたたちも頑張ってね」

そう言い残しジーナは立ち去って行く。

「なんていうか…すごいね」

ジーナの後ろ姿を見ながらハイドは思わず口にした。

「…ホントだよな」

コウタも同感であった。

「…ハイド、そろそろ時間じゃないか？」

「ああ、そうだな。じゃあ行ってくるよ」

（一五〇〇までに集合だったな…少し急いだ方がいいか？）

時間を確認したハイドは足早に、榊博士の研究室へと向かった。

三喰：挨拶回り（後書き）

……やっぱりややこしいな作者名と主人公名……

さて、サブキャラはかつて主人公のエディットで作れてしまいましたがバーストからは個性が出ました。

その中でもジーナ姉さんは飛び抜けて個性的でした。

四喰：検査と責務と訓練（前書き）

修正第二弾。指摘されたら気になるタイプの人間です。

四喰：検査と責務と訓練

ハイドは榊博士の研究室があるという「ラボラトリ」の区画へエレベーターで向かっていた。研究室へ向かう途中、すれ違う他のゴッドイーター達はみな物珍しそうな目で見てきてむず痒い思いをした。

やがてハイドは目的の場所へと到着した。

中に入るとモニタやキーボードなど機械に囲まれてせわしなく指を走らせる狐目の男、そしてその隣に白いロングコートを着た、端整な顔立ちの男がいた。

「ふむ…予想より７２６秒も早い…よく来たね、神霧ハイド君。私は『ペイラー・榊』。アラガミ技術開発の統括責任者だ」

榊はハイドに名乗ると、休めていた指を再び走らせる。

「さてと…見ての通り、まだ準備中なんだ。ヨハン、先に君の用事を済ませたらどうだい？」

榊はそう言って隣の男を見る。

「榊博士…そろそろ、公私のけじめを覚えていただきたい。先程の適合テストではご苦労だった…私の名は『ヨハネス・フォン・シックザール』。この地域一帯のフェンリル支部を統括している。さて、我々フェンリルの目標を改めて説明しよう。君に課せられた責務はこの地域周辺のアラガミの撃退とその素材を持ち帰ることだ。そしてそれらは全てここ…前線基地の維持と、来るべきエイジス計画の資源として使われる。」

「この数値はっ…！」

突然榊の声が横から割ってきて説明が中断される。ハイドは驚いて顔を榊に一瞬向けるが、すぐに姿勢を正しシックザールと向き合う。

「エイジス計画…外部居住区のメディアでもよく取り上げられているあの…」

「そう…人類の楽園を作るという理念のもとに進められている計画だ。正確には、旧日本海付近に外部居住区のものとは比べものにならないほど強固な、対アラガミ装甲を展開した人工の島を作り、そこに人々を住まわせるというものだ。」

「ほほーー！！」

また榊の声がが割って入るがヨハンは無視する。

「この計画が成就すれば…少なくとも人類は当面の間、絶滅の危機を遠ざけることが出来るはずだ。」

「すごいっ！！！これが新型かぁ～！！」

「ペイラー…説明の邪魔だ。」

ついに堪えられなくなりヨハンが榊に注意する。

「ああ、ゴメンゴメン！ちょっと予想以上の数値に舞い上がっちゃったんだよ～」

榊の様子にため息を漏らすシックザール。

「ともあれ、人類のためだ。尽力してくれ。では、私はこれで失礼する。ペイラーは検査が終わったら、私にデータを送っておいてくれ」

シックザールはそう言って、部屋を出て行った。

「よし！準備は完了だ。そこのベッドに横になってくれ。少し眠くなるけど心配はいらない。次に目が覚めたときは自分の部屋だ。戦士のつかの間の休息というやつだね。予定では１０８００秒だ。ゆっくりおやすみ」

何されるんだろうと若干…いやかなり不安になりながらハイドは横になり検査が始まった。

眠ったハイドを部屋へ送った後、榊は自分専用のターミナルにアクセスし、ハイドの計測データを見ていた。

（ふむ…ただでさえ適合しにくい新型神機に選ばれ、なおかつソーマ並の適合率の高さ…間違いないなく即戦力となる逸材だね…）

現在世界に新型神機使いは数えるほどしかいない。その中でもハイドの潜在能力の高さは群を抜いていた。

「指導方法や成長次第では世界最強のゴッドイーターになるかもしれないな…」

そう呟いた彼は比較的まずいコーヒーを口にした。

やがてハイドは新人区画の一室で目が覚めた。ぼやけている視界が鮮明になってくると、自分がいる部屋を見回す。

「…ここが俺の部屋か…」

まだ新しいのか小綺麗な部屋だった。外部居住区にいた頃とはえらい違いである。

「そういえば眠ってる間は検査があったんだっけ？」

そこでハイドは自分がいつの間にか寝巻きに着替えてることに気づく。

（あれ…？いつ着替えたんだ…？まさか榊博士が？いやいやまさかそんな～…）

と思いつつも、言い知れぬ不安が積もる…。

（……っ！！）

突然ガバッと上着を脱いで上半身裸になるハイド。両手で身体中をぺたぺた触り、切られたり縫われたりされていないか確認する。

「…ふぅ～…」

なんともないことがわかり安堵するハイド。おもむろにベッドから起きて伸びをしたあと、クローゼットに向かって歩く。

中にはやはり昨日着ていたフェンリル支給の隊員服が掛けられていた。（それも同じデザイン、同じ色が何着も）

他の服は駄目なのか？と疑問に思いつつ服を着替える。まず右手を通して…

「…んっ？…あれ？」

やっぱりというか…右手についている大きくて無骨な腕輪が引っ掛かっていた。

「ふん！この…！ちょ…おまっ…！往生際がっ…悪いぞ！！」

ひたすら腕輪と格闘するハイド。１０分ほど時間をかけてようやく袖が通った。

「っだぁ～…着づら！！」

頑張りすぎて腕が痛い。

とりあえず服を着替えたハイドは部屋の外に出た。すると正面のエレベーターの近くにシュンが立っていた。隣にコウタもいる。

「おう、やっと目覚めたか。」

シュンは待ちくたびれたぞ、といった口調でハイドに言う。

「小川さん？どうしたんですか？」

「俺達を迎えに来てくれたらしいよ。今日から訓練が始まるからさ。

」

ハイドの問いにコウタが答える。

「おら、さっさと行くぞ！早くしないと俺がツバキさんにどやされるんだからな！」

シュンの呼びかけで一行はエレベーターに乗りエントランスへと向かった。

エントランスに到着すると、階段を降りた先を指差してシュンが言った。

「あそこにオペレーターがいるんだ。その人に話し掛けて、『訓練ミッション』を受注してこい。受注が完了したらあそこの出撃ゲートから出て、案内表示に従って行けば訓練場に行けるぜ」

「わかりました。」

ハイドがにこやかにそう言うとシュンは「フン」とそっぽむいて言った。

「じゃあ俺は部隊の方に戻るからな。訓練でいきなり死ぬなよ～」

ひらひらと手を振ってシュンはゴッドイーター用ターミナルへと向かっていった。

ハイドとコウタは階段を降りて行くと…

「やあヒバリちゃ～ん、今日もかわいいねぇ～」

「もう、タツミさん！他の方々の邪魔になるのでそういうことはやめてください！」

……いきなりナンパ現場に遭遇……

「どうする？ハイド」

コウタはタツミの新たな一面を見せられて少し引いている。

二人はなんとかオペレーターらしき人に話し掛けようと試みるが、タツミが一瞬たりとも間を空けずに話し掛けるのでなかなかタイミングが掴めない。

（タツミさんには悪いけどこっちも急がないといけないしな）

「あの！すいません！」

ハイドの大きな声でタツミとヒバリが振り返った。

「おう、ハイドにコウタじゃねえか」

「…あぁ！新人さんの方々ですね！はじめまして、オペレーターの『竹田ヒバリ』といいます。

ミッションの受注や報酬の受け渡しなどは私が行いますので、これから関わることも多くなると思いますが、よろしくお願いします。それでどういったご用件でしょうか？」

ヒバリの質問にコウタが答える。

「えっと…訓練ミッションを受注したいんだけど…」

「了解しました。ツバキさんが用意されたミッションが届いてます。準備ができましたら出撃ゲートから指示に従って第一訓練場へ移動してください。」

そう言ってヒバリは、同性でも惚れ惚れするような笑顔を二人に向ける。

「わかりました。よし…行こうかコウタ」

「おう！」

そして二人は来た道を戻って出撃ゲートへ向かう。その途中「でさ～ヒバリちゃ～ん…」とか「ああっ！いつの間にかこんなに並んでる！！」という声が聞こえたが…。

ゲートから出たハイドとコウタは、壁に設置されてるインフォメーションに従って進んでいく。

「最初は基礎体力の強化とか言ってたけど、なにやらされるんだろう？ハイド、なんか聞いてる？」

コウタはハイドに聞いてみる。

「いや、何も聞かされてないけど…」

「そっかぁ…まあなんとかなるっしょ！」

コウタはニカッとして言った。それを見てハイドは「ふふっ」、と笑った。コウタの笑顔が怪訝な顔になった。

「なーに笑ってるんだよ～…」

「いや、ゴメンゴメン。コウタは前向きだなって思ってさ」

とハイドは言った。良く言えば前向き、悪く言えば楽観的。戦場では危うい要素かもしれない。でも今はエイジス計画というわずかな希望しかないこの世界で、コウタの前向きな言動は非常にありがたい。戦いの前の緊張を程よくほぐしてくれそうだ。

「後ろ振り返ったって仕方ないだろ?それに過去にこだわってたら、いつまでたっても前には進めないしさ…だったら俺は常に前向いていこうって決めてるんだ!」

そう言ってまた笑顔になるコウタ。

「さ～て…今日の訓練とやらを片付けるか!」

「ああ、そうだな!」

たどり着いた訓練場の入口の前で気合いを入れ直す二人。シュッと自動ドアが開き二人は中に入った。

(広い丸い部屋…適合試験を受けた部屋に似ているな…ひょっとしていくつか同じ部屋があるのか?)

そんなこと思いながら部屋な中央に進むハイドとコウタ。そして二人の向かう先にはツバキがファイルボードを持って待っていた。

「ふむ…時間通りだな、よくきたな二人共」

ツバキが二人を見て言う。

「では早速トレーニングを開始するが、その前にまず簡単な説明をしよう。お前達二人やその他の者達、私のような現役を引退したゴッドイーターまで、皆腕輪からオラクル細胞を投与している。オラクル細胞についての詳しい説明は、近いうちに榊博士が講義を行うので、そこで学ぶように。そしてそのオラクル細胞は、人体への投与に成功すれば、身体能力を爆発的に引き上げてくれる。筋肉の瞬発力や持続力、反射神経や動態視力、聴力など身体中のほぼ全ての器官が強化される。よってそれに比例したトレーニングメニューとなるのでそのつもりで。」

『は…はあ…』

なんだかよくわかってなさそうな二人を無視してツバキは話を続ける。

「ではまず腕立て伏せからだ。回数は１５００回。一秒に一回のペースでこなしてくれ」

……え……？今この人なんて言った…？１…５００？桁がひとつ違うような気がする……

「あ…あの…ツバキさん…」

コウタが控えめに手を挙げる。

「なんだ？」

「なんか…桁がひとつ違うような気が…」

「そうか…お前は１５０００回だな…訓練熱心な奴だ」

「１５００回！やらせていただきまっす！」

「フッ、冗談だ。心配するな。たとえ仮にまったく腕立て伏せができない者でも、オラクル細胞を投与すれば７００くらいは出来るようになる」

さらっととんでもないことを言ったツバキ。

「さあ、さっさと終わらせないと次のメニューがいつまでたっても消化されんぞ！」

こうして鬼教官ツバキの『楽しい新人クッキング』がスタートした。

四喰：検査と責務と訓練（後書き）

小説を見せてくれとせがまれて見せたら日本語の間違いを指摘されました。気づいてくれてありがとうございます。自分で書いてると分からないものですね…。

五喰：睡眠と食事を貪る者（前書き）

トレーニングを受けて疲労困憊になって食事してシャワー浴びて寝るという話です。……部活かっ！！

五喰：睡眠と食事を貪る者

「……コウタ……生きてるか……？」

「……へっ…へへっ……全然…大丈夫だぁ…」

（全然大丈夫じゃないな……）

ツバキ教官のもとでひたすらトレーニングに励んでいた二人はもはや立ち上がる気力すらなかった。

何せ腕立て伏せのあと

・背を預ける場所がない状態で腹筋
・腹がつかない状態で重りを背負っての背筋
・高さ３ｍ７０ｃｍに設置されたマーカーにタッチしなければならないジャンピングスクワット
・剛速で飛んでくるボールをフェイスガード無しで避ける

…等のメニューを消化していたのである。シュンが「訓練で死ぬなよ」と言っていた意味がよくわかった二人である。

「しかし驚いたな…全てこなしてしまうとは…」

『……へ？』

「大概はトレーニングのあまりの密度の濃さに途中でリタイアしてしまうのだが…全てのメニューを消化した新人はいつ以来だったか…。まあいい。二人とも今日は本当によく頑張った。ゆっくり休め。

」

「……てことは無理して全部やらなくってもよかったってこと～!?」

コウタが落胆の悲鳴をあげる。

ハイドも大声をあげて不満を漏らしたかったが余計疲れるのでやめた。

そもそも彼ら二人が何故メニューを全てこなしてしまったのか?

それはハイドがペースを乱さずに黙々とメニューをこなしていくのを見ていたコウタが、「負けられない!」と張り合ったせいなのである。そしてハイドもそんなコウタの気配を肌で感じ取り、「そうはいくか!」と同じく張り合ってしまったのである。

といういきさつで二人は己の筋肉と体力の限界に挑んだのであった。

「…戻ろうかコウタ?なんなら手を貸すぞ?」

ハイドは気力を振り絞って立ち上がり、床でへばっているコウタに手を差し延べる。

「ふ、ナメるなよ…このコウタ様の底力をぉ!」

と言って腕に力を込めるが……立てない……。

「…ハイド…立ち上がるのだけ手伝って…」

言われてハイドはコウタの手を引き、立ち上がらせる。コウタはなんとか自力で立っているが、生まれたての動物のように膝がガクガクしている。

やがてバランスを崩し尻もちをついた。

「悪ぃ……手ぇ借りるわ……」

ハイドはコウタの右腕を自分の肩にまわして、歩きだす。

「帰れそうか？」

ツバキは自分もフラフラなはずなのに他者に手を貸すハイドに言った。

「……なんとか頑張ります。失礼します」

そう言ってハイドとコウタは訓練場を出た。

なんとか根性でエントランスに戻った二人はヒバリのもとへ向かった。

「あ、ハイドさんにコウタさん……大丈夫ですか？」

「まあ……なんとか……」

ボロ雑巾のような二人を見てヒバリは心配した。そしてそれにハイドが答える。ハイドは今もコウタに手を貸しているので、事情を知らぬ通行人は何があったんだ？という目で見ていた。

「とにかく、ミッションは完了しました」

ハイドはとりあえずミッション完遂報告をする。

「では、こちらの書類にミッションの参加メンバーと任務地、ミッション中に行ったこと、それからミッション完了後の自分を含めた部隊員の状態を記入して下さい。『環境及び建造物の破損状況』の項目は、今回の任務には該当しないので記入の必要はありません。何かわからないことはありますか？」

と、ヒバリは書類をカウンターの下から取り出して説明をする。

「いえ、大丈夫です」

力なくハイドはそう言うと書類を受け取り、コウタに持たせた。自分はコウタを支えることに両手を使ってしまっているからである。

「原則として、ミッションの報告書の提出は、『そのミッションを行った時刻から２４時間以内』となってます」

「わかりました」

（２４時間か…今すぐに書いてゆっくり休まないと身体がもたないな…）

そのとき左肩がズシッと重くなった。そして自分の足元に、さっき受け取った書類が落ちている。コウタの方を見ると、彼はすーすーと寝息を立てていた。

（眠っちゃったのか…）

ハイドは書類を拾うと口にくわえた。そしてコウタを手近なソファに寝かせる。テーブルの上に書類を置くと改めてヒバリの方へ戻った。

「コウタさん、今日は頑張ったんですね。立ってても眠っちゃうなんて…」

「そうですね…まったく同じメニューこなしてた僕が言うのもなんですけど」

そう言って二人はコウタの方を見る。横向きだった体勢が仰向きになり、安らかな寝息はいびきに変わっていた。

「熟睡してますね」

「クスクス…それではこちらが今回の任務の報酬です。」

ヒバリは二つの袋と１０と刻まれたｆｃ『フェンリルクレジット』硬貨１２枚（二人分）を手渡す。

「袋の方には、戦闘で使われる消費アイテムが入ってます。これからたくさん使うことになるので持っていて損はないと思います。ちなみに本来はこの袋に、討伐したアラガミの素材が封入されます」

「ありがとうございます」

礼を言ってハイドは報酬を受け取ったが、もう全身が笑ってしまっているので少しでも気を抜けば落しかねなかった。

「お疲れ様でした。ゆっくり休んで下さいね」

「はい…」

ようやく報告が終わったハイドはコウタの横に腰を下ろす。

（…明日筋肉痛で動けないとかないよな…）

勤務初日でこの疲労感…まさにお先真っ暗である。

（さて…ペンも満足に握れないけど、さっさと報告書片付けるか。早く身体洗って寝たいし）

そんな思考をしてハイドは報告書にペンを向けた。

「……タ……ウタ……コウタ！」

「…んぁ？」

ハイドの呼び声にコウタは目を覚ます。

「…あれ？俺は…」

「誰？とか言うなよ？お前、報告書の説明受けている最中に眠っちゃったんだ。１時間くらい寝てたよ」

「…そっかぁ…じゃああと１０時間…」

「寝るなっ！報告書はもう片付けたから、あとは食事とってシャワー浴びるだけだ！」

ハイドの言葉にコウタが反応する。

「食事…飯……メシ！」

言われて急に空腹を覚えるコウタ。

「ほら、食堂いくぞ」

「おう！」

いきなり元気が出てきたコウタであった。

食堂にたどり着くと、中には食事をしているゴッドイーターたちが何人かいた。皆任務に駆り出されているのか人数は少ない。二人が食堂の中を見回していると後ろから配膳係のおばちゃんに話し掛けられた。

「おや、見ない顔だね…新人さんかい？」

「ええ、まあ」

ハイドはおばちゃんに返事をする。

「勤務何日目なの？」

「まだ初日だよ」

今度はコウタが返事をする。

「そうかい。新人の初日の訓練といえば『あれ』だからねぇ～…二人とも大変だったでしょ」

（大変なんてレベルの話じゃないなあれは）

などとハイドとコウタは思う。

「じゃあそんな二人にはこのメニューだね。『フェンリル特製栄養特化定食』！」

「何それ…」

コウタが反応する。明らかに怪しい…名前が。一歩引いてしまっても仕方がない。

「フェンリルはもともと製薬会社でね。薬以外にも、栄養に関する研究もやってたのさ。その研究成果の結晶がこの定食でね。完食すれば、一日に人体に必要な栄養素を全て、無駄なく摂取出来るのさ。しかも、フェンリル独自の秘密の科学技術で、全ての栄養素それぞれを身体に吸収しやすくする成分も入ってるんだよ。勤務初日の新人さんは朝から何も食べてないからね～。おまけに筋肉をめたために痛め付けるし…。だから味の保証は出来ないけど、今まで新人には例外なくこのメニューを出してるのさ。」

味の保証はできればしてもらいたいのだが、腹に収まれば何でもいいやとハイドは思った。このご時世だ。贅沢は言ってられない。

「わかりました」

「じゃあ一人５０ｆｃね」

「……」

今二人の所持金はそれぞれ６０ｆｃ……ここで５０ｆｃ払えば残りは……

「コウタ……」

「……何？」

「……無駄遣いは禁物だぞ……」

「…了解…」

そして二人はお金を払い定食が載ったトレーをテーブルまで持っていった。

「大丈夫かな……味……」

定食とはよくいったもので、コップに注がれた飲み物はオレンジ色の液体で、皿に盛りつけられたものも全てレーションという栄養食品である。

「……いただきます」

食事が終わったあと二人はシャワールームに来てシャワーを浴びて

いた。

「なあハイド」

「何？」

「あの定食割と美味かったよな」

「ああ…」

予想に反して味は普通だった。いや、それどころかむしろおいしかった。空腹の度合いがその味を助けているのかもしれない。
背中をタオルでわしわし洗いながらハイドはコウタに答える。

「な～…やっぱココしんどくね？トレーニングは量多いし収入は少ないし…」

「収入が少ないのはアラガミを倒してないからだと思うけど…」

「ていうかさ～…やっぱこの腕輪邪魔なんだよね～…身体洗う途中でゴツゴツ当たって痛いし…」

「……確かに」

実際ハイドも頭を洗っているとき何度か腕輪をぶつけていた。

「これって肉体と完全に融合してるから一生取れないんだろ？」

「らしいね…まあそのうち慣れるよきっと」

二人は何とか一通り身体を洗い終わりシャワールームを出た。

「じゃあお互い明日も頑張ろうぜ」

新人区画の自室の前でコウタが言った。

「うん。…あ、コウタの部屋って隣なんだ」

朝はすぐにシュンについてエントランスに移動したため確認していなかった。確かにコウタの部屋がハイドの部屋の隣に位置している。

「おう！いつでも遊びに来ていいからな！んじゃっおやすみ～」

「ああ、お休み」

笑顔でハイドはそう答えると自分の部屋に入る。

改めて見ると本当に綺麗な部屋だった。

「外部居住区の皆…どうしてるかな…」

ゴッドイーターとなった自分は今、（この時代にしてはだが）随分と優遇された立場にいる。配給や報酬…寝床もしっかりしている上、アラガミと戦える力も手にした。外部居住区の皆と別れるとき一部の人間から羨望と嫉妬の眼差しで見られ、ハイドはそのことに申し訳なさを感じていた。

「……寝るか」

ハイドはベッドに潜り込み明日以降の生活に思いを馳せる。休みに

なったら皆にお土産をいっぱい持っていこう…それがゴッドイーターになった俺に出来ることだから…そんなことを思っていたが、目を閉じた瞬間に疲労しきった肉体がすぐさまハイドを眠りの海に引きずり込んでいった。

五喰：睡眠と食事を貪る者（後書き）

本当にフェンリルの食事ってどうなってるんだろう…。イラスト集にはエントランスで第一部隊が食事してる描写があったんですが、どういうシステムで食事が出てくるのか分からなかったので、今回は自分の勝手な都合でフェンリルに食堂を設置しました（笑）

いや……でも、多分あると思います。あるハズ…（汗）

あ、あと主人公のエディット設定を紹介します。ゴッドイーター持ってる人はこれでイメージして下さい。

ヘアスタイル：5
ヘアカラー：4
フェイス：1
スキン：6
トップス：3
ボトムス：3
ボイス：2

以上が神霧ハイドのキャラ設定です。個人的にボイス2はすごいお気に入りなんです。『ゴッドイーター』のときは仲間をリンクエイドするとき、「まだいけるか？」や「仕事の続きだ」などという声をかけるんですよ。しかもクールだけど優しくて温かい印象を与えるカッコイイ声で。自分の理想的なキャラボイスでした。なので『バースト』になってから冷たい台詞が増えたのが残念な気持ちになったという記憶があります。

六喰：兵装訓練（前書き）

ハイドが神機の扱いと強化方針について悩みます。そしてようやくリッカの姐御登場です。

六喰：兵装訓練

あの地獄の特訓から一週間が経過した。すでにハイドとコウタは、オラクル細胞と適合して強化された身体に慣れており、引き出す力も理論上はほぼ１００％という、計測器からの結果も得ていた。

今二人は神機の扱い方について学んでいるが、それもすでに最終過程となっていた。

「……以上のように、異なるオラクル細胞を捕喰した神機はそれを解体、生成することでバレットを入手できる。そのバレットを『アラガミバレット』という。どんな弾が手に入るかは捕喰したアラガミによって異なる。『アラガミバレット』はもちろんアラガミに対して撃つことも可能だが、仲間の神機へ撃ち渡すことでその神機使いを強化することができ、更にその神機の中でアラガミバレットを解体、生成することで『濃縮アラガミバレット』を入手できる。通常のアラガミバレットより強力なうえ、そのバレット、及び神機使いのバーストレベルを二段階まで引き上げることができるようになる。これが新型神機使いの新しい戦術、『リンクバースト』だ。なおこの『リンクバースト』は、使用者の身体的ダメージが大きくなるのを防ぐためにレベル３までしか発動できないよう調整されている。…ここまでの説明は理解できたか？」

「はい」

ハイドはツバキの長い説明を理解しハッキリと言い切った。

「よろしい。では早速演習を始めよう。」

そう言ってツバキは合図を送ると、床から牙が片方欠けた大きな獅子が競り上がってきた。

「うわぁっ！」

横にいたコウタがビックリして飛びのき、ハイドは身構えたが、その獅子はぴくりとも動かない。

『……？』

「安心しろ。それは訓練用のダミー模型だ。」

ツバキの言葉に二人は安心する。それはそうだ。いくら鬼教官ツバキだからといって、なんの実戦経験もなくこんなアラガミと戦わせたりするはずがない。

「ハイド。その模型の中には、オラクル細胞の詰まったパックが埋められている。模型を捕喰してバーストした後、コウタにアラガミバレットを受け渡せ。」

そういうことかとハイドとコウタは理解した。

「了解！」

ハイドは神機に意識を集中する。すると神機のパーツがモゾモゾと動き出し、中から黒い大きな口が出てきた。それを模型に向けて突き出すと捕喰が始まり、模型の外殻とともに中に詰まったパックが口に飲み込まれた。

その瞬間、ハイドは身体の奥底から膨大な力が湧き出てくるのを感

じた。

「これが…バーストか…！すごい力だ…！」

オラクル細胞が活性化した影響で身体中が発光し、ありとあらゆる感覚が研ぎ澄まされていく。

続いてハイドは、神機を剣形態から銃形態へと変形させるため、神機を握っている右手に意識を集中させる。神機は捕喰形態に加え、剣、銃、装甲の展開など、ほぼ全ての動作を神経伝達によって行うことが出来る。いわば体の一部だ。

剣が収納され、収納されていた銃が顔を出した。そして入手したアラガミバレットを装填し、コウタの神機に向けて発射する。

光を纏ったアラガミバレットはコウタの神機にまっすぐに飛び、命中した。

「うおおぉぉぉ！！すっげぇ！！」

コウタもまた溢れ出す力に驚く。

「よし…バーストの演習はこれで終了だ。コウタ、お前は先に戻れ。ハイドにはいくつか言っておかねばならんことがある」

「え？あ…はい！わかりました。じゃあハイド、俺先に戻ってるからな」

「ああ…」

コウタが訓練場を出たのを確認して、ハイドはツバキの方へと体を向ける。

「お前だけ残してすまんな」

「いえ…話ってなんですか？」

ハイドはツバキが自分をこの場に残した理由を聞く。

「お前には特に、頑張ってもらわねばならんのだ」

「？はい、もちろん頑張りますが…」

ハイドはツバキが何を言いたいのか、いまいち掴みかけていた。

「チームに一人投入するだけで…ミッションの成功率の向上や隊員の生還率の向上…ミッションに要する時間の短縮にまで貢献すると言われている新型神機使い…それにお前は選ばれてしまった」

「……」

「一人で遠距離、近距離それぞれをこなすという戦法…戦闘中に神機を変形させるという今までにない動作…剣、銃、装甲、それぞれ三種…計九種類の兵装を扱うなど、新型神機使いにかかる負担は大きい。それゆえお前には、通常の神機使いよりもやらなければならないことが山ほどあるんだ…」

ああ、そういうことかとハイドは納得する。

「それにこの極東支部の連中は、新型神機使いを見たことがない…

お前にかかる期待も大きくなるはずだ」

「ツバキさん…」

ハイドが口を開いたので、ツバキは一旦話を止めた。

「選ばれてしまった以上仕方のないことですよ。それに拒否権もないんでしょう?まあ『嫌だ』とか『やめたい』とか言う気もありませんが…。ただ、僕が努力することで皆の負担が軽くなるのなら…どんなに沢山のことをこなすことになっても構いません」

そう言い切ったハイドの瞳には強い意志が宿っていた。

「……そうか。つまらんことを話をしてすまなかったな」

「いいえ。そんなことはありませんよ」

「私から言いたいことはそれだけだ。戻っていいぞ。」

「はい！」

そしてハイドも訓練場から出ていった。ガラス越しに訓練を見ていたツバキ。その横でデータを取っていた研究員が彼女に言う。

「強い子ですね…」

「フ…ああ…そうだな」

ハイドは神機を『神機保管庫エリア』に格納したあと、整備場へと向かった。聞いておかなければいけないことがある…その話の内容

的に、ツバキよりも実際に整備している人に聞いた方がいいと判断したからだ。

整備場の中は、汗と白いタンクトップとゴーグルの男達の巣窟だった。その中の一人がこちらに気づいて近づいてきた。

（…随分と華奢な人だな…というより……女の子？）

男ばかりだと思っていた整備場には女の子が一人だけいた。顔に少し黒い汚れがついているが、そのせいで元々の肌の白さが際立ち、つぶらで大きな瞳は幼さを残している。

「あれ？見ない顔だね…新人君？」

女の子は腕を組み、小首を傾げて聞いた。

「はい、先週入隊した神霧ハイドです」

ハイドは「今更だけどまだ挨拶してない人がいたんだな…」と思った。この一週間で一通りは済ませたはずだったが、四日目あたりまでは神機にロクに触っていなかった為、神機整備をしている人に挨拶するのを忘れていた。

「私はリッカ。『楠リッカ』っていうんだ。第一から第三部隊までの神機の整備担当者だよ。よろしくね」

リッカは大きな作業用手袋を外してハイドと握手した。……意外と力強い。

「それで…何の用？確か君が新型神機使いなんだよね？新型神機に

ついて何か分からないことがあって、それを聞きに来たって感じかな？」

「あ、はい…新型神機の変形時間の短縮方法とパーツの制作方針です」

「あ～新型神機特有の悩みってやつか～…」

リッカは首を捻って考え込む。そして少しの間をおいて口を開く。

「神機の変形については…残念だけど慣れるしかないね。神経伝達で変形してるから、慣れれば動作も速くなると思うよ。ただ、変形機構のパーツが摩耗したりすると、少しだけどタイムロスが出るから、神機の変形に違和感を感じたらすぐに教えてね」

「慣れ……ですか。わかりました」

「あとはパーツの制作と強化の方針だね。これについては『この方がいい』みたいな定義はないけど、最初は属性値の高さよりも、その人の扱い易い武器を優先して強化した方がいいと思うんだ。どの武器や装甲も、満遍なく強化出来ればそれが一番いいんだけど…そんなことしたら手持ちの素材もお金も無くなっちゃうしね。まずは君にとって使い易い武器の組み合わせを探してみたらどうかな？…まあこれは私の個人的な意見だからあまり参考にならないかも知れないけど…」

といってリッカは頬を人差し指でポリポリ掻く。

「いいえ、すごく参考になりました。ありがとうございます！」

「ふふっ…どう致しまして。…ところで君っていくつなの？」

リッカはふと興味が出てハイドに質問する。

「え？…１８ですが…」

「タメじゃん！敬語はやめてよ～」

「いや、リッカの年齢知らなかったし…」

「順応はやっ！」

「……ぷ…くくっ…」

「…ふ……あははっ」

二人はひとしきり笑ったあと…

「んじゃ、改めてよろしくねハイド」

「こちらこそ、世話になるよリッカ」

「リッカの姐御ぉ～！！ちょっと来て下さ～い！！」

と、リッカの後ろから若い整備士が叫ぶ。

「じゃあ、もう戻るね」

「うん」

リッカは軽く手を振って職場に戻って行った。

（姐御…けっこうキャリアあるのかな…見た感じ年上の整備士にまで指導してるし）

そしてハイドも整備場を出た。

（そうだよな…まずはたくさん神機に触れてからだ…パーツも全部試して一番やりやすい組み合わせを探して…）

あれこれ考えているうちにハイドはエントランスに戻って来ていた。

「あっハイド～どこ行ってたんだよ～探したんだぞ！」

コウタがぶーぶーと文句を言う。

「悪いな。整備場に行ってた」

とハイドは詫びる。

「整備場？神機もう壊したのか？」

「違うよ。ちょっとな」

「ふ～ん…まあいいや！飯食いに行こうよ！」

腹減ったしさ～、とコウタはハイドを誘った。

「いや、先に行っててくれ」

ハイドはあっさり断る。

「ちょっと用事ができた」

「ちぇ～…わかったよ。けどあんまり遅くなるなよな。明日もあるんだし」

「ああ、わかってる」

そう言ってハイドは訓練場へと向かった。

「ふぅ～……よっと！」

ハイドは呼吸を整えて神機を変形させる。

「だいたい2秒くらいか……まだまだだな」

ハイドは1秒内での変形を目標としていた。戦闘中にもたついている暇などない。

「まあ少しずつ速くはなっているかな…あとは扱い易い武器パーツの組み合わせ探しか…何回訓練ミッションを受注しないといけないのかな…」

気が遠くなるような話だが悩んでいるよりまず実行だと、再び変形練習を繰り返した。

「では神霧ハイド・藤木コウタ両名は、第一部隊に配属してよろしいのですね？」

と、ツバキはシックザールに確認をとる。

「そうだ。新人の実戦指導はいつも通り、リンドウ君で頼むよ。彼が率いる部隊の生存率は極東支部においてもトップだからね。貴重な人材を無駄にしたくはない」

「わかりました」

そう言ってツバキは支部長室を出た。

後日、朝一で呼び出された二人は、第一部隊部隊配属の知らせをツバキから聞き、いよいよアラガミと戦うのだということを実感していた。

「いよいよだな」

「ああ……母さん、ノゾミ…見ててくれよな…」

家族に誓うコウタを見てハイドも気を引き締める。

「明日はハイド、お前が先に任務に出撃することになっている。私の弟がマンツーマンで戦いを教えるから心配するな」

「わかりました」

「その後にコウタが同じような内容の任務に出る。こちらにも私の弟を出させる」

「了解っす！」

「最後にこれだけは言うが…死ぬなよ…必ず生きて帰ってこい！」

『はい！』

明日は二人の初陣だ。

六喰：兵装訓練（後書き）

次の話でようやくリンドウとの初陣です。ここまで来るのが長かった…。

次の話はバトルパートになります。まだ書いたことのない領域なので、たとえつまらなくても大目にみてあげてください。

七喰：リンドウとの初陣（前書き）

ようやくバトルパートです。久々のリンドウ登場です。

七喰：リンドウとの初陣

ハイドはエントランスのソファに腰掛けて人を待っていた。これから出撃する任務に同行してくれる人…ツバキ教官の弟と言っていたが…。

考えにふけっていると、カウンターの方からヒバリの声が聞こえた。

「あ、リンドウさん！支部長が見かけたら、顔を見せにこいって言ってましたよ？」

「オーケー、見かけなかったことにしといてくれ」

ハイドはなんだか適当そうだなと思った。

「いよーぅ新入り」

（この人が、ツバキさんの弟であり、世界各地の支部や本部を合わせても五指に入るほどの力をもつゴッドイーター…）

「俺は『雨宮リンドウ』。形式上お前の上官にあたる…が、まあめんどくさい話は省略する。とにかく、とっとと背中を預けられるくらい育ってくれな？」

「あ、もしかして新しい人？」

その時、たまたま通りかかった、やたらと露出度の高い綺麗に切り揃えたおかっぱの女性が声をかけた。

「お、そういえば名前聞いてなかったな」

二人の視線を受けハイドは姿勢を正す。

「昨日付けで第一部隊配属となりました、神霧ハイドです」

と名乗り、ハイドは一礼する

「俺は名乗ったからあとはお前だけだ」

「はいはい。私は橘サクヤよ。同じ部隊なのね～…助かるわ～」

とサクヤはニコニコしながら言う。

「さて、自己紹介も終わったことだし…あ～今厳しい規律を叩き込んでるんだから、あっち行ってなさいサクヤくん」

「了解です、上官殿」

なんだか慣れた様子の二人だ。

（付き合い長いのかな？）

サクヤはハイドに軽く手を振って去って行った。

「とまぁ、そういうわけでだ…早速お前には実戦に出てもらうが、今回の緒戦の任務は俺が同行する……っと、時間だ。そろそろ出撃するぞ」

「はい！」

二人は神機保管庫エリアに移動し、自分の神機が納められたケースを持ち、ヘリに飛び乗る。

さほど時間はかからずにヘリは任務地「贖罪の街」へと到着した。かつて人々が生活していた大都市だったが、アラガミの出現直後に崩壊し、無惨に食い破られたビル郡が今も残っている。

「ここも随分荒れちまったな…おい新人、実施演習を始めるぞ。…命令は３つ」

「命令」という単語を聞いてハイドは身をかたくする。

「死ぬな。死にそうになったら逃げろ。そんで隠れろ。運が良ければ不意をついてぶっ殺せ。…あ、これじゃ４つか…」

リンドウの数え間違いにハイドは思わず吹き出してしまった。それを見てリンドウは微笑む。

「そうそう、肩の力を抜いてな。とにかく生き延びることだけを考えろ。生きてさえいりゃ、あとは万事どうにでもなる」

「はい！」

リラックスしたハイドの返事に満足したリンドウは街へと向き直る。

「さあて…おっぱじめるか！」

そして二人は夕暮れの街へと駆け出した。

「お！お前の神機のパーツ『ショートブレード』に『アサルト銃身』に『バックラー』か～…また随分とスピード重視の組み合わせにしたものだな…」

ショートブレードはリーチは短いが、軽くて振りやすく、攻撃の手数が多い。アサルト銃身は扱い易い「弾丸」という種類のオラクルバレットを得意とする銃身で、撃った後の隙も少なく割と軽い。バックラーは防御力こそあまり高くないが、全装甲の中で最も展開スピードが早い。ハイドの今日の神機は超高機動セッティングである。

「今日の討伐対象はオウガテイル一体だぞ？そこまで徹底する必要なかったんじゃないか？」

「戦闘中の神機の変形にどのくらい時間がかかるのか分からないんですよ」

走りながらハイドはリンドウの方を見てそう話す。

「なるほどな…そのタイムロスのカバーってことか。新型神機ってのは何かと面倒だな」

「最初のうちはこの装備でいきます。戦いに慣れていったら違う装備も使って、どんな戦いにもメンバーにも対応出来るようになります」

「ははっ…頼もしいこった」

そんな話をしてたら、二人は討伐目標を発見した。オウガテイルが歩きながらこちらに向かって来る。二人は建物の影に隠れ飛び出すタイミングを窺う。その時リンドウが小声でハイドに後ろから言っ

た。

「一発、ブチかましてやれ」

ハイドは頷くと、物影から勢いよく飛び出す。

突然飛び出してきたハイドにオウガテイルは警戒態勢になるが、ハイドは素早く横に回り込み五回の斬撃を入れる。

オウガテイルが怯んで倒れ込み、ハイドは素早く神機を構える。

中から黒い口が出現し、それをオウガテイルに突き出す。

「隙だらけだな！」

ブシュっと血の吹き出る音がして、オウガテイルの血肉を噛みちぎられた。

「うおおぉぉぉ！！！」

身体に力がみなぎりハイドはバーストした。その間にオウガテイルが立ち上がり、ハイドに噛み付こうとする。ハイドはバックステップで後ろに下がりながら神機を剣から銃へと変形させる。

（まだ2秒か…）

更にバックステップで距離をとるハイド。するとそれを見たオウガテイルは、尻尾を一度振り、もう一度ハイドに向けて大きく振る。

オウガテイルの尻尾から放たれたのは、三方向へ飛ぶ刺だった。し

かし刺が放たれるまでの一瞬の間に、ハイドは距離を詰めてその銃口をオウガテイルに向けていた。

「喰らいな！」

その言葉とともにアラガミバレットが放たれた。

近距離で強力なアラガミバレットを撃たれたオウガテイルは苦悶の声をあげる。

「これで終わりだっ！！」

神機をすぐさま剣へと変形させたハイドがとどめの一閃。

「おーおー…俺の出る幕なしか…」

「リンドウさん！」

影で見守っていたリンドウが出てきた。

「ああ、そうそう。倒したアラガミは捕喰して素材を回収しとけよ」

「あっはい！」

そしてハイドはオウガテイルを再び捕喰し、素材を回収した。

「んじゃ、引き上げるか」

「そうですね。行きましょう」

二人はヘリの待機地点へと向かって歩いていく。その後ろでは残されたオウガテイルの肉片が黒く霧散し地面に引きずり込まれるように消えていった。

「しかしなかなかやるな～…この分だと小型アラガミ程度なら俺がいなくても大丈夫か？」

「なに言ってるんですかリンドウさん。僕はまだ一度しかミッションに出撃していないんですよ？」

「はは…冗談だ」

帰投する途中のヘリの中で、ハイドとリンドウは言葉を交わしていた。

「まああれくらい動ければ問題ないだろう…だがなんにしても、生き残れよ」

「はい…」

何となくだがハイドは、リンドウが世界屈指のゴッドイーターと言われるわけがわかる気がした。何よりも生き延びることを大切にし、彼自身もその言葉を守って今、こうして生きている。

リンドウは後に、ハイドの憧れであり…目標となるが、それはまだ先の話である。

二人を乗せたヘリは風に揺られながらアナグラへと帰っていった。

七喰：リンドウとの初陣（後書き）

リンドウを空気にしてしまいました。リンドウファンの方ごめんなさい…。

バトルを読みやすく書けたか不安です。これから先のバトルも不安です。

八喰：『ペイラーサカキのなぜなに講座』（前書き）

ちょっと短めですが会話が一方的に長い話です。

八喰：『ペイラーサカキのなぜなに講座』

「やぁ～来たね～」

初任務が完了した後、ハイドとコウタは榊博士の部屋を訪れていた。

「講座を開くから研究室に来てほしい」とお呼びがかかったのだ。

「さあ、適当なとこに掛けてくれ」

言われて二人は手近なソファに腰掛ける。それを見て榊が咳ばらいし、講座が始まった。

「さて、いきなりだけど…ハイド君はアラガミってどんな存在だと思う？」

「アラガミの存在…ですか…？」

「『人類の天敵』、『絶対の捕喰者』、『世界を破壊する者』…まあ、こんな所かな？これらは認識としては間違っていない。むしろ、目の前にある事象を素直に捉えられていると言えるだろうね…」

『……』

「じゃあ、何故どうやってアラガミは現れたのか…って考えたことあるかい？…君たちも知っている通り、アラガミはある日突然現れて、爆発的に増殖した…そう…まるで進化の過程をすっ飛ばしたようにね」

「ふぁ～……」

とあくびをしたのはコウタだ。

「なぁ～…この講義ってなんか意味あんのかな？アラガミの存在意義なんてどうでもよくね？」

とコウタは小声でハイドに話す。

「そうかね？」

いつの間にか榊がコウタの後ろに立っていた。コウタがビックリしてすぐさま振り返る。

「アラガミには脳がない。心臓も脊髄すらもありはしない。私達人間は、頭や胸を吹き飛ばせば死んじゃうけど、アラガミはそんなことでは倒れない。アラガミとは考え、捕喰を行う一個の単細胞生物…『オラクル細胞』の集まり…そう、アラガミは郡体であり…それ自体が数万、数十万の生物の集まりなのさ。そしてその強固でしなやかな細胞同士の結合は、既存の兵器では全く破壊出来ないんだ。じゃあ私たちはアラガミとどう戦えばいいんだろうね？」

「え、え～と…とにかく神機で斬ったり撃ったり…」

焦りながらもコウタが榊の質問に答える。

「そう…結論で言えば、同じオラクル細胞が埋め込まれた生体武器『神機』を使って、アラガミのオラクル細胞結合を断ち切るしかない…。だが、それによって霧散した細胞群も、やがては再集合して…また新たな個体を形成するだろう…。彼らの行動を司る指令細胞群である、コアを摘出するのが最善だけど…これは中々困難な作業

なんだ。『神機』を持ってしても、我々には決定打がない。いつの間にか人々は、この絶対の存在をここ極東地域に伝わる八百万の神にたとえて『アラガミ』…と呼ぶようになったのさ」

（アラガミはそんな生命体だったのか）

ハイドは自分が戦っている敵の強大さを思い知らされた。

「さて、今日の講義はここまでとしよう。なお、アラガミについてはターミナルにあるノルンのデータベースを参照すること。いいね？」

榊が講義の終了を宣言するとコウタは伸びをして立ち上がる。ハイドも立ち上がり、二人は部屋を出た。

「俺たちが倒したあのアラガミも、また別の形で復活するってことなのか……」

「なんか…やだよな～…折角の努力が水の泡になるのって…」

アラガミについての講義を聞いた二人は、彼らの脅威に打ちのめされた気分だった。

「…でも…」

「…うん…戦うしかないんだよな」

そう。それ以外に生き残れる方法は、今のところはエイジス計画くらいしかない。しかも計画が成功する保障もない。エイジス計画など簡単に打ち砕く強大なアラガミが出現する可能性だってある。結

局のところ、人間は神を語る単細胞生物と戦いつづける運命にある。

「エイジス島が完成するまでは気が抜けないな！」

とコウタは言う。

（エイジス計画にちょっと依存してるのかな？俺が心配し過ぎなだけなのか？）

などと考えていたハイドは、すぐに思考を断ち切る。

（あれこれ考えていても仕方ない…今はまず生き延びることだ。）

「ああ、そうだな」

とハイドはコウタに返事した。そして二人は、明日以降も続く終わりなき戦いに備えるため、自室に戻り身体を休めた。

八喰：『ペイラーサカキのなぜなに講座』（後書き）

榊博士…無駄なく話してますがそれでも長いです。

書いててコウタばりに眠くなりました。

九喰：サクヤとの合同任務（前書き）

サクヤ姉さんが華麗に戦います。書けたかどうかは別として、自分の中では華麗なんです。……すいません、やっぱり華麗じゃないかも。

九喰：サクヤとの合同任務

榊の講義から一夜明け、ハイドはノルンのデータベースを調べていた。まだキーボードの扱いに慣れていないため、そのタイピングは端からみると微笑ましい。

（アラガミ…オウガテイル…）

少し調べればすぐに目的の項目は見つかった。

『オウガテイル…鬼の顔のような巨大な尾を持つ小型アラガミ。主に他のアラガミの死骸などを捕喰し、様々な地域でその数を増やしている。発生地はアメリカ大陸だが、現在では世界で最も個体数が多いアラガミとされている。』

「ふう…」

倒してもやがては復活するアラガミ達…これではまるでいたちごっこだ…というより我々人間の方は、やがてはじり貧になっていくだろう。

（アラガミを完全に討ち滅ぼす方法は本当にあるのか…？）

まだ見つかるはずのない答えを探すことを止めたハイドは、ターミナルを立ち下げた後、エントランスへ向かった。

今日はサクヤとの合同任務だ。聞いた話では、サクヤは旧型銃身神機使いのようだ。

（おそらく自分は前線で陽動、サクヤさんは後方でバックアップといったところだろうな。）

ハイドの今日の神機は、先日リンドウと行ったミッションでの装備とまったく同じ『超高機動セッティング』である。今日の討伐目標は『コクーンメイデン』だ。その場を全く動かないこのアラガミは、頭部からレーザー…開いた胴体からは無数の鋭い刺…視覚の広さを利用して敵を見つけることができる。現在世界に広く生息し、一つの場所に集中して大量発生することもある…などという特徴があるアラガミだ。

ハイドがエントランスのソファでデータベースから仕入れた情報をおさらいしていると、サクヤがやって来た。先日と同じ露出度の高い格好である。

（みんな他の服持ってないのかな？）

服に対する疑問が頭に浮かぶがすぐに打ち消し、ハイドはサクヤに挨拶した。

「おはようございます。サクヤさん」

「はあ～い。おはよう」

明るい挨拶で「気さくなお姉さん」の雰囲気を出しているサクヤ。

「今日の任務ではよろしくね！」

と、サクヤは微笑みながらハイドに言った。

「はい！こちらこそ、よろしくお願いします！」

二人の今日の任務地は「嘆きの平原」だ。常に雨が降り続けている地域で、丸く広い平原となっているこの場所は、かつてはビルが建ち並ぶ都市の一部だった。今となってはアラガミの徘徊ルートになっており、その中心に吹き荒れる巨大な竜巻は、実はアラガミが引き起こしているのではないかと言われている。因果関係があるのかは不明だが、この近辺は巨大なアラガミも目撃されている。

サクヤはアラガミの声が辺りに響いたのを聞くとすぐに表情を変え、さっきまでとは打って変わって真剣な空気を漂わせた。

「早速ブリーフィングを始めるわよ。」

ここに来るまで聞いていた優しい声、それが今はただただ凛々しい。

「今回の任務ではハイドは前線で陽動、私は後方でバックアップします。遠距離型の神機使いとペアを組むときは、これが基本戦術だからよく覚えておいて。くれぐれも先行しすぎないように。後方支援の射程内で行動すること…ＯＫ？」

「はい！」

ハイドの声を聞いたサクヤは「ふふ…」と微笑んだ。

「ちょっと緊張してる？」

「あ…はい…」

「肩の力抜かないといざという時身体が動かないわよ？」

サクヤはそう声を掛け、ハイドの緊張をほぐす。

「…わかりました！」

やはり経験と生きた歳月の違いか、リンドウもサクヤも緊張のほぐし方が上手だ。リンドウは冗談で、サクヤはギャップで隊員の気持ちを落ち着かせる。この辺り「さすがだな」と思うハイドである。

「ん！素直でよろしい！頼りにしてるわ。…さあ、始めるわよ」

再び声と表情を戦闘モードに切り替えるサクヤ。それに頷いたハイドは、待機地点から飛び降りて今日の討伐目標…コクーンメイデン３体の索敵を始めた。

そしてハイドはまず一体目のコクーンメイデンを発見した。向こうはこっちより先に気づいたらしく、レーザーを放ってくる。ただ目標に向かってまっすぐに飛ぶレーザーはホーミング性能がない…そのことを知っていたハイドは横にスライドしてかわす。続けてレーザーを撃ってくるがそれもかわし、大きくジャンプしてコクーンメイデンの後ろを取った。コクーンメイデンがこちらを向いた瞬間に、その頭をレーザーが貫いた。サクヤが後ろから、コクーンメイデンの頭を狙ってくれていたのだ。

ハイドは怯んでぐったりと身体を倒し、だらし無く開いたコクーンメイデンの胴体に捕喰形態の神機を突っ込んだ。

「これでどうだ！」

バーストしたハイドは一気に斬撃を叩き込み、一体目のコクーンメ

イデンを撃破する。

（さすがね～…今日は余り補助しなくて済みそうかな？）

なんて不謹慎なことを思うサクヤ。もちろんそんなことするつもりは彼女にはないが。

そうこうしているうちにハイドは地を駆け、二体目のコクーンメイデンに向かっていた。ハイドとコクーンメイデンの距離が２０ｍほどになったときサクヤはレーザーを放った。レーザーはハイドの脇をすり抜けるように飛び、コクーンメイデンの頭にまた命中した。バーストが続いていたハイドは再び斬りかかり、あっという間にコクーンメイデンを倒す。

「（…あと一体か）サクヤさん！」

そしてハイドは剣形態から銃形態へと神機を切り替え、サクヤに光の弾を三発発射する。

「え！？なに！？」

突然のハイドの行動に驚くサクヤ。そしてその弾はサクヤの神機に命中し、『リンクバースト』が発動した。力がどんどん溢れてくる身体にサクヤが驚く。

「なんなのこれ…すごい力…！」

サクヤはゴッドイーター人生で初のバーストを発動した。それは旧型銃身神機は捕喰機能が備わっていないのと、機能が備わってる旧型刀身神機にアラガミバレットを受け渡すのに必要な銃身がついて

いないことが関係している。

（これがリンドウやソーマがいつも発動しているバーストなのかしら…？だとしたらちょっとズルイわね…後で文句言おうかな）

そしてサクヤは自分の神機に装填した覚えのないバレットがあることに気づく。

「…そういうことね！」

サクヤがバーストした変わりに、ハイドのバースト時間が切れた。二人は最後のコクーンメイデンへ向けて駆け出す。

コクーンメイデンは二人を見つけるとすぐさまレーザーを放つが、二人はそれをかわし、まずハイドが地を蹴り飛んだ。ショートブレードを突き出して空中から一気に突進する。コクーンメイデンはその剣に切り裂かれたのち…。

「終わりよ！！」

サクヤの濃縮アラガミバレットＬＶ３の直撃を受け、最後のコクーンメイデンはその活動を停止させた。

九喰：サクヤとの合同任務（後書き）

旧型銃身神機使いは大変ですよねホント。オラクル細胞の補充は飲料物のみ。バーストは新型がいないと不可。不便過ぎます。

十喰：ソーマとの合同任務（前書き）

ソーマファンの皆さんお待たせしました。ソーマ登場回です。

十喰：ソーマとの合同任務

アラガミを一通り殲滅し終えた後、ハイドとサクヤはアナグラへと向かっていた。

「それにしてもさっきのアレ…なんだったの？」

「アレ…？」

「私を強化した、アレ」

ああ、とハイドは納得した。サクヤが言った「アレ」とは…

「『リンクバースト』のことですね。」

「『リンクバースト』…？」

サクヤは聞き返す。リンクバースト？『バースト』ではなく？なにか違うのだろうか？

「新型神機使い専用の新しい戦術です。アラガミを捕喰した際に手に入る、アラガミバレットを他者の神機に撃ち渡すことで、その者を半ば強制的にバーストさせる方法です。通常のバーストよりも力の増大が激しいため、バーストＬＶは３までしかあげれません。バーストＬＶは、撃ち渡されたアラガミバレットの弾数によって決まるので、今日サクヤさんが発動したのはＬＶ３のリンクバーストということになります」

ハイドは以前ツバキにされたのとほとんど同じ説明をする。

「へぇ～…確かにすごい力だったわ…」

サクヤは先程の感覚を思い出す。身体の内から強大な力が、まるでマグマのように吹き出たようなあの感覚を…。

「…これからはこの戦術の重要性がどんどん増してくると思います。メンバー全員を見渡して、なおかつその時の状況に応じて、最も助けを必要としている人をバーストさせないといけませんし…捕喰攻撃もなるべく増やして、アラガミバレットを確保して、いつでも仲間をリンクバーストできるようにしなければいけません。新型神機使いは本当にやることが多いです」

と、ハイドは力無く笑った顔で言った。

（そっか…いつの日か、誰よりも大変な戦いをしなければならないのね、この子は…）

サクヤはそう思う。新型神機は、剣も銃も盾もバーストもリンクバーストもできて便利…というわけではない。使える戦術が多いために、やらなければならないことがたくさん出てくるのだ。サクヤはハイドに励ましと労いの言葉をかける。

「まあ何はともあれ、今日はお疲れ様！あなたが一人前になるまでは、私もリンドウもできる限りサポートするから、安心して」

ハイドはサクヤにそう言われると…

「サクヤさん……ありがとうございます！」

ニッコリ笑って感謝した。

サクヤとの任務があった次の日、ハイドは任務で『鉄塔の森』と呼ばれる場所に来ていた。この場所は、近隣の都市に電力を供給していた発電施設の跡だ。環境の急激な変化による緑化と、乱立する鉄塔によって、その景観は森林の様相を呈している。アラガミによる地下施設の侵喰によって大部分が水没しており、かつての喧噪が絶えたあとは、水の流れる音だけが悲しく響き渡っている。

今日の任務は自分を含めて三人の部隊で臨むことになっている。

ハイドが神機を持ってヘリから降りると、少し離れたところで青いモッズコートのフードをかぶった白髪褐色肌の青年と、胸、腕、腹、背中に書けてタトゥーが入っている、赤髪でサングラスをかけた青年がなにやら話をしていた。

ハイドが近づくとサングラスの青年が手を振りながらこっちにやってきた。

「ああ、君が例の新人クンかい？噂は聞いているよ。確か神霧ハイド…だったかな？僕はエリック。エリック・デア＝フォーゲルバイデ。君もせいぜい僕を見習って、人類のため華麗に戦ってくれたまえ」

「は…はあ…」

（なんか…ちょっと変わってる人だな…）

そんなことを思っていた次の瞬間…。

「エリック！上だ！」

その言葉についハイドは、反射的に後ろに飛びのいてしまった。

「しまっ…！」

「え？」

時すでに遅し…頭上から飛び降りてきたオウガテイルがエリックに襲い掛かった。

「うっ、うわあぁぁぁぁ！！！」

とエリックが叫んだときにはすでに彼の上半身が無かった。一気に人間の半身を捕喰したオウガテイルは下半身もあっというまに喰らい尽くしてしまった。

「ボーっとするな！」

そう叫び青年は巨大な刀身、『バスターブレード』を振るう。

倒れているオウガテイルを尻目に、青年はハイドにぶっきらぼうな口調で言った。

「ようこそ…クソッタレな職場へ…俺はソーマ。別に覚えなくてもいい。言っとくが、ここじゃこんなこと日常茶飯事だ。」

そう言ってソーマは神機をハイドに向ける。

「お前はどんな『覚悟』を持ってここに来た…？なんてな……時間だ。行くぞルーキー。…とにかく死にたくなければ、俺にはなるべく関わらないことだ…」

一方的にハイドにそんなことを言ったソーマは一人で先に行ってしまった。

ハイドの心臓の鼓動はまだ高鳴ったままだった。目の前で人が死んだ…アラガミの手によって。『あの日』の記憶が脳裏をよぎる…。だがハイドは「今だけは忘れよう」と頭を切り替えた。『過去』も…エリックも…。まだこれから任務もあるのだ。悲しんだり落ち込んだりするのは任務が終わった後ですればいい。

瞳をキツく閉じて、頭をブンブンと左右に振ったハイドは、先に行ってしまったソーマのあとを追った。

ハイドはソーマと合流できたが、すでに彼はアラガミと交戦中だった。

（…来たか）

戦いながらソーマは思う。

今日の任務の討伐目標は、『オウガテイル』二体と『コクーンメイデン』二体の計四体だ。慣れていなければ、二人で相手どるのは難しい。動き回るオウガテイルを狙えば、コクーンメイデンがホーミング性のあるレーザーでこちらを狙ってくる。コクーンメイデンを

先に潰そうものなら、背後からオウガテイルが狙ってくる。
だがソーマは敵の攻撃などものともせず、たった一人で対等以上に渡り合っていた。

（すごい…）

ハイドはソーマの戦いの上手さに半ば見とれていた。

（そういえばソーマは俺と同じ歳だけど、神機使いとしては古株なんだよな…）

弱冠１２歳で神機使いとして戦場に出たソーマ。すでに６年のキャリアがあるが、協調性がない上、軍規違反が多いため階級はあまり高くない…そんな話をリンドウから聞いたことがある。

（それよりどうするかな）

見るとソーマは現在オウガテイル二体と戦っていた。
そのソーマを近い方のコクーンメイデンが狙っていた。

（まずは…あいつからだ！）

そしてハイドはコクーンメイデンの死角から入り込み神機を喰らわせる。不意打ちを食らったコクーンメイデンは後ろに振り向くが、その瞬間にハイドに斬り伏せられた。

「ソーマ！」

ハイドはソーマにアラガミバレットを三発撃ち渡す。ソーマの旧型刀身神機はバレットこそ撃てないが、ＬＶ３の剣撃もかなりのダメージを与えることができるはずだ。

「……ほう」

強化された肉体に多少は感心したのか、ソーマは声を漏らす。そしてソーマは自分の前後から向かってくるオウガテイルを斬り倒して、残った一体のコクーンメイデンへと駆けた。

そしてソーマは大きく飛び、神機を振りかぶった。横からはハイドも詰めてきていた。

「くらえ！」

「死ね！」

ハイドの横一閃、ソーマの縦一閃がほぼ同時に交差し、コクーンメイデンは四分割された。

倒したアラガミの素材を回収し終えたハイドは、ソーマの方へと戻った。

「終わったか…なら戻るぞ」

またもぶっきらぼうにソーマは言ったが、その手にはそれぞれ神機が入ったケースが一つずつ持たれていた……。

（ソーマ……あんな性格だけど、もしかして人には優しいのかな……？）

ソーマの背中を追って歩くハイドはそんなことを思っていた。そして同時に……。

（エリック……すまない。…俺が気づいていれば…驚いて後ろに飛びのいたりしなければっ…）

後悔と自責の念は曇り空へと消えていく…。二人を乗せたヘリは、アナグラへと向かって飛び立って行った。

十喰：ソーマとの合同任務（後書き）

やはりソーマはカッコイイです。ハイ。そして……

エリック～～～～！！！死なせてゴメ～～～ン！！！きっと何かの形で出番作るから～～～！！！

十一喰：神霧ハイドの落ち込み（前書き）

ハイドが落ち込む話です。……え？サブタイトルが某作品に似てる？……気のせいではないでしょうか。アハハ

十一喰：神霧ハイドの落ち込み

「……」

ソーマとのミッションの報告が終わったハイドは、エントランスのソファに腰掛けて一人感傷に浸っていた。

彼の身体から発する暗いオーラに、周りの人達はなんだか声を掛けづらかった。

理由はみんなわかっている。ハイドが今日行ったミッションで、ゴッドイーターが一人、殉職した。それも目の前で…。

いつまでも動き出さない自分に踏ん切りをつけ、一人がハイドに向かって歩いていく。それを見た二人も彼についていく。ハイドの前で立ち止まったのは、第二部隊の面々だった。

ハイドが人の気配に気づき、伏せていた顔をあげる。

「ようハイド！最近バリバリやってるそうじゃないか！」

最初が肝心だと努めて明るい声で話し掛けるタツミ。

「お前が戦術や訓練に熱心に取り組んだからこその結果だな」

なるべく今日のことに関する話題からそらそうとするブレンダン。

「あ、あのソーマさんともいきなり連携がとれるなんて凄いですよね～あはは！」

……いきなり爆弾をほうり込むカノン。

「ばっ…バカ！カノン！」

「……あっ！！！」

タツミに言われてようやく気づくカノン。三人が恐る恐るハイドを見ると、そこにはまた顔を伏せたハイド……。

「ほら～！！また落ち込んじまったじゃねぇか～！！」

「すっ、すいませんごめんなさい！！！」

「弁解の余地がないな……」

「はう～～～……」

「あきらめるなっ！！なんか考えろっ！！

「ありがとうございます…」

『え？』

ギャイギャイと騒いでいた第二部隊は、突然横から割って入ったハイドの声に静まり返る。

「皆さんは、僕を励まそうとして声をかけてくれたんですよね？その気持ちだけでも…充分ありがたいですよ」

そういって上げたハイドの顔は、涙こそ流していないものの、無理矢理作った感満載のボロボロの笑顔だった。

「ま、まあ今日のことは気にすんなよ。な？」

「そ、そうですよ～。切り替えて明日からも頑張りましょう！」

「明日は我が身かもしれんからな。今日はゆっくり休め。あまり根を詰めると身体が持たんぞ。」

三者三様の励ましの言葉を受けたハイドは…。

「はい。わかりました…」

と答えただけだった。三人はハイドから離れた後で、もう一度彼をみたがやはり、まだ辛そうだった。

「どうする？あまり効果が無かったような気がするが…」

「カノンのミスさえなけりゃなあ～…」

「はう…すいません…」

「どうしたんだお前ら？」

突然野太い声が後ろから響き、それに驚いた三人が振り返る。

『ゲ…ゲンさん！』

身体のあちこちに傷のついた、腕用のバンドで片腕をささえている６０代の男性が立っていた。

三人は「助かった」と思った。

この男は百田ゲン。かつてはゴッドイーターとして戦っていた人物であり、ゴッドイーターを経験した数少ない生き残りである。現在はフェンリル極東支部神機使い相談役となっている。

彼は元正規軍出身であるため、様々な近接格闘術の心得がある。また、始まりの神機『ピストル型神機』が開発された際に、正規軍としては初めて自らその使用者に立候補し、適合者に選ばれる。

などなどの武勇伝があるうえ長い歳月を生きているこの人なら、ハイドにいいアドバイスを与えられるはずだ。

「ゲンさん、実はハイドのやつが…」

タツミはゲンに事の成り行きを話した。

「……なるほどな。やれるだけはやってみよう。」

そう言ってゲンはハイドの方へと歩いていく。ゲンに気づいてすぐさま立ち上がるハイド。

「ゲンさん！」

「ああ、楽にしてろ。隣いいか？少し話したいことがある」

「どうぞ」

そしてゲンは腰を下ろし、少しの間を置いて話しはじめた。

「ハイド…エリックの事は残念だったな…。」

「……はい」

ハイドはゆっくり時間をかけて答えた。

「…なあハイド。あの時、もっと自分が動けたら…なんてこと考えてないか？」

ゲンはハイドの思考を推測し、それはほぼ正解だった。

「……」

「あまり自分を責めるな。俺は二十歳で正規軍に入隊したんだが…軍に在籍していた時も、ゴッドイーターになってからも…俺の周りではたくさんのやつが死んでいった。」

ハイドはただ静かに話を聞いている。

「こんな俺でも人並みに『悲しむ』ことはできたんだ。…だが、人が一人死ぬごとに、そういった感情は少しずつ奪われていった」

「……」

「そのおかげで逆に今、俺は生きている…もしそうだとしたら、俺はそれでも構わん…だが俺は、今ハイドが感じているその感情もまた大切なものだとも思うんだ…」

「ゲンさん…」

「だからなハイド…『強く』なれ。お前はやがてみんなを守る盾となる。お前の仲間を守るために…お前自身を守るために…そしてその大切な感情を失う前に、『強く』なれ」

ゲンは、静かだが…熱く力強さを感じさせる瞳でハイドに言う。

「……わかりました！」

ハイドは今日初めて心から笑顔になった。

とその時、カウンターから小さい女の子の怒声が聞こえてきた。

「エリックに会えないってどういうこと!?なんでみんなエリックは死んだなんて嘘つくの!?」

カウンターを見たら裕福そうな女の子と紳士がいた。

女の子は涙を零しながらヒバリに怒鳴りちらす。ヒバリはその対応に困っていた。

その横にいた五十代くらいの紳士が目をギュッとつむりながら…。

「あの馬鹿息子め、先に逝きおって……！！」

その肩は激しく震えていた。

二人を見ていたゲンは再びハイドに視線を戻す。

「まあ、とにかく死ぬなよ…お前とはいつか酒を飲み交わしたいからな」

「……はい」

穏やかな声でハイドは答えた。

ゲンは先程の二人の会話を聞いて、ハイドがまた落ち込むのではと思っていたが…どうやら大丈夫そうだ。ハイドの瞳は様々な感情が渦巻き、複雑そうな色だったが、ゲンが伝えたいことはしっかり伝わっていたようで、彼の返事からかすかに覚悟と決意が感じ取れた。それがわかったゲンはハイドの肩に手を置き、軽く頷いたあと、立ち上がってタツミたちの方へと歩いていった。

「あ、ゲンさん！どうでしたか？」

戻ってきたゲンにタツミが聞いてみた。

「あいつのことなら心配いらない…大丈夫だ。」

「そうですか…すいませんわざわざ」

そう謝るのはブレンダン。

「気にするな。何せ今は相談役だからな」

そう返したゲンはエレベーターに乗って別のフロアへ移動した。

タツミたちはハイドを再び見るが、その顔にはいくらか明るさが戻っていた。それは先程の、上から糊で貼付けたような笑顔とはちがう笑顔だった。

部屋に戻ったハイドはターミナルを開いた。するとコウタからメールが届いていたことに気づく。ノルンには過去のデータを引き出すだけでなく、ゴッドイーター同士でメールのやり取りができるようになっている。

ハイドらキーボードを操作し送られてきたメールを開いた。

『藤木コウタ

今日行ったミッションで隊員が死んだって聞いたよ。エリックって人には失礼だけど、俺死んだのがお前じゃなくてよかったって思った。

明日の任務はハイドと一緒なんだぜ！初めて一緒に戦えるな！よろしく頼むよ！』

（……ああ。俺からもよろしく頼む）

ハイドは明日に向けて早めにベッドに潜り込む。次の任務ではコウタと…つまりは、極東支部に来て初めてできた『友』と一緒に戦うことになる。そう思うと不思議な高陽感少しと、大きな恐怖が込み上げる。

だがハイドは、ゲンの言葉ですでに心に決めていた。救える限りの人を…みんな救おう。そして自分は何があっても生き続けよう。コウタのように後ろばかりに捕われず、前をしっかり見つめよう。

そんなことを考えていると、やはりリンドウの凄さを改めて認識させられる。

（本当に…リンドウさんは…凄いや…）

飄々としながらもリーダーとしての責務をこなし、ゴッドイーターとして長く生き残っている。ハイドはリンドウに憧れと尊敬の念を抱きはじめた。

（…今はまだ無理でも、いつか俺もリンドウさんのように…）

などと色々思考してる内に、ハイドは忍び寄る睡魔によって夢の世界へと引きずり込まれていった。

十一喰：神霧ハイドの落ち込み（後書き）

サブキャラのゲンさん登場となりました今回の話ですが、ゲンさんが実際に言いそうなアドバイスを想像して書きましたが、如何せん自分がまだ２０代なので、ちゃんと書けてるか不安です。

十二喰：コウタとの合同任務（前書き）

ようやくコウタとのミッションです。リンドウさんを少しだけ登場させた結果、容量が大きくなりそうだったので、急遽コンゴウのミッションを『コンゴウ一体オウガテイル三体』から『コンゴウ一体』に変更しました。

十二喰：コウタとの合同任務

ソーマとの任務から一夜明けた。

ハイドは目を擦りながらベッドから起き上がると、今日の任務の仕度を始める。今日はコウタとの合同任務だ。ハイドは念入りに神機と戦術をチェックする。

そしてノルンのデータベースを開き今日の討伐目標『コンゴウ』について調べはじめた。

『コンゴウ…逞しい猿人の姿を持つアラガミ。俊敏な動きと力任せの打撃が特徴であり、人間を発見すると群れを成して襲ってくる。発生地はユーラシア大陸極東。背中のパイプ状器官から放たれる真空波は要注意』

一通り確認を終えたハイドは、エントランスへと向かうため、エレベーターがある廊下まで歩いていた。するとその途中で、リンドウとばったり会ってしまった。リンドウは「たまには奢ってやる」と半ば無理矢理ハイドを自販機のある場所まで引っ張っていった。

「コーヒーでいいか？」

「あ、はい」

リンドウはコーヒーを買うとそれをハイドに投げ渡す。そしてベンチに座っているハイドの横に腰かけた。しばしの沈黙を破ってリンドウが口を開く。

「エリックのことは残念だったな…って、もう皆から言われてるか？」

「……はい」

ハイドは静かに答えた。

「いや、隊長として何か言わないとなって思ってさ…まあエリックはちぃとばかし変わり者だったが、妹さん想いのいいやつだった。そこは皆から評価されてた…」

「……」

「それからソーマのことなんだが…あんまり悪く思わないでやってくれるか？」

「わかっていますよ、リンドウさん」

ハイドの返事にリンドウは首を傾げる。

「？わかってるってどういうことだ？」

「ソーマはそれほど悪い人間じゃないと…いえ、いい人間だと思っています」

ハイドは穏やかに答えた。

「ほぉ～…よければ理由を聞かせてもらえるか？」

リンドウはハイドに聞き返す。彼が「ソーマはいいやつだ」と言っ

た理由が気になったのだ。リンドウはソーマのことをハイドに弁解するつもりだったため余計に気になるのである。

「昨日のミッションが終わったあと、エリックの神機が入ったケースをソーマが持ち続けてたんです。回収班に渡せばいいのに…ヘリがフェンリルに着くまでの間、ずっとそうしてました」

「なるほどな…」

「それだけじゃありません…昨日の戦闘中のソーマの行動でも、彼の優しさを感じ取れました。」

「具体的にいうと？」

まだ理由があることに驚き、リンドウは興味津々だった。

「昨日の任務では、ソーマが先に行ってしまって僕はあとから合流して戦闘に参加したんですが…彼はオウガテイル二体の相手をしてました。その時、僕が戦闘に参加するのを見たソーマは、突然動きを変えたんです。彼は、常にオウガテイルの視界に入るよう動き続けてくれたんです…彼が作ってくれた隙のおかげで、僕はコクーンメイデンをほとんど背後に気を配ることなく攻撃出来ました。ソーマはきっと、他者が傷つくのを恐れている…ただの優しい人間なんだと思っています」

「…ははっ。どうやら…いい仲間に恵まれたようだなあいつは」

リンドウは、ここまでソーマを見ていたハイドに感謝の気持ちを感じていた。ソーマは第一印象の悪さとその後のことも全て含めて、ほとんど誰にも好かれていなかった。だが、感情表現がとことん下

手な彼を、これだけ見てくれる人間が現れた。

（ソーマのやつは…もう心配いらないな）

リンドウは立ち上がって、さっきまで吸っていたタバコを近くのテーブルにあった灰皿に捨てる。

「ま、引きずってないようで何よりだ。今後も頑張ってくれ、以上」

などと適当に終わらせるリンドウ。

「はい！ありがとうございます」

そんな彼にハイドは感謝の言葉を述べる。それを聞いたリンドウは背をむけ、手を背中越しにヒラヒラさせて立ち去った。

ハイドがエントランスに着くと、すでにコウタが待っていた。コウタはハイドを見つけるといつもの明るさで挨拶した。

「おっす！ハイド」

「おはようコウタ」

ここ何日か任務時間の違いで会っていなかったが、相変わらずのコウタの明るさにハイドは安堵する。

「お互いちゃんと生きてるみたいだね！命あってのこの商売だしね。…俺が死ぬと、母さんも妹も路頭に迷っちゃうから、気をつけなく

ちゃな～…」

昨日メールで自分を励ましてくれたコウタ。彼はエリックの一件から自分の気楽さを少しは見直そうとしているのだろうか。その言葉には人生経験の少ないハイドにもわかるほど感情がこもっていた。

「そうそう、サクヤさんって知ってる…よね？」

「？…ああ」

「あの人ってさ…なんかいいよね。美人だし感じいいし強いしさ…戦うお姉さんって感じでさぁ…たまんないよな～！！」

そういうことかと理解するハイド。確かにサクヤは誰が見ても美人の部類に入るだろう。おまけに銃型神機の制動力の高さは、極東支部でもずば抜けており、気さくな性格で打ち解けやすい。普通なら男は放っておかない存在だろう。

「あ、ああ」

「いよーぅしっ！なんっかテンション上がってきた～～！！今回の任務、どっちが多く倒すか勝負しようぜ！」

「は？」とハイドはコウタの言動にポカンとしている。

「サクヤさんにいいとこ見せてやるぜ～！！」

……やっぱりコウタはコウタだった。

相変わらず緊張感がない…もとい、明るい性格にハイドは思わず吹

き出した。

「な～に笑ってるんだよ～」

コウタはジト目でハイドを睨む。ぶーぶーと不機嫌そうな彼の口は、数字の三みたいな形になっていた。本当に表情豊かな少年である。

「今日の任務はコンゴウ一体だけだぜ？」

笑いながらハイドは的確にツッコミを入れる。

「んじゃあ『どっちが先に倒すか』の勝負だな！」

とコウタは返す。

「仮に俺がトドメをさしても『コウタがやった』って言っておくよ」

ハイドは勝負にこだわるコウタに大人っぽい対応をする。

「それじゃあ勝負の意味がないっての！」

やはり勝負にこだわるコウタ。まだまだ子供っぽい。

「わかったわかった！さっさと行くぞ…時間がもったいない」

「おう！」

あまりにしつこいのでついに折れたハイドは、コウタを連れて今日の任務地「鎮魂の廃寺」へと向かった。

鎮魂の廃寺…かつて神仏にすがる人々が静かに暮らしていたかくれ里であり、生活の中心にあった御堂はアラガミの襲撃によって半壊し、屋内には雪が降り積もっている。建物が多いため道が細く入り組んでいるこの場所は複数のアラガミを討伐するのには苦労すると言えるだろう。

「うぅ～…寒い…」

コウタは寒さでガタガタと震えていた。仕方のないことだ。コウタの服はかなり薄く、寒い場所での任務には向かない。

「大丈夫か？」

ハイドは上下長袖なので別に寒くはなかった。

「ほら、これでも着て体を温めろ」

そういってハイドが手渡したのは袖にファーのついたロングコートだった。予想をこえる寒さだった時のことを考えて、ハイドは前もって防寒用の私服を用意していた。それがどうやら役にたったようだ。

コウタは急いで袖を通しジッパーを閉めると防寒素材のおかげで体が温まるのを感じた。

「ふぅ～…助かった～…いよっし！もう大丈夫だ！」

コウタはハイドのコートのおかげで、再び明るさを取り戻した。

「そうか…じゃあまずは索敵についてだ。」

ハイドはコウタに弱冠呆れ笑いをして早速ブリーフィングを始める。

「まずは俺とコウタが二手に別れて索敵を始める。コンゴウは聴覚が鋭いから隠密行動で頼む。目標を発見次第、広域信号弾を使ってから交戦する。それでいいか？」

「ＯＫ！」

コウタは親指を立て、ケースから神機を取り出す。ハイドも肩に神機を担ぎ、準備する。

「…よし、行こうか」

二人は静かにそれぞれの方向へ進み出した。コウタは少しずつ、音を立てないように進み、やがて道の曲がり角に近づいた。壁に背を預け、ゆっくりと壁の向こうを見る。その視線の先にあるのは、白い雪に彩られた階段…。目標との接触はまだないようだ…。

「もう少し先の方を調べてみるか…」

コウタは少し先の方にある二つ目の階段を上って行き、また壁から様子を窺う。すると……。

（あいつだな……）

一体のコンゴウがあぐらをかいていた。

（…信号弾、信号弾っと……って！？しまった！！）

信号弾に火をつけたはいいが手からうっかり滑り落としてしまった。

そのまま信号弾は真横に進んでコンゴウの背中にぶつかった。

コンゴウが何事かと後ろを振り返ると無防備なコウタ。

「グアアアァァァ！！」

コウタ目掛けて突進するコンゴウ。

「やっべぇ！！！」

慌てて神機を構えるが間に合わない。だがコンゴウの牙がコウタに突き刺さろうとした次の瞬間…。

ヒュッと何かが横切り、コンゴウの口から「ガチンッ！」と牙の鳴る音が響いた。

コンゴウが辺りを見回すと、コウタを脇に担いだハイドが立っていた。

「大丈夫か！？コウタ！！」

ハイドの険しい表情に驚きながらもコウタは「ああ」と答える。

「そうか…じゃあこっちも反撃開始だ！！」

「了ぉ～解ぃっ！！」

そしてハイドは剣でコンゴウに斬り掛かり、コウタは後ろに回り込んで銃撃を浴びせる。

「！」

ハイドはコンゴウがとっさに丸太のような拳を振り上げたのを見て距離をとる。そのまま拳はハイドに向けて振り下ろされたが、それが届く前に背中に銃弾を受けてバランスを崩し、コンゴウが転倒する。

「今だハイド！！」

「もらったぁ！！」

ハイドはすぐさま神機でコンゴウを捕喰し、バーストした。

筋力が上がったハイドはコンゴウのとある箇所を重点的に攻撃する。やがてコンゴウが立ち上がると、うっとうしいとばかりに拳を振り回して自分と敵との距離を取ろうとする。

「おとなしくしやがれっ！」

そう言ってコウタが投げたのは対アラガミ用閃光手榴弾「スタングレネード」だ。眼前でそれは炸裂したため、コンゴウは目を押さえて少しの間うずくまる。

「コウタ！一気に崩すぞ！！」

ハイドのやろうとしてることを理解するコウタ。

「任せときなって！！」

ハイドはアラガミバレットをコウタに三発撃ち渡す。神機に命中し

たコウタ、リンクバーストＬＶ３を発動した。

「おっしゃぁぁぁ！！！」

ハイドはコンゴウに光速の連撃を浴びせ、コウタは背中に濃縮アラガミバレットを撃ち込む。

するとコンゴウの背中のパイプ状器官が破壊された。これがハイドが徹底的に痛め付けた場所である。これで真空波はまともに使えないはずだ。

すでにボロボロのコンゴウだが、それでもハイドに向かって右腕を振りかぶる。

だがコンゴウのパンチなど、バーストした今のハイドにはスロー再生のように見えた。必要最低限の動作でかわし、ハイドは懐に飛び込む。そして…。

「これで終わりだ！」

コンゴウの脇腹をハイドの剣が切り裂き、大量の血を吹き出した。コンゴウはついに倒れ、その生命活動を停止させた。

十二喰：コウタとの合同任務（後書き）

なんとなくですがコウタは戦場でなんかしらのヘマをやってしまう気がするんです。

……でめやっぱり憎めない、いいやつです。

十三喰：『ペイラーサカキのなぜなに講座2』（前書き）

なぜなに講座第二弾です。最近コンスタントに投稿を続けていたので、週刊誌の漫画家の気持ちが少しずつわかってきました。

十三喰：『ペイラーサカキのなぜなに講座2』

コンゴウの素材を回収したあと、ハイドとコウタは帰投する途中での会話に花を咲かせていた。

「いやぁ～今回も生き残れたねぇ～」

「そうだな。互いに大した怪我もなくてよかったよ」

ハイドは今日の任務の結果に満足していた。「コウタを死なせず、自分も死なない」。自らに課したその約束を今日は守ることが出来たのだ。文句は今のところない。

「それにしても俺達の相性すごくね？コンゴウのやつよろけまくってたしさ～」

コウタは意気揚々と話す。実際ほとんど反撃の隙も与えず勝利したし、ハイドもやりやすいと感じていた。

「俺達二人が組めば無敵だな！」とコウタは笑顔で話す。「あんまり調子に乗らないでくれよ？」とたしなめるハイド。二人を乗せたヘリはアナグラへと飛び立った。

「ミッション完了しました。確認をお願いします。」

ハイドはエントランスでヒバリにミッションの完遂報告を行う。もうこの作業にもすっかり慣れたものである。

「…はい、確認が取れました！では、報告書をどうぞ。……あ、ハイドさん、コウタさん！」

報告書を受け取りカウンターから離れて行く二人をヒバリが呼び止めた。

「榊博士が呼んでましたよ。ミッションが完了したら研究室に来てくれとのことです」

「あ、わかりました」

ハイドとコウタは何だろう?と榊の研究室へ向かった。

「やあ～よく来たね～。あ、ミッションお疲れ様。さあ、前の時のように自由に腰掛けてくれ」

ハイドとコウタは榊の研究室に入るなり、榊にマシンガンのように話されて少し戸惑った。やがて二人が腰を下ろすと、目の前にあるモニタに電源が入る。その画面に映しだされたのは…。

「ペイラーサカキのなぜなに講座」

やっと自分達は榊の講義に呼び出されたのだと理解する二人。榊は軽く咳ばらいすると講義を始めた。

「今日はこのフェンリルについて少し話をしようと思う。さて、突然だが君達は『アーコロジー』という言葉を聞いたことはあるかい

？」

『いえ…』

二人は聞いたことのない単語にクエスチョンマークを浮かべる。

「『アーコロジー』とは、それ単体で生産、消費活動が自己完結している建物を指す言葉なんだ。実はアナグラを中心とした世界各地のフェンリル支部も、一種のアーコロジーだと言えるんだ。これって極端な話、ある支部を除いた全てのフェンリル組織が滅んでも、残った支部は単独で生産、消費活動を行い、今まで通り生き残ることが可能ってことなんだよ」

と、榊は『アーコロジー』について説明する。ハイドは真剣に聞いていたがコウタはすでに眠そうだった。

「なるほど…このシステムなら、荒廃した世界でも生き残れるというわけですね？」

とハイドは話す。

「そうだ。アナグラは地下に向けて食糧や神機、各種物資の生産を行うプラントがあり、外周部には対アラガミ装甲壁や、君達優秀なゴッドイーターをはじめとした、高い防衛能力もある。それがフェンリル支部であり、人類を守るために最適化されたアーコロジーなんだよ」

ここまで説明した時点で、コウタの目は完全に閉じようとしていたが、次に榊が発した言葉に意識が戻る。

「ただそこにも問題はあってね。それは…収容可能な人口に限りがあることなんだ」

（！）

コウタの表情が一転して真面目なものに変わる。ハイドはこんなに真剣なコウタを見たことがなかった。

「君達も知っての通り、ここ『アナグラ』の周囲には、広大な外部居住区が形成されている。だが、彼ら全てを受け入れるだけの容量は、まだこの支部にも無い。対アラガミ装甲壁を張り巡らすことが、今できる最大限の防衛作なんだ」

「それだけで足りるのかな…現に装甲は頻繁に突破されてるんじゃ…」

コウタは対アラガミ装甲壁に対する不安を漏らす。

「だからそのために、ゴッドイーターによる防衛班も配備されている…いや、すまない。コウタ君のご家族は外部居住区にいるんだったね。軽率な物言いを許してくれ」

榊はコウタに先程の発言を詫びる。

「いや…俺はただ…」

「本当はアナグラを地下に向けて拡大して、内部居住区を増やす計画もあったんだけどね…」

「でも、その計画をより安全で完璧にしたのが『エイジス計画』な

んだよね！」

コウタは明るく振る舞って言った。

（かなりエイジス計画を信頼しているな…確かに、家族を助けたいコウタにとってこの計画は頼みの綱だけど…）

ハイドは、その期待を裏切られた時のコウタを心配した。過剰な期待はその分反動も大きいのだ。もし『エイジス計画』が水泡に帰したとき、コウタは堪えられるだろうか…。

「…そうだね。現状極東支部の地下プラントの多くの資源リソースは、『エイジス計画』に割り当てられている。…その話は、また今度にしようか。今日の講義はここまで」

榊が講義の終了を告げ、二人は部屋を出て行った。

「ヨハン…君はいったい何人の期待を裏切るつもりだい？」

榊は旧友を頭に思い浮かべ、つぶやいた。

十三喰：『ペイラーサカキのなぜなに講座2』（後書き）

ちょっと短くなってしまいました。最近程よい長さの話作りに悩んでいます。

十四喰：上司の品格（前書き）

ハイドの成長回です。二回に分けて書くのですごく長く感じてます。

十四喰：上司の品格

ハイドは訓練場で神機を構えていた。額やこめかみから汗が伝い落ちている。

「はあっ…はあっ…！」

息もすでに上がっていた。しかし彼は訓練をやめない。同じ動作を繰り返し過ぎて、手の平の皮が痛みに悲鳴をあげる。

ふぅ～…と息を整えて、神機に意識を集中させる。

（もう何回目だろ…？５００から先は忘れちゃったな…）

「そろそろ訓練場が閉まる時間だし…ラストワン！」

ハイドは神機を変形させた。ガシャンと神機の変形機構が唸る。

そしてハイドは、ガラスを隔てて神機の変形スピードを計測している研究員に聞いた。

「タイムはどうでした？」

「１秒３２だ。どんどん速くなってきてるな」

研究員がそう答えた。ハイドは少し表情を曇らせる。

「そう落ち込まなくていいよ。神機の変形スピードは以前に比べ格段に速くなった。おまけに今のタイムは最高速度だよ？これもひと

えにハイド君の努力の成果だよ！」

別の研究員がハイドに話かける。しかしハイドは首を横に振り、口を開く。

「確かに速くはなっていますが、あくまで目標は1秒以内での変形です。昨日のコウタと行ったミッションで、彼は危うくアラガミにやられるところでした。ギリギリ間に合いましたが、あとコンマ数秒遅れていたら…」

ハイドは死に物狂いで走って、限界まで手を伸ばしてコウタを掴んだあの瞬間を思い出していた。

「だが焦りは禁物だハイド君。今日はもう休んだほうがいい」

「……はい」

ハイドは渋々頷くと訓練場を出た。エントランスへと続く通路を歩きながら、一人思い詰めるハイド。

（根を詰めるな…か…みんなから言われるけど、あんなことがあれば無理してでも強くなりたいって思うよ…）

二日前にはエリックが死に、昨日はコウタが死にかけた。

どちらも不運が重なったに過ぎないのだが、どちらも「運が悪かった」で済ましてはいけないのだ。たとえ運が悪くても、勝てるようにならなければ…。

たとえばリンドウは長い間ゴッドイーターとして戦っている。その

戦いの中には、不運の重なった不利な状況に立たされた時もたくさんあるはずだ。だが、どんな逆境からでもリンドウは切り抜け、今も生き残っている。

ハイドは自分とリンドウを比べて、その不甲斐なさに打ちのめされる。だが、それはずいぶんなお門違いであり傲慢な思考であった。

まずリンドウはハイドとは立場が違いすぎる。キャリアの長さ、戦闘経験の多さからして大きな差があった。そしてハイドは、リンドウは「たとえ一人でも逆境を切り抜けられる」と思っている。確かに今、リンドウ自身にその力はあるが、彼だって今までずっと一人で戦ってきたわけではない。

リンドウも多くの人に支えてもらってここまで生き残ってきたのだ。いくら彼でも全てを一人でこなすことなどできないのだ。自分を使い、仲間を使う。そうしてリンドウは信頼を勝ち取って今の立場にいるのだ。

そのことにハイドは気づけない。なかなか思考の迷路から抜け出せない、ちょっとめんどくさい性格をしている。

一夜明け、ハイドは任務の手続きをするためエントランスに来た。するとカウンターの隣にあるモニタからニュースの音声が流れてきた。

「次のニュースです。今年も抗議デモが行われました。本日未明、外部居住区生活者を中心とした団体による、フェンリルに対する抗議集会が世界各地の支部前にて行われました。フェンリルに対して、主に食糧供給の増量と防衛の強化、雇用枠の増大を訴えたもので、参加者は2時間ほどデモ行進をしたのちに大きな混乱もなく解散した模様です…」

といった内容のニュースが女性アナウンサーによって読み上げられる。ハイドは階段を下りてカウンターのところまで行くと、サクヤに呼び止められた。

「あっ…こっちこっち！」

呼ばれてハイドはサクヤに近づく。

「すごく活躍してるらしいじゃない！期待以上だって、評判いいわよ？」

「いえ…俺はまだまだですよ」

ハイドは謙遜して答える。

「…でも…あまり無茶はしないでね…。神機使いはすごい人ほど早死にするから…」

「…て～ことは、俺はまだまだってことか…」

いきなり後ろから会話に入って来たのはリンドウだ。頭をポリポリ掻いて、残念そうに言う。

「は～…相変わらず重役出勤ね～」

サクヤはため息混じりにリンドウに言う。

「重役だからな。さーて、今日も楽しいお仕事だ。今日の任務は俺達三人で動く。俺が陽動でサクヤがバックアップ」

「了解」

サクヤは即座に答える。

「お前は遊撃だ。新型らしく状況に応じて動いてくれ」

とリンドウはハイドを見て言った。

「了解！」

とその時、リンドウの携帯電話が鳴った。リンドウがポケットから取り出し内容を確認すると表情が少し真剣になったような気がした。

「…ほかに何か…ある？」

と、サクヤが聞いた。

「ん？…まあ死ぬなってことで…」

リンドウはいつもの調子でサクヤに返す。

「大雑把な命令承りました。上官殿」

三人は贖罪の街に来ていた。ハイドがこの街に来るのは約一週間ぶりとなる。

「よし！ミッションスタートだ」

リンドウの号令でミッション開始された。

「今日のミッションはザイゴート三体とコンゴウ一体だ！まずはザイゴートの駆除から始めるぞ！」

リンドウは作戦をハイドとサクヤに伝える。リンドウは今回の任務ではザイゴートを処理してからコンゴウを倒す作戦を取った。

その理由は、ザイゴートの索敵能力にある。体内で精製した特殊なガスでフワフワと飛び回り、一際大きい一つ目玉によって遠くの敵を発見できる。おまけにこのアラガミは他のアラガミを呼び寄せる習性がある。だからこそ先に潰す作戦に出たのだ。が…

（まあ…失敗するだろうな）

そう、討伐対象にはコンゴウがいる。聴覚が鋭いコンゴウならばザイゴートと交戦したときの音に気づいてやって来るだろう。

だが、それでもコンゴウだけは一対一で集中して戦いたいため、体力が低いザイゴートを先に叩くというのがこの作戦の本当の狙いだ。

やがて三人は朽ち果てた教会にやってきた。リンドウは「ふむ…」と少し考えた後…。

「ハイド！すまんがお前はあっちの建物の中を調べといてくれ。念のため俺とサクヤは教会の中を調べとく」

「了解！」

リンドウの命令を了承したハイドは教会の反対側に入って行った。
その後ろ姿をリンドウが静かな眼差しで眺めていた。

十四喰：上司の品格（後書き）

初の分割回を執筆しました。今後もこのやり方をちょいちょい挟んでいくんだろうなぁ…と思うと気が遠くなります。

十五喰：部下の変革（前書き）

前話の続きです。愚かなハイドを笑ってやって下さい。

十五喰：部下の変革

ハイドは建物の中をゆっくりと進んでいた。奥の方からぐしゃとか、バキッとか、何かをかみ砕く音が響いてくる。

（いたか……）

コンゴウが建物の奥にいた。こちらに背を向けて、様々な物資が入った箱を捕喰していた。

ハイドは音を立てないようそっと背後から近づき、捕喰の体勢に入った。

「喰らいつくせ！」

ハイドがそう叫んだ瞬間コンゴウはそれにきづいたが、すでにハイドの神機がその血肉を引きちぎっていた。突然の攻撃にコンゴウは全く準備が出来てなかった。

ハイドはバーストすると素早い動きでコンゴウを翻弄し、確実に剣撃を与えていく。時折アラガミバレットの射撃も交えながら攻撃の手を緩めない。

堪えられなくなったコンゴウは一目散に逃げ出した。

「逃がすか！」

ハイドは見失わないように全力で追いかける。そしてコンゴウは教会の中へと逃げ込んだ。

（教会の中にはリンドウさんとサクヤさんがいるはず…少し作戦と違うけど、挟み撃ちにできる！）

ハイドは教会の中へと突入していくが、違和感を覚え足音を小さくする。リンドウやサクヤが中にいれば銃声など、戦闘中の音で多少は騒がしいはず。

疑問に思ったハイドが中をこっそり覗くと、コンゴウが体力回復のために物資がつまった箱をあさっていた。そして教会の中にリンドウとサクヤの姿はなかった。

（二人はもうここから出たのか？）

とにかく無防備なコンゴウを放っておく手はない。

ハイドはまた捕喰をするためコンゴウの背後に忍び寄る。ところがその更に後ろから思いもよらぬ攻撃が飛んできた。

「グうっ！！」

間一髪でハイドは装甲を展開し、攻撃を受け止める。

その攻撃が飛んできた方を見るとザイゴートがいた。どうやらこの近くを徘徊していて、運悪く教会の中に入って来てたようだ。

「ちょっとまずいな…」

ザイゴートの攻撃によってコンゴウにも気づかれた。

「グアァァァァァ！！」

「くっ！」

コンゴウの攻撃をかわし、ザイゴートの脇をすり抜けて、ハイド一旦教会の外に出る。いくらなんでもあの狭さは分が悪い。

ハイドは外に出たら左右を見渡す。

（よし！あっちだ！）

ハイドは向かって左側の開けた場所に出る。…が、更に不運が重なる。

（くそっ！こっちもか！）

向かった先からやってきた新しいザイゴートに見つかるハイド。戦況は極めて良ろしくない。

後ろからコンゴウとザイゴートも追いついてきた。

（こうなったらまずはザイゴートからだ！）

混戦となりハイドは苦戦を強いられた。コンゴウとザイゴート二体、それぞれの攻撃をなんとかかわしながら少しずつザイゴートを削っていく。が、やはりハイドの方が劣勢だった。

（くそっ！どうしたらいい！？）

ハイドはなんとかこの状況を打破する方法を考えるが、思い付かな

かった。一番いいのはリンドウとサクヤを信号弾で呼ぶことだがハイドはそれを良しとはしなかった。

ハイドはこんな状況に置かれても、誰かに頼ろうとはしない。それはリンドウに対する憧れからきている、ハイドのつまらないこだわりだった。

（リンドウさんならきっとなんとかできるハズだ…！俺だって…！）

誰の目にも明らかな、愚者の行為。ここまでハイドがもったのは、ほとんど奇跡に等しい。ハイドは今や、「ただの死に損ない」といっても過言ではない。

「っ！…何っ！？」

さらに一体ザイゴートが増え、ハイドは今日の討伐対象をたった一人で相手をしていた。

このままじゃ殺される…。

……もう、限界か……。

ハイドはポケットに手を伸ばし、信号弾を点火すると空に撃ちあげた。やむなくハイドは応援要請をだしたのだ。すると信号弾をあげた直後に、一本のレーザーが二体のザイゴートを貫いた。

何事かとハイドもコンゴウもザイゴートも、レーザーが飛んできた方を見る。

そこにはリンドウとサクヤが立っており、サクヤの神機の銃口から煙があがっていた。

「や～れやれ…やっと呼んでくれたか」

「リンドウさん！」

「説明はあとだ。こいつらを片付けるぞ」

そう言ってリンドウは神機を構え、コンゴウに向かって行く。コンゴウの右パンチをかわして、リンドウはその脇腹を切り裂く。大量の血を吹き出しながらうずくまるコンゴウ。

次にリンドウはザイゴートへと切り掛かる。二連撃を入れたあと、空中で前方へと回転しながらの縦斬りを叩き込む。そして地に落とされたザイゴートを捕喰しにかかるリンドウ。

しかしそのリンドウを他のザイゴートが狙う。が、サクヤがレーザーを二発撃ち込み、邪魔をさせない。

「そら、喰らっとけ」

そしてザイゴートは捕喰攻撃を受けて絶命した。

「うおぉぉぉぉぉ！！」

リンドウはバーストするとコンゴウを再び斬り刻む。

「これで…終わりだぁっ！！」

トドメとなる一撃でコンゴウはついに倒れた。

「次はどいつだ～？…っと、あらら…」

リンドウが目を向けた先には、地に横たわるザイゴート二体…。その間には血塗られた神機をもつハイド。

ハイドの表情は暗く俯いていた。

「……」

リンドウはハイドの側まで行くと、彼の肩にポンと手をおく。

「おう、お疲れさん」

明るい声でリンドウはハイドを労う。そこにサクヤもやってきた。

「お疲れ様ハイド。」

サクヤも優しく声をかける。

「お前が信号弾を使ったあと、俺達がすぐに合流した。…この意味がわかるか？」

リンドウはハイドに問い掛けた。

「……はい」

ハイドはなおもくらい表情で答える。そう、あの場面……リンドウとサクヤは、ハイドが信号弾を使ってすぐに現れた。つまりはすぐ近くにいて、ハイドの戦いを見ていたのだ。

「なら…俺達が何を伝えたいのか…わかるよな？」

「……はい」

そう、リンドウはハイドにあることを伝えようとしていた。そのためワザとハイドに単独で索敵を頼んだ。戦場にでてまだ間もない人間を一人で索敵させるなど……普段のリンドウの口からは出ない命令と言えよう。

リンドウを知る者から見れば、それは誰の目にも明らかだった。

「あ～……実は俺研究員からな、お前が俺に憧れてるって話を聞いたんだ」

「え？」

リンドウの発言にハイドは顔を上げた。

時は遡り、昨日の夜。研究員がハイドの訓練で計測したデータをファイリングして、研究部署へと持っていくために廊下を歩いている時のことだった。

研究員の一人がハイドについて話し合っていた。

「それにしても、ハイド君の成長スピードは凄まじいな。ロシア支部の新型も、変形スピードが1秒以下になるのに一年近くかかったのに…」

その言葉に別の研究員が反応する。

「ほんとほんと。訓練始めてまだ一ヶ月経ってないのに…。彼は本当にすごいよ……一体なにが彼をそうさせるのかね？」

また別の研究員が口を開く。

「なんでもリンドウさんに憧れてて、一刻も早く追いつきたいらしいよ？」

「その話詳しく教えてくれんか？」

『！』

突然脇から入った聞き覚えのある声に三人が驚く。

『リンドウさん…』

「……てー訳だ」

リンドウは昨夜の出来事を話す。ハイドはそれをただ聞いていただけだった。

「お前さんが俺に憧れてる…それは俺にとっちゃあ嬉しい限りなんだがな？いくら俺だからってたった一人で今まで生き延びてきた訳じゃないぜ？」

リンドウはハイドに大切なことを教えた。

「俺は…いや、人間は皆一人で生きてる訳じゃないんだ。俺も今まで色んな人たちに支えられてきた。姉上にサクヤ、ソーマもだな。フェンリルの職員やロシアの道端であった医者見習い…そしてお前やコウタ」

「俺も…？俺もリンドウさんを支えてるんですか？」

「そうだ。人はみんな知らないうちに、良かれあしかれ誰かを支えてるんだ。俺はたまたま運が良かっただけなのさ。お前を始めとした多くの人間に支えられて、今こうして俺は生きている。そのことにいつも感謝してるんだぜ？俺はな」

とリンドウは珍しく真剣に話す。

「感謝してるなら声に出して言って欲しいものよね」

サクヤがリンドウに笑顔で言う。

「男は言葉より行動で表すんだよ」

とリンドウは反論した。「はいはい…」とサクヤが半ば呆れる。

「とにかくだ…あ～なんつーか…お前さんはもうちっと肩の力抜けや。確かに『とっとと背中を預けられるくらいに育ってくれ』とは

言ったが、『焦ってでも強くなる』ってこととは違うからな。それにお前は俺じゃねえ。お前はお前らしく生きればいいんだ。いいな？」

リンドウの言葉でハイドはようやく気づかされた。当たり前過ぎるが大切なことに…。暗かったハイドの表情に明るさが戻る。

「…ハイ！」

そんなハイドを見てやれやれとリンドウは溜め息を漏らす。

「そんじゃハイドには、人生の授業料として『配給ビール』でも払ってもらおうか？」

リンドウはハイドにニヤリとしながら言う。

「呆れた……」

サクヤはリンドウを残念な人を見るような目で見た。

「取れるときに取っとかなきゃもったいねぇだろ？」

リンドウはあっけらかんと言う。

「んで…どうなんだ？」

改めて彼はハイドに聞く。

「ふふ…俺はまだ１８なのでビールは配給されてません。なので『予約』って形ならいいですよ？」

「おし！ビール五本確保っと！」

喜ぶリンドウを尻目にサクヤが溜め息をした。そして三人はヘリに乗って、フェンリルへと帰っていった。

十五喰：部下の変革（後書き）

初の前後編に分けた話は作るのにすごく苦労しました。ミッション中の話が長くてどんな展開にしようか悩みましたし、ハイドに対するリンドウからのアドバイスは、彼の性格面を考慮してすごく短くテキトーにするつもりだったのですが、結局長くなってしまいました。

普段、面とむかって話すのが苦手なリンドウがやたらと饒舌に…リンドウのクオリティを追求している方々には誠に申し訳ないです。

十六喰：フォー・マン・セル・デート（前書き）

四人任務の回です。話の編集の都合でバトルをオールカットしました。

十六喰：フォー・マン・セル・デート

「ハイド、ガム食う？」

移動中のヘリの中でコウタはハイドに尋ねた。

「いや、俺はいいよ」

「そっか」

今日はハイド、コウタ、サクヤ、ソーマの四人組でのミッションである。ハイドとコウタは初めて四人で動く任務に少し緊張していた。

今日はコクーンメイデンの掃討任務だ。贖罪の街で八体確認されたので、急遽四人での出撃となったのだ。

「よっと」

コウタは着陸したヘリから飛び降りた。それに続いてハイド達も降りる。

待機ポイントまで移動すると、そこにはリンドウが待っていた。

「あれ、リンドウさん？なんでこんなとこに？」

疑問に思ったコウタが聞いてみる。

「この近くで任務があったんだが…もう終わったことだし、後からやってくる自分の部隊に命令でも残しておこうと思ってな」

四人がリンドウに注視するとリンドウは命令を出した。

「あ～本日も仕事日和だ無事生きて帰ってくるように以上」

一箇所も句切らずにリンドウが言った。

「え？それだけ…？」

コウタががっかりする。

「いちいちツッコんでると身が持たないわよ？」

「くだらん…」

サクヤとソーマはいつものことだと気にしない。

「一人を除いて、心が一つになっているようで何よりだ」

リンドウがそういうとみんながハイドを見た。ハイドは「リアクションしとけば良かったかな」と思い、一人困る。

「ハハ、冗談だ。そんな悲しい顔すんな。このメンツでは初の四人任務だが、まあいつもどおりやれってことで」

「リンドウさんはこのあとは…？」

今度はハイドが聞いてみた。

「俺はこのあとチョイとお忍びのデートにさそわれているんでな。今から働くのはお前らだけ…っと」

リンドウはポケットから呼出し音がなっていり携帯電話を取り出す。その画面を確認したリンドウは…。

「はやく来ないと拗ねて帰っちまうとさ…ったくせっかちなヤツだ。命令はいつも通り『死ぬな、必ず生きて戻れ』だ」

その言葉を聞いたソーマがリンドウに呟くように言った。

「自分で出した命令だ。せいぜいあんたも守るんだな…」

「リンドウもあんまり遅くならないように…ね…」

サクヤは心配そうに言った。リンドウは軽く相槌をうつと、アナグラへと帰っていった。

「さあ、行きましょ！」

サクヤが合図すると今日の仕事が始まった。

四人がミッションから戻ると出撃ゲートの向かいにあるソファにリンドウがドッカリと腰掛けていた。

「先に帰ってたのね。お疲れ様」

サクヤがリンドウに労いの言葉をかける。

「ああ、なんとか早めに切り上げられた。そっちはどうだった？」

「ご命令にしたがって『いつも通り』だ」

ソーマがぶっきらぼうに言う。

「そうね。任務は滞りないし、人も欠けてないわ」

「俺達の華麗な連携プレーを見せたかったよ～！」

サクヤとコウタはミッションの様子を報告する。

「お前そんなに役立ってたか？」

ソーマがコウタに冷徹にツッコむ。実際に討伐数はそれぞれ…ハイドが2、ソーマは3、サクヤが2、コウタが1だった。

「んなっ…！？」

ガックリとうなだれるコウタ。

「ふふふ……」

「ははは……」

ハイドとサクヤが笑い声をあげる。

「そうか。これならこっちももう少しデートの回数を増やしても良

さそうだな」

と、リンドウが言ったのを聞いてコウタが指摘する。

「まず俺に女の子紹介するのが先じゃないッすかね～？」

「ふっ、お前の手には負えないと思うぞ？」

リンドウは笑いながらそう返す。と、その時アナグラ内にアナウンスが流れた。

『業務連絡。本日第七部隊がウロヴォロスのコアの剥離に成功。技術部員は第五開発室に集合して下さい。繰り返します……』

そのときエントランスには様々な声が飛び交った。

「ウロヴォロス！どこのチームが仕留めたんだ！？」

「しかもコア剥離成功かよ…！ボーナスすげぇんだろうな…」

「おい！おごってもらおうぜ」

「やめときなさいよ、みっともない」

コウタはソーマに聞いてみる。

「ウロヴォロス…って何？強いの？」

ソーマは答えるのが面倒だったので軽くをツッぱねる。

「ターミナルを調べりゃ出てくる…たまには自分で調べろ」

「そうね…今の私たちじゃ、まだ無理じゃないかな…」

サクヤはコウタにウロヴォロスの強さを語る。

「マジでっ!?このメンツでも!?」

「一人二人は死人がでるだろ…」

驚いてるコウタも含めて全員にリンドウが口を開く。

「まあアレだ、生き延びてればいつかは倒せるだろ。今は余計なことは考えず、とにかく生きることだけ考えろ」

それを聞いたソーマはリンドウに文句を言った。

「その台詞…いい加減聞き飽きたぜ…」

そしてリンドウはソーマの方を向いて更に一言。

「ああ特にお前には何度でめ言っとくぞ。放っといたら一人で死にに行っちまうようなやつにはな」

「チッ…だまれ…」

「さあて…俺は次のデートに備えて、精のつくものでも食ってくるかな?」

そう言ったリンドウはソファから立ち上がり、食堂の方へ向かった。

その時ハイドは、何気なくサクヤとソーマを見た。二人は何となくだが、どこか心配そうだった。

（第七部隊…そんな部隊あったっけ…？それに、リンドウさんを見るサクヤさんとソーマのこの表情……まさかウロヴォロスを倒したのは……「お忍びのデート」っていうのは……）

ハイドは、自分達が任務を遂行している間にリンドウがやっていたことをおおよそ察した。

シャワーを浴び終わったハイドは自室のターミナルでウロヴォロスについて調べてみた。

「……なんだコリャ…」

映しだされた情報はとにかくすごかった。

『ウロヴォロス…無数の触手と眼を持つ、異形の超弩級アラガミ。平原の覇者とも呼ばれ、山のように巨大である。触手を用いた攻撃の他に、大口径のビームを放つ。発生地は不明。』

（すごいな…こいつをリンドウさんは、たった一人で倒したのかも知れないんだよな…）

そうだとしたら、つくづくリンドウの強さには驚かされる。

（全身画像見たけど…軽く１０ｍくらいあったよなアレ…）

ハイドはベッドに寝転がる。

「まあサクヤさんやソーマがいるメンツでも、今はまだ無理だって言ってたし…焦らず一日ずつ強くなっていけばいいよな…」

思いだすは、先日リンドウに言われた言葉。

『お前はお前だ』

（そう、俺はリンドウさんじゃない。どんなに憧れてもリンドウさんにはなれない…当たり前のこと。だから、俺は俺らしく…）

そう思いながらハイドは目をつむり、明日の戦いに備えた。

十六喰：フォー・マン・セル・デート（後書き）

リンドウさんはホントに凄いです。銃が備わってない旧型刀身神機でウロヴォロス討伐って…

十七喰：もう一人の新型神機使い（前書き）

アリサファンの皆様お待たせしました。ついにアリサ登場です。ここまでくるのが異様に長く感じました。

十七喰：もう一人の新型神機使い

時刻は午前１０時…ハイド達第一部隊はエントランスに集められていた。

（…なんだか今日はエントランスが騒がしいような…？）

ハイドが疑問に思って辺りを見渡す。すると誰かの話が聞こえてきた。

「ねえ聞いた？新型がまた配属されるって話…」

「あ、聞いた聞いた…ここにきて『新型ラッシュ』だね」

「ロシア支部から支部長が連れて来たらしいよ？」

「あ、噂をすれば…かな」

ツバキが一人の女の子を連れてエントランスに入ってきた。ツバキとその女の子は第一部隊の前にやってくると向き直り、話を始めた。

「紹介するぞ。今日からお前たちの仲間になる、新型の適合者だ」

「はじめまして。『アリサ・イリーニチナ・アミエーラ』と申します。本日一二〇〇付けで、ロシア支部からこちらの支部に配属になりました。よろしくお願いします」

アリサと名乗ったその女の子は事務的な声色で挨拶をする。

「女の子ならいつでも大歓迎だよ～」

コウタはかなりテンションが上がっているが、それはあっという間に下げられた。

「よくそんな浮ついた考えで、ここまで生きながらえてきましたね」

アリサはコウタを完全に見下した声で冷たすぎる発言をした。

「へ？」

それを聞いたコウタは間抜けな声を漏らす。

「彼女は実践経験こそ少ないが、演習では抜群の成績を残している。…追いていかれぬよう精進するんだな」

ツバキはアリサについて簡単な説明をし、ハイドとコウタ…特にコウタ…いや、完全にコウタを見てさらなる努力をするよう言った。

「りょ…了解っす」

コウタが返事したのを聞いたツバキはアリサに視線を向ける。

「アリサは以後、リンドウについて行動するように。いいな？」

「了解しました」

アリサはまた事務的な口調で言った。

「リンドウ、書類等の引き継ぎがあるので、私とくるように。その

他の者達は持ち場に戻れ。以上だ」

そういうとツバキとリンドウはエレベーターの方へ歩いて行った。

「ね、ねえ君！ロシアから来たの？あそこってすげぇ寒いんでしょ？あ、でも最近異常気象で温度が高くなってきたって言ってたっけ？…」

なんとか悪いイメージを払拭しようと話すコウタは空回りするばかり。

アリサはまったく相手にしてなさそうだった。と、ここでサクヤが喋りまくるコウタを抑制してアリサに向き直る。

「自己紹介がまだだったわね？私は橘サクヤよ、よろしくね！」

「よろしくお願いします」

サクヤはいつもの感じで挨拶したが、アリサの反応は変わらなかった。

（これは…ソーマタイプね…）

サクヤはそう分析した。つんけんした性格や、必要最低限のことしか話さないところが何となく似ている。

「じゃあ次はソーマね！」

サクヤはソーマにいきなり振った。振られた以上答えないわけにはいかず、少し間を置いてソーマが口を開く。

「ソーマ・シックザール…別に覚えなくていい…」

「……」

さらにアリサは寡黙になった。

(振る人間を間違えたかしら…まあいっか)

「じゃあ次は俺だな！」

コウタが名乗り出た。

「俺、藤木コウタっていうんだ！よろしく！」

「…よろしくお願いします」

アリサは先程のコウタの言動からか、まだ見下していた。が、これから一緒に戦っていく人間なので一応挨拶はする。

「じゃあ最後はハイドね！」

ハイドは一歩進み出た。アリサの顔を見て口を開く…が、言葉が出なかった。

綺麗に整った顔立ち、大きな瞳は深い蒼、少し癖のあるローズグレイのしなやかな髪、大人びた言動に、子供を感じさせる学生服に近い服装によって生まれる不思議な魅力…

「…あの、何をジロジロ見てるんですか?」

アリサに怪訝な顔で指摘されハイドは現実復帰した。

「お？どうしたハイド？まさか一目惚れ？」

コウタがニヤニヤしながらからかってきた。

「まさか…コウタじゃあるまいし」

ピシャリと言うハイドにコウタはうなだれる。だがアリサの容姿は誰もが思わず見とれてしまうほど美しかった。惚れた云々はともかく、コウタに悟られないように平静を装う。

「はじめまして。俺は神霧ハイド。一応君と同じ、『新型神機使い』だ。よろしくね」

ハイドは優しい笑みで手を差し延べる。

「あなたがそうですか…噂は聞いてます。まだ入隊して間もないんですよね？…言っておきますけど、いくら同じ新型だからって、私と同じラインに立っているとは思わないことです。ミッションではくれぐれも、私の足を引っ張るようなマネはしないでくださいね」

アリサはハイドの手を軽く握ってすぐ放すと、またも冷たい台詞を言い放つ。

「ハハ…努力するよ。ところで呼び方は『アリサ』でいいのかな？」

ハイドがそう言うとアリサは呆れたように言葉を返す。

「別にどう呼ぼうとあなたの勝手です…」

どうでもいいことだと適当にあしらうアリサ。

「じゃあ、よろしくアリサ」

ハイドはそう言うと下側のエントランスへ歩き出した。

「ハイド？どこ行くんだよ？」コウタが尋ねた。

「訓練場だけど？」

ハイドが一言で返す。

「え～！？俺達今日は非番だろ～！？」

コウタがハイドに信じられないといった顔で言う。

「休みにやることないしな」

と言うハイドだが、本当はある。外部居住区に居る仲間にお土産を持って行くことだ。

しかし、いかんせんハイドは入隊してまだ日が浅いので、みんなの分のお土産を買って持って行くとなると相当な金額になり、今度は生活が苦しくなる。

となればあとは自主トレに励み、戦力になる努力をするくらいである。

「悪いなコウタ」

ハイドは返事も聞かず訓練ミッションを受注して、出撃ゲートから出て行った。

「ちぇ～…」

コウタはハイドにブーブーと文句を言う。

（あなたも見習ったらどうなんですか…）

アリサは冷めた目でコウタを見ながら思った。

エレベーターがゆっくり下降していく中、リンドウはツバキに話し掛けた。

「期待の新人ですね～。レア物の新型が二つも揃ってる支部なんて、ここぐらいじゃないですか？」

リンドウの声にツバキは答える。

「ああ、そうだな。だが本部の意向で、今後は新型適合者の発掘が優先されていくらしい…。ただ彼女の場合、適合はしているものの若干精神が不安定でな…定期的に主治医によるメンタルケアのプログラムを受けているようだ。まあ、とにかく注意を払ってくれ」

（ふーん…とっつきにくい性格に加えて精神不安定か…まあなんとかなるだろ…しかしすでに新型がいる極東支部にさらに新型を追加

するとは…シックザールは何を企んでるんだ…？）

「了解です、姉上」

思考をとりあえず止めてリンドウはツバキの頼みを了承した。

「リンドウ…二度とここで姉上と呼ぶな！いいな？」

ツバキはリンドウの冗談をたしなめた。

（姉上なのは本当だろうに…）

リンドウはやれやれと頭を掻いた。

十七喰：もう一人の新型神機使い（後書き）

初期のアリサの性格をなるべく近い感じで表現してみたんですが、うまく出来ていたか不安です。

次回はアリサを連れての四人ミッション回です。頑張ってバトルをまとめたいと思います。

十八喰：新型のチカラ（前書き）

アリサの戦闘シーンをもう少しかっこよく書きたいな～…と思う今日この頃です。

十八喰：新型のチカラ

（まったく…これから任務だというのに、皆さん脳天気ですね…）

アリサは窓の外に顔を向け、ハイド達の会話に加わらずにいた。

ここは任務に向かうヘリの中。今日はハイド、アリサ、コウタ、サクヤの四人でシユウの討伐任務に出ることになった。

その道中で、ハイド達は他愛ない会話をしていたのだが、アリサは自分からそこに加わろうとはしない。話を振れば返事はくるが、その内容はすごく淡泊で、話にまったく興味がないといったオーラが全開だった。

（なんていうかアリサは…自分のことを人に話さない子って感じなんだよな～…自分の内側に入って来る人間を嫌っているのかな？）

ハイドはコウタとサクヤの会話に話を合わせつつ、アリサを分析する。

（同じ部隊なんだし、できれば仲良くはなりたいけど…少しの間は様子を見るかな…）

考えこんでるうちに、ヘリは今日の任務地「贖罪の街」に到着した。

「では早速、ブリーフィングを始めるわ」

待機地点に集まったメンバーを見渡して、サクヤが神機を担ぎながら言った。

「まずは索敵。これは三グループに分けて行います。ハイドとアリサは単独で、コウタは私がフォローしながら索敵を行うわ。ＯＫ？」

「了解！」

「了解しました」

「了解っす！」

三者三様の返事をする。

「そして目標を発見したら、その人は信号弾を使用してから交戦。他の人は合流次第交戦開始よ。それと、最初に交戦した人は、シユウを開けた場所まで誘導しながら戦ってね。狭い場所での戦いは危険だわ」

サクヤの指示に三人は頷く。

「それじゃ…ミッションスタート！索敵開始！」

サクヤの合図でハイド達は、三方向へそれぞれ駆け出した。

ハイドは南側の開けたエリア、アリサは東側の廃材が置かれているエリア、サクヤとコウタは西側の教会があるエリアへと向かう。

目的エリアに到達したアリサは、神機を構えながら慎重に進む。すると人間のものではない足音が聞こえてきた。すぐさま身を隠して

様子を窺うと、シユウがやって来た。

（あいつですね…）

シユウはこちらに背を向け、廃材を漁りながら捕喰対象を探す。

アリサはシユウに気を配りながら信号弾に点火し、発射した。そして気づかれぬように背後に忍び寄り…。

「いただきました！」

シユウを捕喰したアリサはバーストした。喰われたシユウは、いきなり背後から肉を食いちぎられて苦悶の声を上げる。アリサに気づいたシユウは大きな翼を広げ、その先にある拳をアリサへ向け、手招きした。

討伐対象『シユウ』は硬い翼手を持つ人型のアラガミで、それを用いて武人のような肉弾戦を繰り広げるかと思えば、拳にエネルギーを集中させ、放出して爆撃することもある。発生地はユーラシア大陸中央部で、かつて武術が栄えた地域でもある。

（かかってこいということですか…舐められたものですね…）

アリサは高速で神機を変形させる。そのスピードはやはりハイドより上だった。特別に深紅のコーティングが施されたアリサの神機は、その紅い剣を奥にしまい込むと、同じく紅いガトリング銃を取り出した。

アリサはシユウに背を向け開けた場所に出ると、先程の捕喰で手に入れたアラガミバレットを装填した。

追いかけてきたシユウにアリサはアラガミバレットを撃ち込んだ。
ドォン！！と静かな街に銃声が響く。

「！」

『！』

銃声のした方角をハイド、コウタ、サクヤが見る。するとその上空に信号弾が上がっていた。

「加勢する！」

調べていた建物から飛び出したハイドは、すぐさまアリサを見つけ加勢した。

「いきましょ！」

「はい！」

サクヤとコウタは少々距離がある。合流までに少し時間がかかりそうだ。

「たぁっ！てやっ！」

アリサは主にシユウの腕を狙って斬り付ける。そこが比較的脆いからだ。

「加勢する！」

後ろからハイドの声がした。シユウはハイドを見つけると、アリサへの攻撃を止めて飛び上がる。

ハイドはシユウの低空飛行を、ジャンプでギリギリかわす。

かわしたあとハイドはシユウに向かっていくが、シユウは両手を合わせ、エネルギーを溜め込んでいた。

「やばっ！」

ハイドはとっさに装甲を展開した。

ガン！！と装甲が鳴り、ハイドはシユウの攻撃を耐えしのぐ。

しかし装甲を収めたハイドが目にしたのは、自分に向かって右腕を振り上げているシユウだった。

「くそっ！」

今度はバックステップで手刀をかわす。そこにアリサがバレットを撃ち込み、フォローに入る。

「足を引っ張らないでくださいと言ったはずです」

「ありがとうアリサ！」

シユウを見つつアリサに礼を言うハイド。そしてシユウが銃撃で後ろによろめいてる間に、ハイドが剣で追撃していく。

シユウは二人に間髪入れずに攻撃されシユウは反撃出来ない。

と、その時シユウの後ろからも銃撃が飛んできた。シユウが振り返ると、サクヤとコウタが神機を構えていた。

「お待たせ！」

「二人とも無事みたいだね！」

コウタとサクヤが合流したことで、シユウはさらに追い詰められる。怒り狂ったシユウは、自らのオラクル細胞を活性化させ、反撃を試みようとしたがそれは徒労に終わる。

「喰らえ！」

ハイドの神機が、コウタとサクヤに気を取られ背を向けたシユウを捕喰した。バーストしたハイドは、神機を銃形態へ変形させる。

そして三人にアラガミバレットを一発ずつ撃ち渡した。

「よしキタァァ！！」

「いくわよ！！」

「…どうも」

リンクバーストを発動した三人はその力を解放する。

「……」

その時アリサが残っていたアラガミバレットをハイドに撃ち渡した。
これでチーム全員がリンクバーストを発動したことになる。

「一気に決めるぞ！！」

ハイドが声を張り上げると、全員が銃口をシユウに向ける。

「いっけぇぇぇぇ！！」

「終わりよ！！」

「くらえ！！」

「トドメだ！！」

前後左右から濃縮アラガミバレットを浴びたシユウはついに力尽きた。

シユウの素材を回収した四人は、ヘリの待機地点へと向かっていた。

コウタとサクヤが、今日の配給についての話に花を咲かせているのを見計らって、ハイドはペースを落としてアリサと並んで歩く。

「今日はありがとう、アリサ」

ハイドはアリサに感謝の言葉を述べる。

「…なんのことですか？」

「今日、援護射撃してくれただろ？それにリンクバーストも…」

アリサは礼を言われた意味がわからず聞き返し、それにハイドが答えた。

「あれは、あなたがあの程度の相手にあまりにも手こずってたから援護したまでです。リンクバーストも、あの時の状況を見て、全員が発動した方がいいと判断したからです。他意はありません」

アリサは、自分がハイドを手助けした理由を言ったが、どちらも少々喜びがたい理由だった。しかしハイドはアリサに微笑みながら話す。

「それでも随分助かったよ…本当にありがとう」

そう言われたアリサは目を背ける。

（なんでこの人は私に構うんでしょうか…放っておいて欲しいのに…）

そう思った瞬間にアリサの頭の中で、ある映像がフラッシュバックした。自分にニコニコと微笑みかける、金髪の女の子と女性…そこで映像は途切れた。

「っ！」

アリサはズキズキと頭が痛むのを感じた。

「アリサ？どうかした？」

ハイドが心配そうな顔でアリサを見る。

「なんでも…ないです」

アリサはペースを上げて歩き、ハイドと距離を取った。

「…？」

ハイドはなんだかよくわからない表情で首を傾げる。

ヘリの着陸地点に着いた四人。すでにヘリは待機していた。

アリサはさっさと乗り込み、続いてコウタが乗り込む。そしてサクヤが乗ろうとしたとき。

「サクヤさん」

ハイドが小声で言った。

「何？」

サクヤが聞き返す。

「つくづく今のアリサは、ソーマに似てますね」

ハイドは微笑みながら言った。

サクヤは意味を理解すると微笑み返して、ハイドの言葉を肯定する。

二人は、アリサは本当は優しい子だと、今回の任務で理解した。冷たい言動が目立つが、今日の戦闘における彼女の行動には、それが随所に見えかくれしていた。

いつかアリサが本当の自分をさらけ出してくれる日がくることを願い、二人はヘリに乗り込んだ。

十八喰：新型のチカラ（後書き）

なんか戦闘が少しグダグダになってるような…。

アリサの加入によって戦闘のバリエーションが増えるので、もう少し良くなるのかな…と思ってたんですが、なかなか上手くまとまりませんでした。

反省…。

十九喰：『ペイラーサカキのなぜなに講座3』（前書き）

アリサとタツミの口論と講義、おまけにソーマを盛りつけたらボリュームが…。

十九喰：『ペイラーサカキのなぜなに講座3』

「わっかんねぇ奴だな！！外部居住区の防衛は住民の避難が最優先だって何度言わせりゃわかるんだよ！！」

タツミがエントランスで怒鳴り声を上げる。周りにいた人たちは何事だといった表情で彼を見る。

「その言葉、そのままお返しします。何度も言わせないで下さい。作戦効率よりも住民の気持ちを優先ですか？よくそれで防衛班の班長が勤まりますね。だから外部居住区の被害が多いんじゃないですか？」

「なんだとっ…！！」

（やれやれ…またやってるな）

ハイドはソファに座って、アリサとタツミの口論を頬杖をついて眺めていた。

周りの人間が「まあまあ」とか、「二人とも落ち着いて」とか、「言い過ぎだぞアリサ！」などと二人の口論を止めようとするが全く効果がない。

これ以上激化してしまう前になんとかせねばと思うハイド。

（人間は考え込むと黙るから……そうだな……）

ハイドはターミナルにアクセスし、メールボックスを開いた。その

中から開いたメールは、榊から定期的に来るお知らせメールである。
メールの本文に記載されている『今回の件に関する質問はこちらから』と案内されたアドレスを利用するためだ。

（メールの用件とまったく違う内容になっちゃうけど…まあ、榊博士に届くのは間違いないし）

ハイドはそのアドレス宛てにメールを作成した。

『ハイドです。
少々事情があり、今回のメールは質問ではなく要望とさせて頂きます。

今から講義を開いて下さい博士。コウタ、それにアリサも連れて行きます。

ＰＳ・僕が講義を開いてくれと頼んだことは二人には内密に。』

（これでよし…あとは返事が来てくれることを願うしか…ってもう来た？）

ハイドがメールを送信してから一分も経たずに榊からメールが送られてきた。

『榊です。

いいよ（＾―＾）ー☆』

榊からのメールの内容にずっこけて、少々人間不信になりそうだったのを堪えたハイドは、早速行動に出た。

「コウタ」

ハイドはまずコウタに声をかける。

「どした？」

アリサとタツミの口論を傍観していたコウタが振り返る。

「榊博士からの呼び出しだよ。『研究室に来るように』だって。」

「まさか…また講義？」

コウタが聞き返し、ハイドは頷く。

「はあ～…まあ別にいいけどさ。どうすんのアレ？」

コウタは二人を指差してハイドに尋ねる。

「心配ないよ」

そう言ったハイドは二人に向かって歩きだす。

「え？おい、ハイド？」

二人の口論はツバキクラスの人間が来るか、緊急事態が発生するかぐらいのことが起きないと止まらないと思われたが、それをハイドが無理矢理断ち切った。

「ア～リサ」

肩に手をぽんと置かれたアリサが振り返ると、そこにはハイドが優しい笑みを浮かべて立っていた。

突然のことにアリサはまるで時が止まったように固まるが、すぐに立ち直り今度はハイドに冷たい視線を投げかける。

「…何か用ですか？」

「悪いけど討議はここまでだよ。俺とコウタと君が、榊博士に呼び出されている」

ハイドはアリサの態度など気にも止めずに言った。アリサは「わかりました」と言ってさっさとエレベーターに向かう。

「タツミさん…すいません。アリサのこと大目に見てあげてくれませんか？」

「え？」

ハイドに小声で言われ、タツミは高ぶっていた気持ちが静まる。

「アリサは、今は戦略とか効率とかを優先した考え方をしてますけど、本当は優しい子なんです…。きっといつか、『それが全てじゃない』って自覚出来るときが来るはずです。それまでは、待っててあげませんか？」

ハイドの言葉にタツミはポカンとしていたが、少しずつ顔が赤くなってきた。

「ま、まあ…俺もちょっと大人気なかったかな…うわ～…なんかスゲー恥ずかしい」

タツミが完全に落ち着いたのを確認したハイドは、アリサとコウタについて歩いていく。と、その時タツミがハイドに声をかける。

「あのさ、ハイド…伝わるかはわからねぇけど、アリサに『ちょっと言い過ぎた、スマン』って伝えといてくれ」

それを聞いたハイドは笑顔で頷いた。

「本当は直接言って欲しいんですけどね」

ニコニコしながらいたずらっぽいことを言うハイド。

「ぐっ…それを言われるとキツイな…」

ふふ…と笑いながらハイドは、コウタ、アリサと一緒に榊の研究室へと向かった。

「……前にも言った通り、アラガミを構成しているオラクル細胞はなんでも食べる。動物や植物のような生物に限らず、鉱物やプラスチックのような合成樹脂…挙句には、通常の生物には危険な核廃棄物だって食べてしまう。建造物や大地だって…ほら、この通りだ。結果、『食べ残し』である従来の環境は減少の一途を辿っている。」

画面に表示された映像を切り替えながら榊はアラガミの捕喰につい

て説明した。また映像を切り替えると綺麗な風景が映しだされた。

「この辺りには春に桜を、秋には紅葉を見に行くなんて習慣もあったんだけど…今となっては、望むべくもないね」

ハイドは映像から、昔のこの国の文化に興味が出たが、今はもうこの風景が見れないと知って残念な気持ちになった。

「その一方で、アラガミは食べた物の性質を取り込むことがある。最近では『光合成』を行うアラガミすら発見されているんだよ」

榊は歩きながら、アラガミの生態の一部を説明する。

「窒素７９％、酸素２１％…世界中の植物が、二十年前の三割弱まで減ってしまった今でも、地球の大気は保たれている。これがアラガミの『光合成』のおかげとは、実に皮肉な話だと思わないかね？」

榊はコウタの頭をチョンとつついた。コウタはソファに座った瞬間に眠ってしまっていた。

「う～ん…母ちゃん…もう食べれないよ…」

よくある、しかしあまり聞かない寝言を口にするコウタ。

「ホント、自覚が足りない人ですね…」

アリサは完全にコウタに呆れていた。

「君達、『ノヴァの終末捕喰』って言葉聞いたことあるかい？」

榊はハイドとアリサに突然尋ねた。

「ええ…アラガミ同士が食い合いを続けた先に、地球を飲み込むほどにまで成長した存在、『ノヴァ』が引き起こすとされる、人類の終末…ですか」

アリサは終末捕喰について知っていることを述べる。

「たしか、アラガミ信奉教団の教団員が、いろんな人に『ノヴァの終末捕喰』を吹き込んで回り、集団自殺者を出したって事件になってましたね」

ハイドはそこに補足を入れる。

「その通り…誰が言いはじめたのかも知らない。単なる風説だとも言われているけどね」

「エイジス計画が完成すれば、それからも守れるんだろ?」

コウタが話にいきなり加わり驚く三人。どうやら榊がつついたことで少しだけ目を覚まし、人類滅亡の話で完全に覚醒したようだ。

コウタの言葉を聞いた榊はゆっくりと口を開く。

「……『犬』という動物を知っているかな?」

榊は突然関係ない話を始めた。

「え?」

なんのことだかコウタはさっぱりだった。

「もう大分数は減ってしまったが、今でも稀に外部居住区などで見かけることがあるはずだ。犬は賢く…言葉こそ話せないが、我々人間とコミュニケーションを取ることが出来る。犬のような性質を引き継いだアラガミがいれば、或いは共生できるのかもしれないね」

「共生？」

榊の言葉にアリサが怪訝な顔をして聞き返す。

「コミュニケーションという観点で見れば、もちろん犬に限った話じゃない。昔はサーカスと呼ばれる、見世物小屋で猛獣を繰る、猛獣使いもいたのだからね」

「アラガミと仲良くなんて…出来るわけないじゃない…」

アリサは榊に聞こえない声で、吐き捨てるように言った。

「アラガミ…オラクル細胞は発見されたとき、まだアメーバ状のものだった。それからミミズ状のアラガミが発見され、半年後には獣型のアラガミが発見された。そして一年経った頃には、一つの大陸がアラガミによって滅ぼされたんだ」

榊が今度は、アラガミの進化の経緯を説明した。

「彼らが、食べた物の形質を取り込み進化するにしても、異常なスピードだと思わないかね？そう…正確な話、彼らアラガミは、進化などしていないんだ。事実、オラクル細胞の遺伝子配列は変化していない。一つとしてね」

「そんなハズありませんよ！現にやつらは形態変化してるじゃないですか！」

榊の説明にアリサが反応した。当然のことだ。今世界中には様々な種類のアラガミが生息している。その外見から生態、捕喰の傾向まで全て異なっている。なぜ榊が「進化してない」と言ったのか？アリサも横で聞いていたハイドもわからなかった。…ちなみにコウタはまた眠っていた。

「彼ら…アラガミもね、今の君達と同じなんだ」

榊はアリサとハイドを見て答えた。

「食べた物の形質を取り込むということは、『知識を得る』ということ。そう、ただ知識を得て賢くなっているだけなんだ」

榊はコウタが座っている方へ歩きだす。

「どういう骨格をしていれば速く動くことができるのか、空を飛ぶためにはどうしたらいいのか。それこそ、スポンジが水を吸い込むようにして、情報を取り込み…わずか二十年の間に、彼らは非常に高度な形態を得るまでに至ったんだ」

榊はコウタの頭の上から、比較的大きな声で説明したが当の本人は起きない。榊がまたコウタをつついてみたが、今度は完全に寝てしまったようだ。

「うう～ん…」

…まったく起きる気配がない。

「アラガミがコウタ君ぐらい、勉強嫌いだったらよかったんだけどね…」

榊が諦めたような声で言った。

「彼らの勉強熱心さには舌を巻かされるばかりでね…なんと、ミサイルを発射するアラガミが目撃された噂まである。これが確かなら、彼らは人が作り出した道具すら取り込んでしまったということだ」

アラガミの進化の可能性と多様性にハイドは驚く。

「実に興味深いと思わない？それほどまでに複雑な情報を取り込めるのなら、まるで人間というアラガミが現れるのも、遠い日じゃないかもしれないね…」

榊は遠くを見るような目で（狐目だが）、一つの可能性を挙げる。

「人間という…アラガミ？」

アリサが聞き返す。確かに、それは否定しきれないなとハイドは思う。

榊の講義はここで終了した。

榊の講義にハイド達が参加していた頃…ソーマは任務で一人、贖罪

の街に来ていた。

ソーマはゆっくりと進み目標を探す。するとその時、誰かが教会に入っていくのが見えた…ような気がした。

「……人影…か？」

ソーマは教会の中に入って調べてみるが、中には誰もいなかった。

「気のせい…か」

ソーマはポシェットから携帯電話を取り出した。

「こちらソーマ。特務目標との接触はなし。索敵を続ける」

ソーマは携帯をしまうと教会から出ていく。その後ろ姿を、真っ白な少女が見つめていた…。

十九喰：『ペイラーサカキのなぜなに講座3』（後書き）

アリサとタツミの口論を書くときは注意しました。

下手すればアリサの印象がもっと悪くなってしまうので気を使って書かないとな～と思ったんですが…案の定、程よく書けたか不安です。

二十喰：『空を見るんだ』（前書き）

ついに二十話になりました。リンドウの名アドバイス?回です。

芝の上に寝転んで、空を見て穏やかな気持ちになった思い出があります。

二十喰：『空を見るんだ』

ハイドは榊の講義が終わったあと、自室へと向かった。すると自分の部屋の隣にアリサがいた。段ボールの小山を片付けている最中のようだ。

「あれ？アリサ、隣の部屋なんだ？」

ハイドが声をかけるとアリサが顔を向ける。

「…どうやら…そのようですね…」

アリサはハイドに目もくれず荷物を整理していた。

アリサはフェンリル極東支部に配属されてすでに４日目だが、彼女の荷物は遅れてロシアから届けられた。その上、荷物の内部検査や書類の確認や申請まであったので、部屋まで届くのに時間がかかったのである。

「手伝うよ」

ハイドは段ボールを一つ持ち上げる。それをみたアリサは、いつもの冷たい視線を彼に向けてそれを拒否する。

「けっこうです！自分でやりますから」

「でも、二人でやった方が早く終わると思うけど？で、これはどこに置いたらいいかな？」

ハイドは首を傾げて聞き返す。

「必要ないと言っているのがわからないんですか？」

若干苛立った声でアリサは言った。

「はいはい…んで、どこに置いたらいいの？」

ハイドは軽く聞き流して、アリサに再度確認する。

アリサは観念してため息をついた後…。

「それはベッドの上に置いて下さい…」

呆れ気味に言った。

「了解」

ニコニコしながらハイドはアリサの指示に従う。

（なんでこの人は私に構うの…私には仲間なんかいらないのに…一人でやっていけるのに…）

アリサはハイドに対する疑問、不満、愚痴を頭に浮かべる。

二人で作業した結果がやはり早く終わり、ものの４０分でアリサの荷物は全て片付いてしまった。

「これで終わりです」

アリサは最後の段ボール箱をテーブルの上に置きながら言った。

「そっか」

ハイドはそう言ったあと、部屋を一旦出る。彼に続いてアリサは部屋の入口まで来る。

「…一応、お礼は言っておきます…ありがとうございました」

「どういたしまして。でも気にしなくていいよ?俺達は同じ仲間なんだから」

「同じ仲間なら重ねて言いますけど、足を引っ張らないで下さいね。足を引っ張るといえば、あの『コウタ』とかいう人…講義は聞かずに眠ってるし、ミッション前にもお気楽な言動が目立ちますし…。一緒に組んだらと思うとゾッとします。一度厳しく言っておいて下さい」

アリサは真向かいにある部屋…コウタの部屋を見て言った。

「ハハ…確かにコウタは楽天的だけど、あいつの明るい性格のおかげで、俺がずいぶん助かってるのも本当なんだ。あいつにはちゃんと良いところもある…これだけはわかってあげてほしいな」

ハイドは穏やかな表情でアリサに言った。

(あんな自覚が足りない人にも良いところがある?笑わせないで下さい…)

アリサは少し間を置いて…。

「考えておきます」

そう言ったアリサは扉を閉めて、セキュリティロックをかけた。

（怒らせちゃったかな…）

その翌日、ハイドとアリサは贖罪の街へと来ていた。今日はリンドウと三人でのミッションだ。

ハイドはリンドウがやってくるまでの間、なるべくアリサに話かけるようにした。

「アリサ、少し聞きたいんだけど…」

「…なんですか？」

「ロングブレードの戦術としては、やっぱり斬撃の合間にインパルスエッジを混ぜていった方がいいのかな？」

インパルスエッジとはロングブレードを装着している神機にのみ使える、神機内のオラクルを使った攻撃である。どんな属性のオラクル攻撃が出るかは種類によるが、属性攻撃のカバーとして使用したり、狙った部位の破壊のために使われる。

だが、大概のインパルスエッジは爆発系の攻撃であり、それを押さえ込まなければならないためにスタミナを大量に消費する上、オラクルが切れれば使えなくなるなどの欠点もある。

「…バーストしてないうちからそんなことしたら息切れしますよ？その戦術で戦うならリンクバーストＬＶ３を発動するのがベストです。スタミナの消費量が減って息切れの心配はほとんどありません」

「そうなんだ。まだ使ったことない武器だから、よくわからなくてね…」

「あなたはずっとショートで戦ってるんですか？」

「まずは経験を積んでからって思ってるんだ。アリサはゴッドイーターになって一年経ってるけど、俺はまだ一ヶ月も経ってないからね…戦闘経験を増やしてから、使う武器のバリエーションを増やす予定なんだ」

「気の長い話ですね…それまでに死ななければいいですけど」

「アハハ…ホント、気をつけないとね」

などと話しているとリンドウがやって来た。

「お、今日は新型二人とお仕事だな。足を引っ張らないよう気をつけるんで、よろしく頼むわ」

リンドウは神機を肩に担ぎながら言った。

「足を引っ張るだなんてそんな…」

むしろ足を引っ張るのは自分の方だと思うハイド。ところがアリサはリンドウにすらキツイ一言。

「旧型は…旧型なりの仕事をしていただければ良いと思います」

アリサの物言いに目が点になるリンドウとハイド。

「はっは…まあ、せいぜい期待に沿えるように頑張ってみるさ」

と言ってリンドウがアリサの肩に手をぽんとおいた。

その瞬間、アリサの頭の中で様々な映像がフラッシュバックした。黒い、人間の顔を持つ虎のようなアラガミ…入院していた病院で主治医に見せられたアラガミの写真の数々…血にまみれた幼い頃の遊び場…。

「きゃあ！」

気持ちが悪い映像群に拒否反応をしめし、悲鳴をあげてアリサは飛びのいた。

「あ～あ…随分と嫌われたもんだな～」

リンドウは残念そうに言う。

「あ、す…すいません！なんでもありません。大丈夫です」

頭を押さえながらアリサは謝る。

「ふっ…冗談だ。んー…そうだなあ…。よしアリサ、混乱しちまった時はな空を見るんだ。そんで動物に似た雲を見つけてみろ。落ち着くぞ？それまでここを動くな。これは命令だ。そのあとでこっち

に合流してくれ、いいな?」

「なっ…なんで私がそんなこと…」

リンドウに反論しようとするアリサだが…。

「いいから探せ…な?」

リーダーであるリンドウの一押しで決定してしまった。

「よし、先にいくぞ!」

リンドウはハイドを見てミッションスタートの合図を出した。

「はい!」

そしてリンドウとハイドは先に街へと進んでいき、アリサは一人残された。

(アリサ…言われた通り雲を探すかな?)

ハイドはアリサの方を気にしながらリンドウと共に歩いていった。

アリサは命令だからと、一応空を見て雲と動物を照らし合わせてみる。「こんなことして何の意味があるのよ…」と愚痴をこぼしながら…。

「あいつのことなんだがな…どうも色々ワケありらしい」

リンドウはアリサのことについて、ハイドに話していた。

「まあ、こんなご時世みんないろんな悲劇を背負ってるっちゃあ背負ってるんだが…同じ新型のよしみだ。あの子の力になってやれ、いいな？」

リンドウの言葉にハイドは頷く。

「わかってます、リンドウさん。一応これでも、努力はしてるんですよ？」

ハイドの言葉にリンドウは満足そうに笑う。

「はっは…そうか。ソーマの時といいホントお前は頼りになるな」

リンドウに頼りなると言われたハイドは否定する。

「そんなことないですよ。まだどちらとも仲良くなれていませんから」

「フ…よし…じゃあ行くか！」

頃合いをみて二人は、夕暮れの街へと駆け出した。

二十喰：『空を見るんだ』（後書き）

知人に指摘され、アリサの心情の描写を増やしてみました。

よくよく読み返せば、今まで主人公以外のキャラの心情描写って極端に少なかったですね。

猛省…。

二十一喰：蒼穹の月（前書き）

ついにこの話に来てしまいました。少々いつもより長めです。

二十一喰：蒼穹の月

別れは様々なカタチでやって来る。学校の卒業式で友との別れ…愛し合っていた恋人との別れ…戦場で共に戦った、大切な人との別れ…。

その日も、俺はいつも通り任務に出て、アラガミを討伐していた…。

「コウタ！援護してくれ！」

「了～解！」

夕暮れ時の街でハイドは巨大な獅子、「ヴァジュラ」に突撃していく。ハイドの後ろからコウタは銃を構え、ヴァジュラの顔めがけてバレットを撃ち込む。

ヴァジュラはコウタの弾をヒョイとかわすと、ハイドに強靭な右脚を振るうが、ハイドは一度バックステップでかわした後、その脚を斬り刻んだ。

ヴァジュラが大きく後ろにバック転しながらジャンプして距離をとるが、着地した瞬間にソーマに顔を斬りつけられた。

怯んだ瞬間、ヴァジュラの胴体にサクヤがレーザーを放つ。

するとヴァジュラは咆哮し、肩から生えている「マント」と呼ばれている部位に電流が走った。どうやら怒らせてしまったようだ。

それを見たハイドはスタングレネードを使用する。怒り、オラクル細胞が活性化した状態のヴァジュラには、普段の状態でスタングレ

ネードを使うよりも効果が高く、視力が回復するまでにだいぶ時間がかかるのだ。

ヴァジュラが倒れこんだ隙に、ハイドとソーマが神機を喰らわせる。

「ここだ！」

「喰らえ！」

バーストしたハイドとソーマはそれぞれ行動に出た。ハイドはサクヤとコウタをリンクバーストさせるために、銃形態へと神機を変型させてアラガミバレットを受け渡し、ソーマはヴァジュラの顔に、バスターブレード刀身を装備した者のみに使える攻撃「チャージクラッシュ」を叩き込んだ。

「終わらせるわよ！」

「おっしゃぁぁぁぁ！！」

サクヤとコウタはリンクバーストを発動した後、ヴァジュラに弾丸とレーザーを一斉に浴びせる。

ハイドは比較的脆い前脚と尻尾を狙って斬り刻む。

ヴァジュラは第一部隊にやられ放題だったが、ようやく視界が戻ってくると再び攻撃を開始した。

そして一際大きな咆哮を上げると、ハイドの足元から青い稲妻が走り、やがてドーム状に膨らんでいく。ハイドはすぐさまそのドームから逃れると、脱出した瞬間にドーム内に強烈な電撃が走った。

（危なかった…）

ハイドは残されたアラガミバレットをソーマに渡すと、ポケットからあるものを取り出した。

そしてヴァジュラが、ハイド以外の標的を狙っているときに、それを地面に設置する。

サクヤ、コウタ、ソーマはハイドが何をしているのかを理解すると、それぞれハイドのフォローに回る。

「よし！出来た！」

ハイドが設置を完了させると同時にヴァジュラがハイドを狙う。そして大きく飛び上がり、ハイドに襲い掛かる…が、その一歩手前でヴァジュラは止まった。

ハイドが仕掛けたのは「ホールドトラップ」。簡単に言えばアラガミの動きを封じる罠である。

何かに縛りつけられたかのように身動きがとれなくなるヴァジュラ。

ハイド達はその隙にありったけの攻撃を入れる。身体のあちこちが破壊されていき、ヴァジュラは苦悶の声を上げる。

ホールドトラップの効果が切れ、再び動けるようになったヴァジュラはコウタを狙って飛び上がる。

「うわぁ！！」

コウタは辛うじてよけるがそのすぐ後に再びヴァジュラがコウタを狙う。

（やばい…！！！）

ヴァジュラがコウタをめがけてジャンプする。

自分の死を覚悟するコウタ。

そしてコウタとヴァジュラの間に入り込む、神機を構えたソーマ。

（いい加減くたばれ…）

力を溜め込み…。

「死ね！！」

ソーマはヴァジュラの顔にチャージクラッシュを叩き込んだ。跳んでいる最中に、顔からチャージクラッシュをまともに食らったヴァジュラは地面に叩きつけられる。

ヴァジュラはそれでも立ち上がろうとするが、やがて力尽きて倒れた。

「ナイスよ、ソーマ！」

サクヤが駆け寄って言った。

「フン…」

ソーマとはそっぽ向く。

「大丈夫か？コウタ」

ハイドがコウタを助け起こす。

「うん、なんとかね！」

明るい表情でハイドに答えるコウタ。

（にしても手強かったなコイツ）

ハイドは、ソーマの神機が捕喰しているヴァジュラを見て思った。

「新人が乗り越えるべき壁」と言われているヴァジュラ。それを倒したハイドとコウタは、一応「新人」という肩書きは外される。

（まだコイツより強いアラガミがいるのか…もっともっと強くならなくちゃな…）

そう思ったハイドは改めて気を引き締めた。

「…戻るぞ」

捕喰を終えたソーマの言葉で三人は引き上げる。そして教会の入口まで来ると、反対側から自分達のよく知る人物が二人やって来た。

「何？」

ソーマが驚いた。

「お前ら？」

「あれ？リンドウさんなんでここに！？」

やって来たのはリンドウとアリサだった。何故二人がここにいるのかは、ハイド達がヴァジュラを倒した瞬間辺りまで遡る。

リンドウは朝からシックザールに呼び出され、「今日は街に行ってやって貰いたいことがある」と任務を言い渡されていた。そして「ミッションにはアリサ君を同行させたまえ…」と、人選にまで注文をつけられた。そして現在に至る…。

リンドウとアリサは縦に並んで神機を構えながらゆっくりと進んでいた。

「…これは、いよいよキナ臭くなってきたな…」

近くにアラガミの気配はないが、辺りの異様な空気にリンドウが呟く。

その瞬間後ろにいたアリサの頭の中で、また映像がフラッシュバックした。

（また…なんなのよ…）

アリサはここ最近時折頭に流れる映像群に悩まされていた。

そんなアリサにリンドウが振り返った。

「どうかしたか？」

「い、いえ…問題ありません。側面、後方共にクリアです」

アリサはリンドウに悟られないようにごまかした。リンドウは少し考えてから…。

「そうか。進むぞ」

そして二人は教会の方へと進んで行った。

「どうして同一区画に二つのチームが…どういうこと！？」

サクヤが疑問を口にする。それはそうだ。原則として同じ区画に複数のチームは向かわせないのがフェンリルの軍規だ。疑問に思わずにはいられない。

「考えるのはあとにしよう。さっさと仕事を終わらせて帰るぞ。俺達は中を確認、お前達は外を警戒、いいな？」

手短にリンドウがそう言うと、ハイド達は教会の入口を囲んで立ち、リンドウとアリサは中へ入って行った。

リンドウとアリサが教会の奥に入っていくと、何かの気配を外に感じた。やがて教会の割れたステンドグラスから、女の顔を模したヴ

ァジュラの同型種、「プリティビ・マータ」が現れた。

「下がれ！！後方支援を頼む！」

リンドウは神機を構えて叫ぶ。プリティビ・マータはステンドグラスの窓辺から飛び降りて教会の中に入り、冷酷な瞳で目の前の獲物を見据える。

そして、プリティビ・マータの顔を見た瞬間、アリサの頭に昔の記憶が再生される。目の前でアラガミに親を食い殺される…あの記憶が…。

（パパ…ママ…やめて、食べないで…！）

アリサは少しずつ後ずさっていく。その肩も唇も震えていた。

「アリサァ！！どうしたぁ！！」

リンドウはアリサの異変に気づき、プリティビ・マータの相手をしながら声を荒げる。

アリサは銃をゆっくりプリティビ・マータへと向ける。

『そうだ！戦え！打ち勝て！！』

（神機の適合試験の時…）

リンドウはプリティビマータの脚に突き飛ばされ、後ろに吹っ飛ぶ。

『こう唱えて引き金を引くんだ…ОДИН（アジン）ДВа（ドゥ

ヴァ）три（トゥリー）！』

（入院してた時、オオグルマ先生が教えてくれた…）

「один（アジン）два（ドゥヴァ）три（トゥリー）…」

アリサは呟く。リンドウは立ち上がり反撃する。

『そうだよ…そう唱えるだけで、君は強い子になれるんだ…』

「один（アジン）…два（ドゥヴァ）…три（トゥリー）…」

アリサは再び呟き、銃口をゆっくりと、リンドウに向ける。

『こいつらが、君達の敵…アラガミだよ…』

アリサの指は引き金へ…その先を曲げようとしたとき…。

『混乱しちまったときはな、空を見るんだ』

その瞬間、アリサは銃口を天井へ向ける。

「いやぁっ！！やめてぇっ！！」

引き金を引き、通常のオラクルバレットとは思えない威力の弾が天井に命中し、教会の奥へと続く入口に瓦礫の壁を作った。

大きな爆発音が聞こえ、何事だとサクヤとハイドが駆け付けると、瓦礫の壁の前で床にへたりこんだアリサがいた。

「あなた…！！一体何をっ！？」

「ちがう…ちがうの…パパ…ママ…わたし…そんなつもりじゃ…！」

サクヤが問いただすが、アリサは既に錯乱していて求める答えは返ってこない。

「くっ！」

サクヤは仕方なく、瓦礫に向けバレットを発射するが、威力が足りず崩せない。

ソーマとコウタは神機を構えて、この状況を打破する方法を考えていた。

「マズイな…こっちも囲まれてやがる…！」

二人の目の前には、プリティビ・マータが3体いた。そのうちの1体が教会の中へ押し入ってきた。

「うわぁ！！」

コウタは寸でのところでかわす。

プリティビ・マータはゆっくりとハイド、サクヤ、アリサの方へ顔を向ける。

サクヤはプリティビ・マータへ神機を向け、バレットを撃ち込み、ハイドも応戦する。

外にいるプリティビ・マータはソーマが応戦し、それをコウタがフォローする。

「命令だ！アリサを連れてアナグラに戻れ！」

その時、瓦礫の壁越しにリンドウの声が響く。

「でも…！」

リンドウを見捨てることが出来ずサクヤが口を開くが…。

「聞こえないのか！！アリサを連れてとっととアナグラに戻れ！サクヤ！全員を統率！ソーマ！！退路を開け！！」

リンドウは声を張り上げて言った。それはいつもの飄々とした口調ではなく、緊迫感のある口調だった。

「パパ…ママ…そんな…つもりじゃ…」

ハイドはアリサが今だに錯乱しているのを見て側へ行く。

「リンドウも早く！！」

サクヤはリンドウを必死の想いで呼ぶ。

「ワリぃが、俺はちょっとこいつらの相手をしてくる！配給ビール、取っといてくれよ！！」

「駄目よ！私も残って戦うわ！」

なおも食い下がるサクヤにリンドウがもう一度命令を出した。

「サクヤ！これは命令だ！全員必ず生きて帰れ！」

「いやあぁぁぁ！！！」

サクヤの悲痛な叫びを堪え、やってきたコウタがサクヤの腕を引く。

「サクヤさん！行こう！このままじゃ全員共倒れだよ！」

「いやよ！！リンドウ！！！」

教会全体が地震がおきたように揺れ、埃が舞う。ハイドはアリサを背負って立ち上がると、サクヤに呼びかけた。

「サクヤさん！行きましょう！」

「いやよっ！！リンドウを放って行けるわけないでしょ！！」

全く聞く耳を持たないサクヤに、ハイドは珍しく覇気のこめられた口調で怒鳴った。

「見捨てられないのはみんな同じだ！！でも今は行くしかないんだ！リンドウさんの出した命令を無視してみんなを殺す気か！？そんなことしたら、リンドウさんは何て言うと思ってるんだ！！全員生きて帰れと言われただろ！！」

ハイドの言葉にはっとするサクヤ。しばらくの間を置いて…。

「……コウタ、ソーマのフォローをお願い……ハイド、ありったけのスタングレネードを渡して頂戴…あなたは私がフォローします……」

サクヤの反応を見たハイドは高ぶった気持ちを静める。

「了解！」

そして四人は外へ飛び出した。ソーマはプリティビ・マータを牽制しながら戦っていた。

「いつまでも待たせるな！早く撤退するぞ！」

ハイドたちはソーマと合流し、帰投ヘリの着陸ポイントへ急いだ。

「……行ったか」

ハイドたちが退避したあと、リンドウはプリティビ・マータを倒して、床に座り込み、壁に背を預けてタバコを吸っていた。

すると、プリティビ・マータが現れた窓辺に、今度は全身が黒い、厳つい男の顔を持つヴァジュラ種の中の最強種、「ディアウス・ピター」が現れた。

「はあ…ちょっとくらい休憩させてくれよ。身体が持たないぜ…」

タバコをもう一度味わい、それを床に投げ捨ててリンドウは立ち上

がる。

そしてリンドウは神機を肩に担ぎ、咆哮を上げる帝王に戦いを挑んだ…。

極東支部に戻った第一部隊のメンバーの表情は暗かった。

スタングレネードを全て消費してプリティビ・マータを撤くことに成功し、ヘリで無事帰投することができたが…誰も安堵などしていなかった。

帰投するなりアリサは医務室に運び込まれた。やはりまだ錯乱状態らしい…。今は薬を投与され眠っている。

サクヤの表情は目に見えて暗く、見ていて痛々しかった。ソーマは腕を組んで壁に背中からもたれ掛かり、何やら思い詰めた表情だった。コウタもいつもの明るさは消え去り、黙ってソファに座っていた。

第一部隊にヒバリから、「リンドウの腕輪の生命信号を確認するビーコンからの発信が途絶えた」と伝えられたのはこのすぐ後であった。

この日から俺達の運命は、大きく動き出した…。

二十一喰：蒼穹の月（後書き）

サクヤさん、ハイドに厳しいこと言わせてしまいました。誰よりもツライだろうに…すいません。

話は逸れますが、アリサの呪文『один（アジン）два（ドゥヴァ）три（トゥリー）』はロシア語で、アジンが1、ドゥヴァが2、トゥリーが3の数字を表しているそうですね。

要するに『イチ、ニのサン！』で引き金を引くってことみたいです。

……今更？

二十二喰：霞む希望、わずかな光（前書き）

ツバキとアリサが可哀相な回であり、そして二人に希望がもたらされる回です。

二十二喰：霞む希望、わずかな光

「教官！俺達も、リンドウさんの捜索に向かわせてください！」

「何度も言わせるな…それについては正規の部隊が動いている。経過を待て」

ブレンダンがツバキに詰め寄るが、ツバキはそれを突き返す。

「しかし！人数が多い方が、発見の可能性が…！」

今度はタツミが食い下がる。

「くどい！」

またも跳ね返すツバキ。すると次はカノンが…。

「リンドウさんは命の恩人なんです！だから今度は私たちが…！」

「くどいと言っている！！」

ツバキの張り上げた声に、第二部隊が肩を落として黙り込む。

「…ツバキさん、支部長がお呼びです」

その時ヒバリがツバキに声をかける。

「わかった。しばらく頼む」

「了解しました」

ツバキはさっさとエレベーターに乗って役員区画へ行ってしまった。

「なんでなんだよ…ツバキさん…リンドウさんのことが、心配じゃないのかよ…」

タツミが拳を握りしめて呟く。すると、後ろから事の一部始終を見ていたゲンが、第二部隊に話し掛けた。

「おい、てめぇら…あいつの目の前で何人死んだか…教えてやろうか？」

「あ…」

カノンがゲンの言いたいことを理解する。ツバキはリンドウと同じくらい長い年月を戦っている。数々の戦いを経験した彼女は、その分人の死も経験しているということだ。

「ましてや血を分けた弟だ…飛び出したいのはあいつの方だろうに…」

エントランスに沈黙が訪れる…。

ツバキは支部長室へ向かうため、廊下を歩いていた。頭の中に、第二部隊の言った台詞の数々が流れ続ける。聞きたくなくて、苦しくて…ツバキは壁に、苛立ちを乗せた拳をぶつける。

「……」

それから少しして、ツバキは支部長室へと向かった。

場所は変わってエントランスへ。

ハイドはよろず屋で、一昨日のミッションで消費したアイテムの補充をした後、ソファに座って考え込んでいた。

（同一区画に二つのチーム…一度に大量に現れた大型アラガミ…アリサの行動と錯乱…）

ソファに座って黙りこくってたハイドの前に、いつの間にかリッカが来ていた。

リッカは自販機で買ってきたと思われるジュースを二本持っていて、片方をハイドに手渡した。

「隣座るよ？」

リッカはハイドの隣に座ると、スプリングを開けてジュースを飲みはじめる。少し沈黙が続いた後…。

「リンドウさん…まだ見つかってないんだって…。」

リッカが捜索班からの報告をハイドに伝える。

「そうか…」

力無くハイドは答える。そして再び沈黙…。

やがてジュースを飲み干したリッカが立ち上がると、ハイドに辛そうな顔を向ける。

「捜索班は、ちゃんと探してくれてるけど…あまり期待しないでね…彼らの仕事は主に、腕輪と神機の捜索だから…」

「……」

リッカの言葉を黙って聞くハイド。リッカは少し心配そうな顔をしてハイドを見たが、やがて整備場へ戻って行った。

手持ち無沙汰にハイドは、リッカから貰ったジュースを口にする。

「……冷やしたカレーか…リッカなりに元気づけようとしたのかな…」

飲めたものではないが、リッカの好意を無駄にしないために一気に飲み干し、ハイドは立ち上がった。

ハイドはラボラトリ区画に来ていた。アリサの様子を見に来たのだ。

医務室の前まで来ると、中からアリサの声が聞こえて来た。

「見ないで…もう放っといてよ…来ないで…私なんか…私なんか…！！！」

「鎮静剤を！クッションは交換しておけ！」

ツバキも中にいるようだ。どうやらアリサの面倒を看護婦と一緒に看ているようだ。

「ああ…ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ……パパ…ママァ…私…違う！！…違うの！！！」

「私だ、わかるか？アリサ！」

「そんな、そんなつもりじゃなかったの！！違う！私じゃない！！私のせいじゃない！！！」

ハイドはアリサの変わり様に呆然としていたが、医務室の扉に手をかける。

「ああ、君か…」

「！」

ハイドが振り向くと、無精髭を生やし、タバコを口にくわえた男がやってきた。髪も長く、見た目はかなりルーズだが、胸に留められた医師免許がその腕を証明していた。

「極東支部の新型君…確か神霧ハイド君だったかな？」

「あなたは…？」

「私の名はオオグルマダイゴ。アリサがロシアにいた頃から、彼女

を看ている主治医だ」

そしてオオグルマは、ハイドが医務室の中に入ろうとしているのを見て話を続けた。

「今は、会わない方が良いだろうな…薬が切れるとあの調子だ。日を改めたほうがいいぞ」

「イヤァァァ！！」

アリサの絶叫が廊下に響き渡る。

「彼女だって、今の様子はあまり見られたくないだろうしな…」

オオグルマは申し訳なさそうにハイドに言った。

そしてハイドは、残念だが仕方がないと頷いて、その場を離れた。

ハイドはそれから任務が終わった後、面会出来るときは必ず医務室を訪れるようにした。アリサに何があったのか、『あの時』一体何があったのか…それが知りたかった。リンドウは未だ見つかっていない。ハイドは事の真相が知りたかった。

だがしかし、それ以上にアリサのことが心配だったのだ。あれほど冷静で、落ち着いたアリサがあまで変貌したら無理もない。

リンドウがいなくなってからすでに一週間。この四日間毎日、ハイ

ドはアリサのもとを訪れていた。

だが、『面会』と言っても、実際は「医務室に入ることが許されただけ」のようなものだった。何せ、顔を合わせるとアリサはいつも、点滴を受けながら眠っていたのだから…。

面会五日目…今日もハイドは見舞いにやってきた。アリサは案の定、寝息を立てている。

ハイドは近くにある椅子を引いて、そこに腰掛ける。

「アリサ…俺は、仲間である君を助けるって…前に言ったよね…。……情けないよな…あんな偉そうなこと言っといて、いざ君に何かあると何も出来ない…」

ハイドの独白は、アリサの他に誰もいない医務室に静かに響く。

「アリサ…俺は君を助けたい…でも、どうしたらいいのかわからないんだ…」

「話し掛けても無駄だよ」

「！」

ハイドが驚いて振り向くと、医務室の扉の前にオオグルマが立っていた。

「効果の高い鎮静薬が届いたんでね…当分意識は戻らないはずだ」

オオグルマはアリサが眠っているベッドの側まで来ながら言った。

「…そうですか」

そしてハイドは、そろそろ医務室を出ようと思い、さよならの挨拶の代わりにアリサの左手を握った。

「！？」

その瞬間、ハイドの頭に見たことのない映像が次々と映し出された。ハイドはまるで、自分がその映像を本当に「見て」いるかのような感覚を覚えた。

（な…なんだこれは…！？）

ハイドがわけがわからず混乱していたら…。

「…あれ…ここは…私…どうして…？」

アリサが目を覚ました。

「意識が…回復しただと…！？まさか…し、失礼する！」

アリサの回復にオオグルマは驚き、すぐに医務室を出て行った。

「今…あなた…の…」

そう言って、再び目を閉じるアリサ。ハイドは自分の手とアリサ、オオグルマが出て行った扉を順番に見つめた。

「……」

オオグルマは休憩スペースへ歩きながら携帯電話で話をしていた。

「……はい…ええまさか意識を取り戻すとは…」

オオグルマは驚きを隠せずに言うと、話相手の声が耳に流れる。

『原因はわかっているのかね?』

「詳しくはわかりませんが…」

『まさか…新型の?』

「ええ…例の…『新型同士の感応現象』が起きたのではないかと…」

『そうか…』

「はい…どうします?隔離しますか?」

切羽詰まった声でオオグルマが言うが、話相手はそれを否定する。

『……いや、彼女にはまだ生きていてもらおう…いざという時の「保険」、としてね…』

「そうですか…では暫くはこのまま…はい!じゃあ、私はこれで…」

そしてオオグルマは電話を切ると、医務室を見て呟いた。

「フン…面倒な事になりそうだ…」

二十二喰：霞む希望、わずかな光（後書き）

オオグルマほど書きやすい悪党は、他のゴッドイーターキャラにはいないだろうな～と書いてて思いました。

二十三喰：ツバキの涙、アリサの過去（前書き）

長くなるので二回に分けて書かせていただきます。

二十三喰：ツバキの涙、アリサの過去

リンドウが行方不明になってから8日…アリサを除いた第一部隊は、ツバキに呼び出された。

「全員そろったな。お前たちを呼び付けたのは他でもない。本日の任務を、『当該地域のアラガミ一掃』に変更する。なお検査中だったアリサは快方に向かいつつあるが、入院のため暫く前線を離れることになるだろう。最後に…本日をもって…神機、及びその適合者であるリンドウは、消息不明…除隊として扱われることになった。以上だ」

ツバキの発言にサクヤがいち早く反応した。

「そんな…腕輪も神機もまだ見つかってないんですよ!?」

「上層部の決定だ。それに、腕輪のビーコン、生体信号ともに消失したことが確認された。未確認アラガミが活性化している状況で生きているかもわからない人間を捜す余裕はない！」

食ってかかるサクヤに言い放つと、ツバキはエレベーターに乗り、別のフロアに移動してしまった。

ソーマは聞くだけ聞いたら何も言わずにどこかへ行ってしまった。

「ねえ！こんなに早く捜索が打ち切られるなんておかしいわ…！！襲われた敵も場所もわかってるのに、なんで…！」

サクヤはハイドに向かって涙を零しながら、捜索打ち切りに対する

怒りをぶつける。

「いや…ゴメン…ハイドに当たっても仕方ないね…。少し…頭を冷やしてくる…任務には間に合うようにするから…」

そう言ったサクヤは、自室へと重い足取りで向かった。

「サクヤさん、大分参ってるみたいだね…。俺、ハイドもみんなも、よくやったと思ってるよ。でも、アリサのやつ…急にどうしちゃったってんだよ…？」

コウタは身の回りの目まぐるしい変化に戸惑っているようだ。

「同じ新型なんだしさ…ハイドが側に居てやった方がいいんじゃないかな？」

「ああ…もちろんだ…」

コウタの提案にハイドは頷く。

「俺、サクヤさんの様子見てくるよ！」

「わかった…」

そう言ったコウタはエレベーターに向かって駆け出し、ベテラン区画のサクヤの部屋へと急いだ。

そのベテラン区画のある休憩スペースで、ソーマは一人腰掛けていた。

その少し離れたところで、二人のゴッドイーターがヒソヒソと話をしていた。

「おい、聞いたか？第一部隊のリンドウさんのこと…」

「ああ、またソーマのチームから殉職者が…」

「お、おい馬鹿！聞こえるぞ…！」

とある理由で、昔から並のゴッドイーターとは違うソーマには二人の会話など丸聞こえだったが、それよりもリンドウに対して腹を立てていた。

（自分の出した命令すら守れねぇのかあいつは…！！）

「クソっ！」

苛立ったソーマは声を漏らし、手に握っていた缶を怒りに任せて握り潰した。

暗い雰囲気のまま夜が終わりを告げ、日が上る。やはりどうしても昨日の決定に納得がいかなかったサクヤは、エレベーターが来るのを待っていたツバキに掛け合った。

「私…やっぱり捜索の打ち切りだなんて、納得できません」

「またその話か…上層部の決定だ。覆ることはない」

サクヤはツバキに、上層部の不当な判断に対する不満を述べるが、簡単に跳ね返される。

「腕輪どころか神機だって見つからないなんて…。神機使いが任務中に行方不明になった場合、神機が回収されるまで捜索されるのが通例じゃないですか！」

サクヤはそれでもツバキに言うが…。

「…もうアイツが姿を消してから、一週間以上になるんだな…」

ツバキは遠くを見つめるような目で話す。

「生存の可能性は限りなく0に近い…ましてや深手を負っていては…」

「でも…でも…ツバキさん…」

サクヤは涙混じりにサクヤに抗議するが、そのときエレベーターが到着し、ツバキは行ってしまった。

サクヤは肩を落とし、しばらくエレベーターの前で立ち尽くしていた。

「うっ…うう…リンドウ…」

下降するエレベーターの中でツバキは嗚咽を漏らす。その涙は誰にも見られることは無かった。

ハイドはアリサがいる医務室に来ていた。

アリサは変わらず眠り続けていて、ハイドは彼女が眠っているベッドの横で椅子に座り、考え事をしていた。

（アリサに触れた瞬間に、頭に流れ込んできたあの映像は、まず間違いなくアリサの記憶だ…原理とか理屈はわからないけど…もう一度触れれば、何かわかるかもしれない…）

やがてハイドは前の時のように、アリサの左手に手を伸ばす。

（眠ってる女の子に触れて記憶を探るなんて、本当はしちゃいけないけど…今はそんなこと言ってる場合じゃない）

その手が触れた時、ハイドは再び映像の海へと投げ出された。

廃屋が建ち並ぶ、どこかの街…。そこに、優しい女性の声が響き渡る。

「もういいかい？」

「まぁだだよ！」

そこに元気そうな女の子の声が響く。

「もういいかい？」

今度は男性の声が響く。

「まぁだだよ！」

また女の子の声がする。

（これは…アリサの子供の頃の…）

二人の男女の声は、おそらくアリサの両親のものだろう、とハイドは推測した。

三人のやり取りは続いたが、女の子…アリサが「まぁだだよ！」と言わなくなった。

アリサの両親は、近くにアリサが隠れていると悟り、辺りを探そうとする…が。

「アラガミだ！！アラガミが来たぞ！！」

と、叫び声が辺りに響く。

アリサはその光景を、隠れていたクローゼットの隙間から見ていた。

突然唸り声が聞こえて…漆黒の獅子が二つの命をあっさりと奪い、

蹂躙する。

そのアラガミは、一欠けらも残さずに二人の人間を捕喰した。骨がかみ砕かれる音、内臓を食いつぶされ血が吹き出る音…徐々にヒトの形を失っていく肉体…それらがアリサの脳内にしっかりと焼き付けられていく。

捕喰を終えたアラガミはアリサの気配を目ざとく嗅ぎ付けて、クローゼットの隙間からアリサを見据える。

「イヤァァァァ！！やめてぇぇぇぇ！！」

そこで風景は一気に変わった。

（ここは…フェンリルの訓練場…？…あれは神機が置かれるボックス…どうやらアリサの適合試験のようだな）

ボックスの前には、先程の映像から成長したアリサがいた。神機の柄を握っていた彼女は、ケースの蓋に腕を挟まれ激痛を堪える。

「幼い君は、さぞかし自分の無力さを呪ったことだろう…」

（この声はシックザール支部長…？）

「ううぁ…！！ぁぐぅ…！！」

「…その苦しみに打ち勝てば、君は親の敵を討つための力を得るのだ！」

「ううあぁぁぁぁぁぁ！！！」

「そうだ！戦え！打ち勝て！」

そこでまた風景が変わる。ハイドは今度は病院の一室にいた。アリサの入院していたフェンリルの病院のようだ…。

アリサはベッドに座りながら、横にいる医師にあることを教えられていた。

「こいつらが…君たちの敵、『アラガミ』だよ…」

「アラ…ガミ…？」

「そうだよ…こわーいこわーいアラガミだ…そして最後にこいつが」

そういって医師はアリサに見せていた画像を切り替える。そこに映し出された映像に…ハイドは驚愕した。

「君のパパとママを食べちゃった、アラガミだ…」

そこに映されていたのは、他の誰でもない…リンドウだった。

「パパ…ママ…」

アリサはぼうっとしながら呟く。

「でも…君はもう戦えるだろう？簡単なことさ…こいつに向かって、引き金を引けばいいんだよ…」

「引き金を…引く…」

「そうさ…こう唱えて引き金を引くんだ。ｏдин（アジン）…два（ドゥヴァ）…три（トゥリー）…！」

「ｏдин（アジン）…два（ドゥヴァ）…три（トゥリー）…」

アリサはその医師に続いて唱える。

「そうだよ…！そう唱えるだけで、君は強い子になれるんだ…！」

「ｏдин（アジン）…два（ドゥヴァ）…три（トゥリー）…」

そこで映像は途切れた。

二十三喰：ツバキの涙、アリサの過去（後書き）

アリサの陰惨な過去を書くのが、今回一番辛かったです。

二十四喰：リンドウの遺品（前書き）

今までで1番編集モードを開いて、直した回だと思われます…。

それでも読みづらかったらすいません…。

二十四喰：リンドウの遺品

体感時間は長いように感じたが、それは一瞬のことだった。

アリサの記憶を垣間見たハイドはいたたまれない気持ちになる。

（これが…アリサの過去…）

と、その時アリサが目を覚ました。

「…何…今の…？今…頭の中に…あなたの気持ちが流れてきて…」

アリサはゆっくりと自分の身に起こったことを話す。

「まさか…あなたの方にも…？」

「ああ…。……すまない…君の過去を見てしまった」

ハイドはアリサ記憶を垣間見たことに謝罪の言葉を述べるが、アリサは首を左右にふった。

「あの日のこと…ずっと忘れてたはずだった…」

遠い昔を思い出すような瞳でアリサは過去を告白する。

「パパとママを少し困らせてやろうと思って…かくれんぼのつもりで、近くの建物の中に隠れていたんです…『もういいかい？』、『まぁだだよ！』って…そしたら、『アラガミだ！アラガミが来たぞ！！』って叫び声に変わって…早く出ていけば良かったのに…私、

怖くて動けなくって…！パパとママが私を探しに来たけど、突然唸り声が聞こえて…目の前でパパとママが…！！」

そこまで一気に話したアリサは、辛く苦しそうな表情でハイドを見つめる。ハイドはアリサの左手にもう一度自分の手を重ねて頷く。

「私が…もっと早くに気づいて逃げていれば、二人も…。私のせいで…！！」

「そんなことない…アリサのせいじゃないよ…」

ハイドは、ついに涙をこぼしたアリサを優しく慰める。アリサがやったことは、ただのかわいい子供の悪戯であり、今の世界にはとても微笑ましく、くすぐったく、幸せな光景である。彼女に非はないはずだ。

それにあの状況では誰のせいとは到底言えないだろう。アラガミが居住区画に現れれば避難勧告が出されるはずだが、警報もアナウンスも流れていなかった。

状況から推測するに、あのアラガミは突然現れ、そしてたまたまそこに運悪くアリサの両親が居合わせただけなのだ。誰のせいでもない…強いて言うならアラガミのせいか…。

アリサが落ち着くまでハイドは静かに待っていた。涙が収まると、アリサは話を続けた。

「だから、私が新型神機使いの候補だって聞かされた時は、これで、パパとママの仇が討てると思ったんです。そう、二人を殺した…あのアラガミを…！」

その時、漆黒の帝王とリンドウの映像が重なる。頭を両手で押さえて苦しむアリサ。

見ていられなくなり、ハイドは彼女を引き寄せ、その胸に抱き留める。

「ごめんなさい…自分でもよくわからないの…！」

「……」

再び嗚咽を漏らしだしたアリサを、ハイドはなすすべもなく抱きしめていた。

その姿勢のままいくらか時が経ち、ようやくアリサは落ち着いた。アリサがハイドの胸から離れ、少し腫れた瞳でハイドを見つめる。

「ありがとう…この前もこうしてずっと手を握っててくれたの、あなただったんですね…温かい気持ちが、流れてくるの…わかったから…」

ハイドはアリサの手だけは放さない方がいいと判断し、ずっと握りつづけていた。そのことにアリサは弱々しく微笑み、ハイドに感謝した。

「大切な仲間なんだし、これくらいはね…というか、これくらいしか出来なかったんだ。前にあれだけ偉そうなこと言ってたのに…すまなかったなアリサ。すぐに助けてやれなくて…」

『仲間だからアリサを助けたい』…前にハイドに言われた言葉を思

い出すアリサ。

「あなたが謝ることなんてありません…。それに…結局助けてもらいましたから…」

アリサはハイドに微笑んだまま再び感謝する。

「ありがとう、アリサ。……そういえば、アリサが自分のこと話してくれたの、初めてだね？」

「えっ？」

言われてアリサははっとする。

自分のことを他人に話すのは、慣れていなければなかなか気恥ずかしいものだ。更に、今まで他人との関わりを拒んでいたということもあり、「腹を割って話す」ということなど、今までしたこともないアリサは急に恥ずかしくなり、その頬は少しずつ朱くなる。

「嬉しいな～…頑張って話し掛けつづけたかいがあったってもんだよ」

にこにこしながらハイドはアリサにそう言った。

「え、えと…その…あう…」

「ふふ…じゃあ、俺はそろそろ戻るかな？」

焦るアリサを見て微笑んだあと、ハイドは立ち上がった。

「あ…」

スルリとハイドの手が自分の手を離れていき、アリサは声を漏らす。

「ん？どうかした？」

「い、いえ…なんでもありません！」

アリサはハイドに悟られたくなく、必死でごまかす。「もう少し居てくれ」などと、今のアリサにはとても言えない…。

「そうか…じゃあなアリサ。明日も、任務が終わったらまた顔を出すよ」

そう言ってアリサの頭を優しく撫でたあと、ハイドは医務室から立ち去った。

アリサは頭に残ったハイドの手の感覚を味わいながら、再び眠りについた。

翌日…エントランスにてサクヤとハイドは、ツバキと三人でブリーフィングを行っていた。

「……よし、以上でブリーフィングを終わる。準備が出来次第始めてくれ」

「了解しました」

ハイドがそう言って早速任務の準備に行こうとしたときだった。

「それとサクヤ、お前は少し残れ」

ツバキはサクヤも行ってしまう前に呼び止める。

「…何か？」

「サクヤ、お前はしばらく休暇を取れ。これは上官命令だ」

ツバキの言葉を聞いた瞬間、サクヤは抗議した。

「そんな…私は…」

「サクヤ…最近鏡をみたか？」

「は…？」

私は大丈夫だとサクヤが言おうとする前にツバキに止められる。

「ほとんど寝てないんだろう？お前があいつを想う気持ちは姉として嬉しく思う…だが上官としては別だ。コンディションを整えられないものは、死を呼び込む…わかるな？」

「……はい…軽率でした…」

サクヤはツバキに謝った。サクヤの今の顔色が悪いのは誰の目にも明らかで、今日最初にハイドと顔を合わせた時に心配されていた。

「それともう一つ、お前はもう少し周りに頼ることを覚えろ…いい

な？」

ツバキはサクヤに肩の力を抜いて、仲間と助け合うことを求めた。

「…努力は…してみます」

ツバキに言われてから4時間ほど、サクヤは自室で仮眠を取ったが…やはり思うように眠れない。

ベッドから起き上がり、膝を抱き込み座るサクヤは、部屋を見渡す。

かつてリンドウが何度も訪れたこの部屋を…。今はただ思い出しか残っていない。

「おーい、サクヤいるか」

いきなり部屋にやって来るリンドウ。

「もう散々言い飽きたけど、せめてノックくらいしてから入ってきてよ…」

「ああ、ワリィワリィ」

リンドウはそう言うとソファにどっかりと腰掛ける。

「どうせ私の分の配給ビールが目当てなんでしょ？いっつもすぐ飲んじゃうから」

サクヤは呆れながら冷蔵庫を開けてビールを取り出す。

「ハハ、いいじゃんか～。どうせお前飲まないんだしさ…なんならアレと交換するか？新型のジャイアントウモロコシと」

「い～や～よ！」

なんて、やり取りをしていた頃が懐かしく感じる。

やがて、彼女はおもむろに立ち上がり、冷蔵庫の扉を開けて、何気なく配給ビールを取り出した。

「何これ…？」

ビールを取り出すと、そこから一枚のディスクが転がり出た。

『配給ビール、とっといてくれよー』

リンドウの台詞を思い出すサクヤ。急いでターミナルのスリットに入れて解析を始める。

「腕輪認証がかかってる…リンドウの？」

中身を見ることは出来ないと判断したサクヤは、続いてミッションの一部始終を記録しているデータバンクにアクセスし、「あの日」のミッションのことを調べはじめた。

（そもそも、あの日はイレギュラーが不自然なまでに多かった…指令情報との食い違い…アリサの様子もおかしかったし…。……っ！あの日のミッション履歴が消されてる！？どういうことなの、リンドウ…）

その時自室の自動ドアがバシュっと開いた。

「！！」

サクヤが驚いて扉の方を見ると、ハイドが立っていた。

「あ、驚かせてすいません…ノックするのを忘れてました」

「なんだハイドか…どうしたの？」

「サクヤさんの様子を見に来たんです。顔色が悪そうだったので…」

ハイドは心配そうにサクヤを見て言った。

「ふふ、大丈夫よ…ありがとう」

（まったく説得力がないな…あの顔）

サクヤの今の顔を観察すれば、誰もがそう思うだろう。しかし本人が大丈夫だと言うのなら、今はそういうことにしておこうとハイドは思った。

「そうですか。…あ、あと一つ報告が」

「え、何？」

ハイドはアリサが目を覚まし、過去に何があったか話してくれたことをサクヤに話した。

「…そう、アリサが…教えてくれてありがとう…」

サクヤはハイドに報告に対する感謝を述べる。

「それにしても、触れ合うだけで気持ちが通じるなんて、新型同士の能力なのかしらね…？」

「さあ…俺にも、よくわからないんです」

サクヤはハイドとアリサの間で起こった現象に素直に驚いていた。そしてアリサが目を覚まして回復に向かいつつあることを知り、彼女は喜んだ。これで、「あの日」彼女に何が起こったのか…彼女しか知らない真実を聞き出せる。

「とにかく…お願い、しばらくは彼女の側にいてあげて」

サクヤはハイドに、アリサの面倒を引き続き見ることを頼んだ。

「わかってますよ、サクヤさん。リンドウさんにも、コウタにも同じこと言われてますし、自分も最初からそうするつもりでしたから…」

ハイドは微笑んで、一通りの用事が済んだことを頭の中で確認して

立ち上がる。

「あ、そうだ…サクヤにもお願いが一つ…」

言い忘れてたと、ハイドがサクヤの方を見る。

「何？」

サクヤが尋ねる。

（ハイドが私にお願いなんて…なにかしら？）

「アリサのこと…あまり怒らないであげて下さい」

ハイドが口にした「お願い」に、サクヤは首を傾げる。

「…どういうこと？」

「サクヤさんは…アリサが回復したら、『あの日』のことを聞くつもりなんでしょう？」

「！」

「あなたがあの日のミッションに違和感を感じているのはわかっているし…それは俺も同じです。ですが、あなたは事の顛末を知って、その内容次第では…彼女を許さないつもりなんでしょう？」

「……」

ハイドの言ったことは図星だった。サクヤにとってリンドウは、ツ

バキも含めた三人で子供の頃からの付き合いだったし、大切な想い人でもあった…。もしもすべてアリサのせいだったら…許せるわけがない…。

ハイドはサクヤの胸の内に小さく灯った、暗き焔が燃え広がる前に水をかけることにしたのだ。

「一概にアリサが悪いと言えない以上、怒りをぶつける訳にはいきません。彼女の精神はまだ不安定なままなんです…安定するまでは、待っててあげて下さい…」

「…ええ…わかったわ…」

ハイドはサクヤの返事を聞くと、扉の前まで歩いて行き、そこで立ち止まる。

「サクヤさん…あの日のミッション中、あなたがどれだけ辛い思いをしていたのかを理解した上で…厳しいことを言ってしまいました…。今さらですが……ごめんなさい…」

「……」

ハイドは扉を開いて部屋から出ていった。

二十四喰：リンドウの遺品（後書き）

感情の変化を書くことの難しさを痛感した回となりました。

相変わらず、ちゃんと書けてるか不安です。

二十五喰：原隊復帰（前書き）

ようやくアリサ復帰となりました。最近一話が少しずつ長くなってきてます…。

二十五喰：原隊復帰

任務を終えてシャワーを浴びたあと、ハイドはある場所へ向かっていた。

「やあ、アリサ。具合はどう？」

ハイドが訪れたのは医務室だった。アリサは医務室に入ったときにはすでに起きていて、すぐに話ができるほどまで回復した。

「ハイドさん…ええ、体調は問題ありません」

アリサが回復してきたのは嬉しいことなのだが、ハイドにとってもっと嬉しいことは、アリサが名前を呼んでくれるようになったことである。

少しずつではあるが、アリサが自分に心を開いてきているのがわかったハイドは、最近医務室を訪れるのが楽しみになっていた。

「今日は…何の任務に行ってきたんですか？」

「ボルグ・カムランの討伐だよ。やっぱり大型アラガミは手強いね…まだまだ鍛練が必要だよ」

「クス…そうですか…」

また、アリサは少しだけ笑うようになった。それだけでも充分な変化である。

二人は他愛のない会話をして過ごしていたが、しばらくするとサクヤが尋ねてきた。

「あ…サクヤさん…」

サクヤはアリサの正面に立つと穏やかな表情で彼女を見つめる。

「…こんなところに…何の用ですか…？」

アリサはサクヤに少し怯えているのか、震えた声で聞いた。リンドウと深く繋がっていた人だ…無理もない…とハイドは思う。

「大丈夫、あなたを責めに来たわけじゃないわ」

サクヤはアリサを落ち着かせるように言った。

「だったら…！」

「話を聞かせてほしいのよ…その…あの日あの瞬間、あなたに起こったことを…。本当は、あなたがしたことには納得出来ない…でも、だからこそ、そこにある違和感が何なのか知りたいの…」

サクヤはアリサをまっすぐ見つめて言った。

「昔の話はハイドから聞いたわ…辛いお願いしてるのは承知の上よ…」

そう言われたアリサはハイドを見つめる。

「俺にも…聞かせてくれないか？アリサのことを…」

アリサはハイドの言葉を聞き、サクヤに向き直って話を始めた。

「…私が、定期的にメンタルケアを受けているのは…ご存知ですが？」

「ええ、知ってるわ」サクヤは頷く。

「両親を殺されてから数年間…私は精神不安定な状態で、病院生活を送っていました…。…ですがある日、フェンリルから『新型神機使いの適合候補者に選ばれた』と連絡が入って…それでそれまでの病院から、無理矢理フェンリルの附属病院に移送されたんです…」

「そうだったの…」

「いえ、いいんです…新しい先生は良くしてくれたし…私もこれで両親の仇が討てるって思ったから…」

「……」

「それからは、症状を薬で押さえながら…敵のこと、戦い方のことを勉強しました。フェンリルにいた新しい先生はとっても優しかったんです…この極東支部にも、一緒に赴任してきてくれて…」

「その先生は、今もアナグラにいるってことね？」

サクヤがアリサの言う『先生』について聞く。

「はい…皆さんも知ってる、『オオグルマ先生』ですよ？」

「そう…ごめんなさい、続けて？」

サクヤは少し考えたあと、アリサの話の続きを求める。

「メンタルケアを続けながら、両親の仇のアラガミをずっと探してました…極東支部エリアにそいつが出没するって情報をもらって、絶対に探し出してやるって思いながら赴任して…やっと見つけたと思ったのに…！何故かわからないけど！あの瞬間、私の頭の中でリンドウさんがその『仇』になってて…！！」

ハイドは、病院で仇だと言われ、リンドウの映像を見せられているアリサの姿を思い出す。

「気がついたら…彼に向かって銃を…！！」

そこまで言うと、あの瞬間のことを思い出したのか、アリサが頭を両手で押さえて絶叫した。ぽろぽろと涙がこぼれ出し、肩と唇が震えていた。

「…無理をさせてごめんね…ありがとうアリサ…またくるわ」

そう言ったサクヤは、ハイドに「アリサを頼む」と無言で頷いて、ハイドが頷き返したのを見ると、医務室を出ていった。

「…私…どうしたら…」

「アリサ…リンドウさんが行方不明になったのは、君のせいじゃない…。いつか真実が明るみに出る時が来る。サクヤさんも、きっとわかってくれる…。だから今はまだ何も考えず、回復に専念すればいいさ」

途方にくれるアリサの手を握って、ハイドは笑顔で答えた。

（とは言っても、もうほとんど検討がついてるんだよな…シックザール支部長はアリサの神機適合テストを見に来ていた。ロシア支部から連れて来たのもあの人だ。そして、入院していたアリサに『嘘の仇』と変な呪文みたいなものを教えていたあの医師は、まず間違いなくオオグルマだ…。支部長まで絡んでるとなると……しばらくは黙っといて、様子を見た方が良さそうだな…）

ハイドは頭の中で、今後の方針について思考を巡らしながら、アリサが落ち着きを取り戻すまで側にいることにした。

そして、『あの日』から約二週間後…エントランスで会話をしていたハイドとコウタのもとに、アリサがやって来た。

二人はアリサの姿に驚いていると、アリサがゆっくりと口を開いた。

「本日付けで原隊復帰となりました…。また、よろしくお願いします…」

アリサは少し怯えたような、緊張したような声で言った。

アリサの復帰報告にコウタが反応する。

「実戦にはいつから復帰なの？」

「…まだ、決まってません…」

「…そうなんだ」

なんと言葉をかければいいのか分からず、話があまり進展しない。

その時、下側のエントランスの方から、ゴッドイーター達の会話が聞こえてきた。

「おいおい、聞いたか？例の新型の片割れ、やっと復帰したらしいぜ？」

「ああ、リンドウさんを新種のヴァジュラと一緒に閉じ込めて、見殺しにしたヤローだろ？」

「ところが、あんなに威張りちらしてたクセに、結局戦えなくなったんだってさ！」

「ははははっ！結局口ばっかりじゃねえか！」

アリサを嘲り、笑いのネタにするような会話にハイドとコウタは苛立つ。アリサは顔を伏せて堪えるしかなかった。

アリサをチラチラ見ていた周りの人間も、ひそひそ話をしたり、クスクス笑ったりしていた。

「…あなたも、笑えばいいじゃないですか…」

アリサは、自分がひどいことを言ったコウタに向かって言った。

「俺達は笑ったりしないよ…」

コウタはそう答えるが、アリサは黙ってしまう。耐え切れなくなりコウタは必死になって話題を取り出す。

「ああ…ええと…それより、リンドウさんがやられた新種のヴァジュラ…」

「！！」

アリサが肩をビクッと震わせる。

（『リンドウさんがやられた』はＮＧワードだぞコウタ…）

ハイドはコウタの空気の読めなさを呪った。

「欧州支部からも目撃報告があったみたいだね！ここにきて新種との遭遇例が増えてきてるのは、何かの兆しなのかも知れないね～…なんて…」

結局話が中途半端になり、アリサは更に黙り込む。

「……」

「……」

やがてコウタは物凄い速さでハイドに向き直り、肩に手を置いたあと、顔の前で両手を合わせる。

「…スマン、あとは頼んだ…」

そう言ってコウタは足早にその場を立ち去った。

（クールな声で言っても全然クールじゃないぞコウタ…）

遠のいていく親友の後ろ姿を見てそう思うハイド。

「お願いがあるんです」

その時、ようやくアリサが口を開いた。

「何？」

ハイドはアリサに向き直り、言葉を待つ。

「あの…その…」

「？」

「私に…もう一度、ちゃんと戦い方を教えてくれませんか！」

「戦い方を…？」

「はい…今度こそ本当に、自分の意志で…大切な人を守りたいんです！」

「…ああ、手伝うよ！」

アリサの真剣な眼差しにハイドは笑顔で答える。

「ありがとうございます！」

ハイドの了承にアリサも笑顔で答える。

「ただ、一つだけいいかな？」

「え、なんですか？」

「俺はちょっと前まで、リンドウさんに追いつきたくて…がむしゃらに訓練に励んでいたんだ」

『リンドウに追いつきたい』というハイドの言葉に胸を締め付けられるアリサ。だがまだ話が続くようなので、今は無理矢理押さえつける。

「リンドウさんに、『とっとと背中を預けられるぐらい育ってくれ』って言われてたのもあったのかもしれない…あるミッションで、俺はリンドウさんとサクヤさんに頼らずに、一人で討伐対象全てを一度に相手してしまってね…。今思えば、愚かな行為だったよ…」

「……それで、どうなったんですか？」

アリサはハイドの話の先が知りたくて尋ねた。

「結局、持ちこたえられなくて信号弾を使ったんだ。そしたら、すぐにリンドウさん達が現れてフォローしてくれたんだよ。俺の戦いを、影から見守っててくれたんだ」

「……」

そこまで聞いてアリサは、リンドウ達が何を伝えたかったのかだいたいの想像が出来た。

「『お前は一人じゃない』、『人は良かれあしかれ、他人に支えてもらってる』…当たり前すぎることを教えてくれた…。そしてリンドウさんは、『焦ってでも強くなろうとはするな』って言ってくれたんだ」

「…ハイドさん…」

「だからさ…アリサ…。一歩ずつ強くなろう?焦る必要はないんだ。…そして俺は、そんなアリサを力の限り支えるよ…アリサが強くなれるその日まで。一歩ずつ強くなって、陰口叩くやつらをいつか見返してやろう!」

「…はい!」

アリサの表情はここ最近で、最も明るい…綺麗な笑顔だった。

二十五喰：原隊復帰（後書き）

アリサを嘲笑う台詞を増やそうか、ハイドとコウタが庇う場面を入れようか考えたのですが、すでに傷心しているアリサを更に痛めつけるのは嫌だなと感じてやめました。

二十六喰：守る力を（前書き）

アリサの任務にハイドが付き合う回です。男子にはうれしいシチュエーションもあります。

二十六喰：守る力を

日が傾いて、影が長くなった頃…ハイドとアリサは『愚者の空母』に来ていた。

かつて…アラガミが出現し、世界が混乱を始めた隙を狙って、武器や貴金類を狙っていた二つの武装集団がいた。そして、彼らが空母の上で争っていたところにアラガミが現れ、両者は壊滅…皆殺しとなったのである。一際大きく開いた穴はアラガミに喰われてできたものであり、人間の愚かさを今も示し続けている。

船が座礁した今となってはアラガミの徘徊ルートの一つになっており、度々出動要請がかかる。

「アリサ…大丈夫か？」

ハイドはアリサの表情を窺いながら気遣う。

「は…はい…」

アリサは神機を握る手に力を込める。

…やはりまだ恐れているのか、肩が震え、顔色がすぐれない。

「やっぱりまだ、ちょっと怖い…？」

ハイドは神機を肩に担いで聞く。

「……すいません」

アリサは正直に言った。

「まあ、しょうがないよ。焦らずがんばろう？」

ハイドは明るい声でアリサを元気づける。

「…はい！」

アリサはハイドに微笑み返した。

と、その時。

「グオォォォォ……！」

「きゃあっ！！」

遠くから聞こえてきたアラガミの声に驚き、アリサはハイドの左腕に両手を絡めてしがみつく。

女の子の胸に自分の腕を包まれて、普通なら喜ぶべきシチュエーションなのだが…今のハイドにアリサの、歳の割に豊かな胸の感触を味わうような余裕はなかった。

……とにかく腕が痛い。

（痛たたた！つ、爪がっ…腕の巻き込み方がっ…！！）

ゴッドイーターは遠慮なしに常人に抱き着くと、その人の中身を粉々に粉砕してしまうと言われている。

ハイドの身体がオラクル細胞によって強化されてなかったら、今頃彼の腕には１０個の穴が開き、骨は複雑に折れ曲がっていた。

（やっぱりまだアラガミに対する恐怖は完全には克服できてな痛たたた…！…なら…）

痛みに耐えながらハイドは少し考えると…。

「あ…アリサ！あの雲、羊の群れに見えない？」

ハイドが空を指差してアリサに言った。

「えっ？」

急にハイドに全く関係ないことを言われるアリサ。

と、ここでアリサ腕の力が抜けハイドは解放される。

言われてハイドの指差す方を見ると、夕暮れに朱く染まった羊雲が浮かんでいた。

「……あ…」

アリサはようやくハイドが言いたいことがわかった。

『混乱しちまった時はな、空を見るんだ。そんで動物に似た雲を見つけてみろ、落ち着くぞ？』

かつてリンドウに言われたことを思い出すアリサ。

「……そうですね…じゃあアレは、その羊を束ねる牧羊犬…でしょうか？」

アリサが指差す方を見ると、確かにそれらしき雲が浮かんでいる。

「そうかもね…でも、どっちかっていうと馬に見えない？」

ハイドが「馬に見える」、と言ったのを聞いたアリサは…。

「絶対犬ですよ！羊と牧羊犬で合っていいじゃないですか！」

「うん、馬も合ってる気もするけどね」

「と、とにかく…どう見てもアレは犬ですっ！」

「はいはい、犬だよね～」

と言ってハイドはアリサの頭を撫でる。

「ちょっ…！もう、子供扱いしないで下さい！」

夕焼けで分かりづらいが、頬を赤く染めてアリサはハイドの手をどかす。

「ぷっ…！ふふ…ははは…」

アリサとのやり取りで笑い出すハイド。

「わ、笑わないでくださいよハイドさん！」

アリサはハイドの反応を見て怒ったあと、呆れ笑いになり、いつの間にか自分も笑っていた。

「ふふ…落ち着いた？」

「ええ、おかげ様で…」

ハイドがようやく笑いの波が収まって聞くと、アリサが笑顔で答えた。

「そうか…。もうそろそろ行くか」

「…はい！」

アリサはようやく肩の力を抜けたようだ。

「じゃあブリーフィングを始めよう。今日の任務では、俺が前線に出て陽動、アリサにはバックアップをしてもらうことにするよ」

「了解！」

「ただ…」

「？」

「バックアップとは言ったけど…俺へのフォローは、本当に必要な時だけにしてくれ。もう何回も言ったけど、焦らずに一歩ずつ強くなることが大事なんだ。だから今日アリサには、『自身の防衛を優先すること』と、『実戦における立ち回り方を再習得すること』…

この二つをやってほしい」

「でも…それじゃハイドさんが…」

アリサの言うとおり、ハイドの指示を守って行動した場合、今日ハイドは何の後ろ盾もなく戦うことになる。

「俺のことは気にしなくていい。自分の身が危なくなったら遠慮なく逃げてくれ。二週間のブランクはさすがに大きいから、アリサにはなるべく無理はしないでほしいんだ…」

「……わかりました」

アリサは少し悩んだが返事をして、今日のミッションが開始された。

アナグラへと向かう帰投ヘリの中で、ハイドとアリサはミッションにおける、反省と改善点について話し合っていた。

「どうだった？久しぶりの任務は」

ハイドが向かいの椅子に座ってるアリサに尋ねた。

任務についてのブリーフィングでハイドが指示した通り、アリサは一切攻撃参加をせず、敵味方それぞれに対する距離感を掴む練習をさせていた。

「やはりと言うか…あまり以前の様に動けなかったですね…案の定、

距離感も鈍ってましたし…」

「…やっぱり間合いを保つという点では、ブランクが効いたね」

「…そうですね…ついつい後ろに下がって、結局ハイドさんとの距離が広がってしまいました…」

「味方とアラガミ、それぞれの距離感はどの戦術においても重要だから、次のミッションでも今日と同じ目標でやってみようか？」

「はい！またお願いします！」

「あと、神機の遠近切り替えのタイミングについてだけど……」

話が途切れることもなく、ヘリはアナグラに到着した。

二人は神機を保管庫エリアに持って行く間や、食堂で食事をしている時など、空いている時間をたっぷり使って話し合っていた。

……ちなみに、ハイドに用事があったコウタは、一度も声をかけれずに一日を終えるという淋しい思いをしていた。

時間はあっという間に過ぎていき、もう少しで就寝時間になるという頃…自分の個室の前まで来ると、ハイドはアリサの方を向く。

「じゃあ、明日も頑張ろう」

「はい、お休みなさい…ハイドさん」

「ああ、おやすみアリサ」

そしてハイドは自室のドアを開けて、部屋の奥へ消えて行った。

アリサはドアが閉まる瞬間まで、ハイドの後ろ姿を微笑みながら見つめていた。

ベッドに潜り込んだアリサは、ハイドのことを思い浮かべる。

優しい笑顔で自分を励ましてくれたり…戦闘中にさりげなく自分をカバーしてくれたり…ミッションが終わった後に、自分の今後の方針について一生懸命話し合ってくれた、ハイドのことを…。

（ハイドさんは…自分のこともあるのに、私の力になろうと頑張ってくれてる……それなのに私は…）

アリサは自分の弱さと不甲斐なさに打ちのめされ、一刻も早く強くなりたいと感じる。

（でも駄目…焦らずに一歩ずつ強くなるって…ハイドさんと約束したんだから…）

アリサは目を閉じて、自分とハイドの間で交わした約束を改めて確認した。

（ハイドさんは私のことをしっかり守ってくれた。…それだけの力を持っていたから…。私もいつか…彼の背中を守る力を……今はまだ無理でも必ず…ハイドさんに恩返しが出来るくらい強くなってみせる…）

アリサは、自分を救ってくれたハイドにいつか必ず恩を返す決意をした。

そして、久しぶりの任務で疲労した身体は、アリサの意識をあっという間に眠りの海に引きずり込んだ。

二十六喰：守る力を（後書き）

最近地味にアクセス数が気になってます。お気に入りに登録して下さってる方も少しずつ増えてきてて…何て言うか…嬉しいです。

二十七喰：決意と克服（前書き）

アリサがトラウマと向き合う山場回です。

二十七喰：決意と克服

雨が降りしきる嘆きの平原…その一角から大きな爆発音とともに煙りが上がる。

「グオォォォォ！！」

「来るぞアリサ！！」

「はい！！」

シユウが怒り狂った叫び声をあげ、ハイドとアリサが身構える。

シユウは飛び上がると二人目掛けて低空飛行しながら突進するが、ハイドはわずかな隙間をくぐり抜け、アリサはジャンプでかわす。

シユウは更なる追撃を入れようとするが、振り返ったところでハイドに頭を撃ち抜かれた。

最も弱い部分を的確に攻撃されたシユウはよろけた上、そこで更にアリサに腕を斬られる。

シユウは身体の後ろで両手を合わせ、エネルギーを収束し、ハイドに照準を合わせる。

（あれは…とある亀の仙人から教えてもらえるという必殺技か！）

呑気なことを考えつつ、スタングレネードを使うことを忘れないハイド。

シユウがうずくまっている隙にハイドとアリサが捕喰を行うと、二人はすぐさま神機を変形させて、互いを狙う。

「受け取れ！」

「どうぞ！」

ハイドとアリサはお互いに三発ずつアラガミバレットを撃ち渡し、リンクバーストＬＶ３を発動する。

『うおおぉぉぉぉぉ！！』

二人の雄叫びが、嘆きの平原に響き渡る。

その時、シユウの視力が回復し、二人…正確にはハイドに向かって走り出した。

ハイドは神機を変形させて剣形態にすると、シユウに向かって突進する。

両者の距離が一気に狭まり、そこからはスローモーション映像のように見えた。シユウが右腕を突き出してハイドの頭を狙い、ハイドがそれを神機で逸らしてシユウの懐に潜り込み、天へ昇るように斬り上げる。

そのまま神機は剣から銃へと変形し…。

「吹き飛べ！！」

濃縮アラガミバレットをシユウに撃ち込む。

ＬＶ３に強化されたバレットは、シユウに当たった瞬間に大爆発を起こし、その身体の至る所を破壊していく。

そして、ハイドの脇から飛び出したアリサが再び斬りつける。

しかしシユウはまだ倒れなかった。片足を引きずりながら背を向けて逃げていく。

「…終わりです」

ドォン！！

今日何度目かわからない爆発音が鳴り響く

アリサの濃縮アラガミバレットを浴びせられ、シユウはついに絶命した。

「お疲れ様、アリサ」

「はい！ハイドさんもお疲れ様です」

互いを労い、シユウの素材を回収した二人は歩きながら話をしていた。

「それにしても、もう大型アラガミと渡り合えるようになるなんて…明日にでも復帰出来るんじゃないかな？」

アリサの戦闘中の動作や神機の扱いは、ほぼ入院する以前のものま

でに修正できた。もうチームに合流してもいい頃だろう。

「ええ…まだ若干不安もありますが…短期間でここまで戦えるようになったのは…ハイドさんのおかげです」

アリサは、ハイドとの特訓が始まった一週間前からの出来事を思い返しながら言った。

「私のために貴重な時間を使わせてしまって、すいませんでした。そして…ありがとうございます！」

「ふふ…どういたしまして。これからも、よろしく頼むよ」

「はい！」

やがて二人が乗ったヘリは、アナグラへ向けて飛び立った。

「ふむ…アリサ君は、もう大型アラガミを相手にできるほどにまで回復したのか…」

ミッション完遂の報告書に目を通したシックザールが呟くように言った。

「ええ、もう正式に復帰させてもいいかと」

シックザールの言葉を聞いたツバキは、アリサの復帰を打診してみる。

「そうだな。彼女の正式な復帰の日時は君に任せよう…好きなようにしたまえ」

「了解しました」

ツバキはそう言うと執務室を出て、すぐさまアリサを復帰させるため、人事部へと急いだ。

ツバキが出て行った後、シックザールはテーブルに肘をつき、両手を口の前で組んで再び呟く。

「まさか、こうも早く復帰するとは…これも、『新型の力』…なのか…」

翌日、ツバキはアリサを第一部隊（ソーマを除く）の皆の前に立たせ、正式に復帰したという人事部の決定事項を簡潔に述べた。

その後、今日の任務に関するブリーフィングが始まった。

「今日お前たちには、ヴァジュラ一頭の討伐に行ってもらうことになっている。出撃時刻は一五〇〇…場所は贖罪の街だ…偵察部隊からの報告では、周囲に小型・大型アラガミの存在は確認されてない。説明は以上だ…何か質問はあるか？」

ツバキの問いにコウタが手を挙げた。

「あの、アリサを今回の任務に出してあげて欲しいな～…なんて…。ほら、彼女最近…その…頑張ってると思うんだ！」

コウタの意見にツバキが反応する。

「お前もか……ハイド、お前はどう思う？」

ツバキはここ最近、ほぼアリサを付きっきりで面倒見ていたハイドに尋ねた。

「アリサはもう充分戦えるようになりました。俺は出しても大丈夫だと思いますが…」

「そうか…サクヤ、お前はどうだ？」

ツバキに話を振られたサクヤは少し考えて…。

「……賛成です」

ツバキをしっかり見て言い放つ。

「だが、今回のターゲットは…『アレ』と同型の個体だぞ……大丈夫か？」

ツバキの気遣いが、何だかくすぐったいような気がするアリサ。そして、少し考えたのち…。

「行きます……行かせて下さい…！」

決意に満ちた瞳で、アリサはツバキに頼んだ。

「よろしい…無理はするなよ？」

「ハイ！」

「いぇ～い！俺がいるから大丈夫だよ！ね！」

コウタの台詞に、彼以外以来の人間が考えこむ。

（不安だ）

（さすがに…ちょっと不安かな…？）

（かなり不安ね）

（不安です…）

四人の思考がシンクロした瞬間だった。

時刻は午後３時３０分…フェンリルが掲げる、神殺しの神話を持つ狼と、屍を意味するドクロを合わせた紋章を印したヘリは、荒廃した街に着陸した。

やがてそのヘリから、ハイド、コウタ、サクヤ、アリサが降り立つ。

待機地点に四人が集合すると、サクヤが口を開く。

「では、早速ブリーフィングを始めます。今回の任務では、まずハイドとアリサ、コウタと私の二組に分かれて索敵、目標を発見次第交戦、及び合流…いいかしら？」

「了解！」

「了解しました！」

「了解っす！」

返事を聞いたサクヤはアリサの方を向いた。

「アリサ…」

「はい…」

アリサは何だろう？とサクヤの言葉を待つ。

「…くれぐれも、無茶や無理はしないでね…」

「…はい！」

アリサは嬉しかった。自分を憎んでいるはずのサクヤから心配されたことが…。サクヤの本心はわからないが、その言葉だけでも充分有り難かった。

「さあ、行くわよ！」

サクヤは時間を確認して、チームに呼びかける。

「ミッションスタート！索敵開始！」

『了解！』

ハイドとアリサは東側のエリアへ、コウタとサクヤは西側のエリアへと向かう。

「アリサ！いつも通り、背中を任せるよ！」

「…はい！」

アリサは前を走るハイドの背中を見ながら決意した。

（守ってみせる…もう二度と、誰かが目の前で死ぬのを指をくわえて見ていたりなんかしない！それにこの人は…私を救ってくれた大切な人…だから、今度は私が助ける！！）

二人は大きく開けたスペースへ出たが、ヴァジュラは見当たらなかった。

二人が少しの間辺りを探索していると、西の方角から発砲音が聞こえてきた。

「！…あっちか！」

「急ぎましょう！」

ハイドとアリサは西側の教会の方へ急いだ。

「当たれぇ！！」

コウタが発射した弾丸はヴァジュラに向かって飛んでいくが、素早い動きでかわしてコウタに飛び掛かる。

（舐めんなよ！）

以前、似たような攻撃を受けたことがあるコウタは、しっかり対策を練っていた。

素早くバレットを装填し直して発射すると、撃った直後に足元で爆発し、コウタは後ろに大きく吹っ飛んだ。

ヴァジュラの攻撃はコウタに当たらず空を切る。

「見たか！これぞ必殺『緊急回避』！！」

全身黒焦げたコウタがキメ顔で言うが、あまりかっこよくはない。

「もう少し安全な回避を覚えなさい…」

サクヤが少々呆れながら、レーザーを放ち援護する。

『加勢します！』

同時に二人の声が響き、コウタとサクヤが振り向くと、ハイドとアリサがやってきた。

ハイドはヴァジュラに斬りかかると、アリサが射撃で援護する。
この時、アリサの心臓は高鳴っていた。…恐怖によって…。

なにせバレットを撃っている間、ずっとヴァジュラと『あのアラガミ』が重なって見えていたのだ。

目線が合うと、それだけでアリサの恐怖は増大するが、今はなんとか根性と理性で押さえ込んでいた。

だが、彼女の感情の変化は戦いに表れる。バレットがヴァジュラの弱点にあまり当たらないのだ。正確には当たっているのだが、わずかに逸れている。

サクヤとコウタは、バレットや土煙によって見えなかったが、間近で戦っていたハイドには、アリサの感情の変化が手に取るようにわかる。

最近の任務ではずっとアリサとペアで組んでいたのだ。わからないはずがない。

（アリサ…やっぱり、まだ…。戦えてるだけでも、君は充分成長したよ…。なるべくコイツの視界に入って邪魔をするか）

そう思考したハイドは斬撃を与えながら、ヴァジュラの視界を横切るように動き回る。

アリサは胸の苦しさに必死になって堪えていた。こめかみに汗が伝い落ち、息は不自然に荒くなる。震える手を無理矢理押さえ込んで照準を合わせる。

「！」

アリサがヴァジュラを凝視していると、ハイドが突然動きを変えた。

（ハイドさん…）

アリサは、ハイドが今の自分の状態を戦いの中で悟ったことがわかった。

（…結局また心配をかけてるんですね、私は…）

神機を握る力を抜き…。

（…ありがとうございます…ハイドさん…こんなに私のことを見てくれて…）

改めて握り直す…。

（ハイドさん…あなたの背中は…）

そして引き金に指を…。

（私が守ってみせる！！）

ドオォン！！と、アリサの放ったオラクルバレットはヴァジュラの胴へ一直線に飛んでいき、命中した。

クリーンヒットしたのか、ヴァジュラが怯み、大きくのけ反る。そして一目散に逃げ出した。

「逃がしちゃ駄目だ！追うよ！」

ヴァジュラに向かって散弾をばらまくが当たらず、コウタが声を上げる。

「一つに固まってると狙われるわ！一旦散開して！……皆、慎重にね…」

サクヤの合図で散り散りになる第一部隊。……だが、アリサが少し出遅れた。

一人になったことで再び恐怖が込み上げてくるが、自分を心の中で叱咤し、アリサは駆け出した。

開けた場所…教会の裏側に来たアリサは、今は塞がって使えない裏口の影に一旦隠れ、状況を窺う。

すると、ビルにできた大穴から、先程のヴァジュラが姿を現す。

アリサは回りを見渡すが、ハイドもサクヤもコウタも来る気配はない。

「…パパ…ママ……っ！！」

ついに決心したアリサはビルから飛び出し、ヴァジュラに銃を向ける。向こうもアリサを見つけ、臨戦体勢に入る。

「はあっ…！はあ…っ！」

ドクドクと心臓が高鳴り、その音は耳にも伝わる。唇も脚も震えて

いたが、アリサは今はなんとか立っていた。

しかし、ヴァジュラの咆哮によって、アリサの『あの記憶』が呼び起こされる。

そしてアリサはゆっくりと脱力し、片膝をついてしまった。完全に無防備な状態である。そしてそこにハイドがやって来た。

「っ！アリサ！」

ハイドは放心状態だったアリサを見つけると駆け寄った。そしてヴァジュラは、アリサよりも近くに現れたご馳走に狙いをさだめて飛び上がる。

それを見たアリサの思考は高速回転し、自分の身体に命令し続けた。

（動いて！動いてっ！！私にまた、誰かが死ぬのを指をくわえて黙って見てろっていうの！？）

ヴァジュラが空からハイドに迫る。

アリサの片足が伸びて身体をしっかり支える。

（ハイドさんは…！ハイドさんは…！）

ヴァジュラの牙がハイドの首を狙う。

アリサは引き金に指をかけ…。

（あなたは……私が守るっ！！）

「避けてぇーーーー！！！」

アリサはハイドの頭に向けてバレットを放つ。正確にはヴァジュラの首を。

「うおっ！！」

驚いたハイドは前転してかわす。そしてバレットはヴァジュラに吸い込まれていった。

辺りに大きな爆発音が響き、ヴァジュラは力尽きた。

（狙われてたのか…危なかった…）

ハイドはヴァジュラの死骸を見て、自分に訪れた死の危機を知る。

アリサは神機を構えたまま、立ち尽くしていた。

「はあっ…はあっ…はあ…」

ヴァジュラを倒した…ハイドは無事…。それがわかった後、荒かった呼吸は収まり、アリサは地面にぺたんと座り込んだ。

やがて涙が零れ出し、頬を伝い落ちる。

そこにサクヤとコウタが合流した。二人はアリサの様子を見るとハイドの側へ。

「どうしたんだ？」

コウタがアリサを指差してハイドに尋ねる。

「あのヴァジュラにトドメを刺して、危ないところだった俺を助けてくれたんだ。…アリサはようやく、トラウマを乗り越えたんだよ…」

ハイドが笑顔でそう言うと、サクヤがアリサに向かって歩いていく。

そしてアリサが足元にまで近づいた時、サクヤは屈んで、アリサをそっと抱きしめた。

アリサもサクヤを抱きしめ返す。

「ごめんなさい…ごめんなさい…」

アリサは涙を零しつづけて、サクヤに謝った。あの事件から数週間、ようやくアリサはサクヤに謝ることが出来たのだ。

サクヤはアリサを抱きしめながらそっと頭を撫でる。

アリサが乗り越えた『過去』は、夕日の日差しに包まれて黒く舞い上がる雪となり…霧散していった。

二十七喰：決意と克服（後書き）

突然ですが、僕には約二十年間ほどの人生を生きてきて、まだトラウマがありません。それはある意味幸せなことだと思ってます。僕が脳天気なだけかも知れませんが…。

ですが、アリサのようにつらい過去を持っていたり、深刻な悩みを持っている人達は、それを乗り越えた時にとても強い力を手にできる…。

ある意味、羨ましく思う時もあります。

二十八喰：許し（前書き）

この話でようやくアリサ編が終了します。寂しいような気がします、個人的に。

二十八喰：許し

アリサがヴァジュラを倒してから約３０分後、第一部隊が極東支部に戻ると、ツバキが出撃ゲートの前で待っていた。

「全員無事のようだな…いや、そうでもないか？」

ツバキは黒焦げたコウタを見て訂正する。

「なんて目で見てるんスかツバキさん！」

「フ、冗談だ…。聞いたぞアリサ、ヴァジュラにトドメを刺したらしいじゃないか」

コウタをからかったあと、ツバキはアリサに向き直る。

「よく頑張ったな…これからも精進してくれ」

「は…はい…」

相手がツバキだからか、アリサは控えめに返事をする。

アリサを褒めたツバキは、報告書の提出は忘れないように、と注意した後、エレベーターに乗って行ってしまった。

「よお、第一部隊！」

その時声をかけてきたのは、第二部隊班長タツミだった。カノンとブレンダンも一緒だ。

「市街地のヴァジュラを倒したんだって？」

「あの個体は特に強力で、他の部隊も対処しきれず手を焼いていたんだが…さすがだな」

「すごいですよね～。どなたが倒したんですか？」

「アレを倒したのは、アリサですよ」

タツミ達が代わる代わるに話し、カノンの質問にハイドが答える。

「……」

アリサは俯き、少し間を置いた後…顔を上げて、タツミの前に進みでる。

「そっか、アリサが倒したのか！そいつはよかったな！確か苦手だったんだろ？ヴァジュラ種…」

「え？…あ、ええ…まあ…」

「んじゃ！アリサの苦手克服記念の食事会でもするか？」

タツミが明るい声で聞いた。

「お前はめでたいことや良いことがあれば、何かと食事したがるな…」

ブレンダンは提案者のタツミにつっこむ。

「いいんだよ！ゴッドイーターは何事も喰うことが仕事なんだからよ！」

「ゴッドイーターが仕事で喰事するのはアラガミだけだと思っていたが…そうだったのか…これからは真面目に食べなければならんな」

「…しまったな…ブレンダンの馬鹿真面目な部分引き出しちまった…」

タツミがブレンダンと天然漫才をやっていると、カノンが横から割って入った。

「私、クッキー焼いて持ってきますよ！」

「えっ？」

突然のカノンの言葉にアリサは面食らう。

「おお～そう！そう！カノンのクッキーはすっげぇ美味いんだよ！」

タツミが話のレーンチェンジに素早く反応する。

「何か嫌いな味とか食感があったら、遠慮なく言って下さいね？」

「あ、あの！…そんなことより…」

このままでは、自分のしたい話が脇に逸れそうに感じて、アリサが声を張り上げたので第二部隊は続きを待つ。

「あの…タツミさん…私は以前、あなたに酷いことを言ってしまいました…そのことを、まだ謝ってません。本当に、すみませんでした！」

アリサは深々と頭を下げる。

「あ～…」

タツミは居心地悪そうに頬をポリポリと掻く。

「まあ、気にすんな！俺も、もう気にしてないからさ。確かにアリサの言い分も筋は通ってた…だから俺たちはこれから、人も、その人たちが住む居場所も、きっちり防衛してみせる！」

そうはっきりと言い切ったタツミは凄く清々しかった。

「…はい！」

アリサに笑顔が戻った。と、ここでブレンダンが話に入ってきた。

「なあ、タツミ」

「んあ？どした？」

「真面目に喰事をするという話についてだが、姿勢と身なりを正し、食べれることに感謝するのは当然として…料理にフォークとスプーンを差し込む位置や角度、及び深さはどのくらいにすればいいのだろうか？」

「知るかっ！！！」

などと再びタツミとブレンダンは漫才を始め、カノンはその収拾に苦労しながら二人を連れていき、ハイドたちと別れた。

（よかったなアリサ…無事許してもらえて…）

アリサを見てハイドはそんなことを思っていた。アリサの表情は今、嬉しさと安堵の感情が入り混じっていた。

「支部長…この、人事部から届いたの書類の内容…間違いないのですか？」

ツバキは椅子に深く腰掛けるシックザールに書類が入った封筒を見せて問いただす。

「もちろんだ…今後は、彼を中心とした体制に入っていくことにした」

「しかし、いささか経験不足なのでは…？」

ツバキが眉をひそめてシックザールに聞き返す。

「心配はいらない…新型神機使いは、『神機使い同士を繋ぐ懸け橋』だ。彼なら、第一部隊を上手くまとめあげてくれると、私は信じている」

「……わかりました」

そう言ったツバキは、封筒をしまって、支部長室から出た。

（何故だ…？今の第一部隊の状態から考えれば、サクヤが就任するものと思っていたが…上層部は何を企んでいる…？…まあ、思い過ごしならいいんだが…）

ツバキはあれこれ思考しながら自分の部屋へと向かった。

サクヤは自室のターミナルを開いて、情報をかき集めるが…成果は芳しくない。

リンドウが置いていったディスクを見てため息をつく。その時…。

コンコン…

ドアをノックする音に驚き、サクヤは手を止める。

「誰？」

「夜分にすいません…私です」

「…なんだ、あなたか…ビックリした～…そこじゃなんだし、入って」

声の主が判明すると、サクヤは部屋に招き入れる。

「失礼します…」

バシュっとドアが開くと、そこにはアリサが立っていた。

サクヤはとりあえずアリサをソファに座らせて、コーヒーを煎れた。

「はい、どうぞ」

「すいません…わざわざ…」

「いいのよ。…そんなことより、どう？調子は」

サクヤはソファに座ると、自分のコーヒーを口に含み、アリサに尋ねる。

「はい…おかげさまで、もう大丈夫です。…ご心配をおかけしました」

「あなたは…やっぱり強いわね…」

サクヤが微笑みながら、アリサに言う。

「そんなこと…皆さんのおかげです」

アリサは謙遜して言うが、実際彼女は確かに一歩強くなった。ハイドが一生懸命手助けしたこともあるが、結局強くなったのは他でもないアリサ自身の力によってなのだ。

「コウタたちの前でも、そのくらい素直でいてくれたらいいんだけど」

サクヤは悪戯っぽく言う。

「それは…」

アリサは頬を赤く染めて俯く。さすがにそれはまだ無理だ、とアリサは思う。

と、ここでサクヤは自身が得た情報を話した。

「あなたと一緒に赴任してきた、『オオグルマ先生』だけど、言われて気づいた時にはもう、極東支部から異動になっていたわ…その後の足取りも追ったんだけど、『ロシアに戻る途中に、アラガミに襲われて戦死した』って記録しか残ってないのよ…」

「そんな…」

サクヤの言葉にアリサは信じられないと声を漏らす。

「残念だけど…やっぱり腑に落ちないわよね…」

サクヤは俯きながら言った。その声は落胆と、悔しさを滲み出していた。

「サクヤさん…」

アリサの声にサクヤが顔を上げる。

「私にも…手伝わせてくれませんか？せめて、何か一つでも罪滅ぼしが…うっ…出、来っ…うぅ…」

アリサは涙を零してサクヤに頼むが、サクヤは首を横に振る。

「ううん…あなたにこれ以上、償ってもらうことなんかない…」

アリサは顔を上げて、サクヤを見つめる。

「……でも、そうね。…あなた自身にも関わることだものね。今回の件には、きっと何か裏がある…」

そう言ってサクヤはポケットからディスクを取り出す。

「実はね、リンドウの置き手紙が開けられなくて困ってるのこれが最後の手がかり…でも、この手紙を読むためには、リンドウの腕輪が必要みたいなの…一緒に探してくれる?」

「はい!」

アリサはサクヤを手伝えることに喜びを示した。

「それにしても…いなくなった後までこんなに振り回されるとは思ってもみなかったけど」

サクヤがアリサに明るい口調で言うが、やはり悲しみや強がりが感じ取れた。

アリサはふと、ある言葉を思いだす。昔、誰かに教えてもらった…古くから残されているその言葉をアリサはサクヤに伝える。

「ゴーレ・ニェ・モーレ・ブイピエシ・ダ・ドゥナー」

「何？」

アリサが突然意味のわからない言葉を呟いたので、サクヤが聞き返す。

「『悲しみは海にあらず、すっかり飲み干せる』…ロシアの、古いことわざです…」

「……そう、ありがとうアリサ」

サクヤは微笑み、カップを手に取るとコーヒーを飲む。

それを見たアリサは、まだ一度も自分に出されたコーヒーを飲んでないことに気づき、カップを手に取って飲んだ。

そして、二人はどちらからともなく笑い出した。

悲しみなんて、このコーヒーのように飲み干せる…私にもきっと…そんな生き方が出来るはず…。

サクヤの許しを得て、自らの生き方を見つけたアリサは、ようやく心が軽くなったような気がした。

二十八喰：許し（後書き）

次回の話では、主人公に転機が訪れます。

大分書いてきたつもりですが、まだまだこれからだと思ってます。

二十九喰：リーダー（前書き）

ハイドが晴れて部隊長に任命されます。

二十九喰：リーダー

アリサのトラウマ克服から一夜明け…ハイド達第一部隊はツバキに呼び出され、エントランスに集まっていた。

「なぁ、急に集まれって呼ばれて来たけど…一体何なの？」

コウタはアリサに尋ねるが…。

「知らないです…知っていても、あなたには教えませんけど」

アリサに冷たくあしらわれ、コウタはうなだれる。

「サクヤさん、何か知ってます？」

アリサはそんなコウタを無視して、サクヤに聞いてみる。

「なんにも聞いてないわ…それにしても、全員招集っていうのも珍しいわね…」

サクヤの言う通り、ソーマまで来ており…まさに第一部隊が全員集合している状態なのだ。

と、そこへツバキがやってきた。

「どうやら全員いるようだな…本日、執行部から正式な辞令が降りた。今回の任務の完了を持って、神霧ハイド…貴官をフェンリル極東支部、保守局第一部隊の隊長に任命する。これからはお前がリーダーだ…よろしく頼むぞ」

ツバキの放った言葉を、ハイドが、サクヤ達が、回りで立ち聞きしていたゴッドイーター達が信じられなかった。

（隊長？…まさか…嘘だろ？まだ戦場に出て二ヶ月も経っていないこの俺が…？）

ハイドが呆然としている中、コウタは呑気にハイドの出世に驚く。

「すっ…すげぇ…！出世じゃん！大出世じゃん！！こういうの、なんて言うんだっけ？…『下剋上』！？」

「それ…裏切りですよ？」

アリサはコウタに冷静につっこんだ後、ハイドに向き直る。

「改めて、よろしくお願いします！ね、サクヤさん！…サクヤ…さん？」

サクヤがアリサに全く反応しなかったので、アリサは不安げに顔を覗き込む。

「えっ？ええ…そうね。リーダー…か…なんだかずいぶん頼もしくなっちゃったわね～。君になら、背中を預けられるよ…これからもよろしくね！」

「えっ…あ、いや…」

いきなりの隊長任命とあって、コウタ達の言葉にハイドはどもる。

しかし勝手にはしゃぐコウタ達にツバキが反応する。

「はやとちりするな。正式に任命されるのは、『今回の任務の完了後』だ。それに…確かにリーダーともなれば、相応の権限が与えられる。しかし同等の、重く大きな義務も負ってもらう」

ツバキは真剣な面持ちでハイドを見ながら話す。

「神機使いとしての職分だけではない…チームの部隊員を無事に生きて帰還させるという義務だ」

そして皆に向き直り…。

「死ぬなよ。全員生きて帰れ。これは命令だ」

ツバキの言葉を聞いた第一部隊の表情は暗くなった。

かつてのリーダーに言われ続けた…大切な命令…。

命令を出した本人は戻ってこなかったが…それでも彼はリーダーとして、自らを犠牲にし、部隊員を生かす道を選んだ。ゴッドイーターとして、人として…彼の選択は尊敬に値する。

「さあ！」

ツバキの声に全員がはっ、と我にかえる。

「いつまでボサッとしている！任務に向かえ！」

ツバキに叱咤された第一部隊は、鉄塔の森に来ていた。

ちなみにメンバーはハイド、サクヤ、アリサ、コウタである。ソーマは別の任務があるとのことで外れた。

ハイドのリーダー就任を左右する今回のミッション。ターゲットは『オウガテイル』二体と『サリエル』だ。

サリエルとは、人と蝶を融合させたようなアラガミで、美しさに見とれて深手を負った情けない神機使いも何人かおり、発生地は地中海沿岸と見られている。

…ちなみにペイラー榊は、サリエルはザイゴートの進化種ではないかと考えているようだ。理由としては、サリエルの頭にある邪眼と、ザイゴートの目玉の構成成分がほとんど合致していることや、どちらも人間の女性の身体を表した部分がある等、共通点が多いから…ということらしい。

「じゃあ、リーダー。作戦を」

サクヤはハイドにニコニコしながら言った。

「まだリーダーじゃないですよ！」

ハイドが照れながら訂正する。

「よっ！リーダー！ヒューヒュー！」

ハイドの反応を見たコウタが茶化す。

「コウタは静かにしてて下さい！…でも、この任務が無事終われば…あなたはもう、私たちのリーダーです」

コウタをたしなめてハイドに向き直ったアリサは微笑んで言った。

「そうよ？どの道あなたはこれから皆を引っ張っていくんだから、！練習練習！」

サクヤはアリサの話に乗っかり、ハイドを促す。

「…そうですね……では、ブリーフィングを始める」

いつまでもモタモタしてられないと、ハイドは表情と口調を真剣なものに変えてブリーフィングを始めた。

自然とアリサ達も、姿勢を正しハイドの話を聞く。

「観察班からの報告では、サリエルは低速でこちらに向かっているとのことだ。先にオウガテイルを叩こう。俺とコウタ、アリサとサクヤさんのペアに別れて索敵、各個撃破した後合流し、やってきたサリエルと交戦、殲滅する。……で、どうですか？」

言い終わった後で不安げにハイドがサクヤに聞いたので、サクヤ達三人はガクっと肩が片方下がる。

「…せっかくカッコよく決まったと思ったのに…」

サクヤがハイドに文句を言った。

「仕方ないじゃないですか…俺だって不安なんですから…」

姿勢を直したサクヤたちはやれやれ、といった笑顔でハイドをみた。

「私はそれでいいわよ」

「そうですね！私も、無駄のない作戦で良いと思います」

「俺もＯＫだぜ！」

三人の了承を得たハイドは、安堵した後先頭に立つ。

「…じゃあ、行くよ！ミッションスタート！索敵開始！」

ハイドの合図で、第一部隊は二つに別れた。

「アリサ！剣が使えるあなたは、前線で陽動をお願い！私はバックアップに回るわ！」

「はい！」

「コウタ！後ろを頼む！」

「任せとけって、リーダー！」

「だから『リーダー』はやめろよ！」

アリサとサクヤ、ハイドとコウタはそれぞれの道を進み、工場の裏側へと回り込む。

「目標発見！行きますよサクヤさん！」

「ＯＫ！」

「見つけた…。行くぞコウタ！」

「了ぉ～解！」

それぞれほぼ同じタイミングでオウガテイルを見つけ、攻撃を仕掛けた。

今の第一部隊には、オウガテイルなどで手間取るはずもなく、一分も経たずに倒してしまった。

「！あれは…」

「出たな…」

アリサとハイドは、ついに姿を現した『サリエル』を捕捉した。サリエルは塀をふわりと飛び越えて工場の中に入ってきた後、ハイドとアリサを発見する。

二人の立ち位置は今、サリエルを挟むような形となっており、ハイドとアリサも互いに互いを視認出来ていた。

「よし、行くぞ！」

「行きます！」

二人はサリエルに向かって突進する。サリエルはひらりと横に回りながら、脚のような部分の下から光球を出す。

それは少しの間滞空した後、ハイドに向かって物凄いスピードで飛んでいった。

「くっ！」

ハイドはそれを横にスライドしてかわす。

「はあっ！てやっ！」

その間にアリサは、サリエルを背中から斬りつけて着地した。

サリエルは背中の痛みに苦悶の声を上げるが、すぐに反撃に出る。

頭の瞳からレーザーを上に向けて４本発射した。一度上に上がったレーザーは急に角度を下に下げ、雨のようにアリサに降りかかる。

「ふっ！」

タイミングを見極めて、アリサはレーザーの雨から逃れる。

二人がレーザーに手間取っている間、サクヤとコウタはバレットを撃ち込み続けた。すると、サリエルの瞳が妖しく光りだした。どうやら怒らせてしまったようだ。

サリエルはコウタに狙いを定めて、地面を滑るように滑空し、体当たりを仕掛けた。

「あぶねっ！！」

S字に曲がりながらの突進は避けづらかったのか、ギリギリでコウタはかわした。

しかしサリエルの攻撃はまだ終わらなかった。両腕をぎゅっと身体に寄せ、まるで何かの力を溜め込むような動作をした。

そして、縮こませた両腕を天に向かって突き出した直後、サリエルを中心に地面から巨大なエネルギー波の柱がせりあがる。

「ぐうあぁぁぁ!!!」

それをもろに食らったコウタは後ろに吹き飛ばされた。

「し…まっ…た…」

コウタが地面に倒れ込む。

「コウタ!!くっ…アリサ!サクヤさん!フォローしてくれ!」

『了解!!』

アリサとサクヤがハイドと、倒れているコウタの前に出た。

「よくもやってくれましたね!!」

怒りが込み上げたアリサは斬りかかり、サクヤがフォローでレーザーを撃ち込む。

「あ、あ…ぐ…」

コウタはすでに虫の息だったが、その命の灯が消えることはない。

「しっかりしろ、コウタ…」

ハイドはコウタに触れると、意識を集中する。すると、体力や生気が吸い取られ、自分の身体がズシリと重くなった感覚を覚える。

ゴッドイーターは互いの身体の壁すら超越する。ハイドが行ったのは『リンクエイド』という、神機使い同士のみで行える応急治療法だ。使う神機使いにもよるが、理論上、体力のだいたい半分程度を他の神機使いに分け与えることが出来る。

「あ、ハイド…ゴメンな…」

「まだいけるか？」

ハイドは疲労を隠してコウタに聞いた。

「ああ、なんとか…」

そう言ってコウタは立ち上がる。

「なら…仕事の続きだ！」

ハイドも立ち上がり、神機を構えてサリエルに向かって行く。

コウタは体力を回復する回復錠と、オラクルバレットを撃つ度に消費する「オラクル」を補給するOアンプルを飲んで、戦線に復帰する。

「このっ…！」

アリサは斬撃を与えていくがあまり削りきれていない。

するとサリエルが、瞳からレーザーを４本発射した。今度は対象者を追尾するホーミングレーザーのようで、曲がりながらアリサに向かって飛んでいく。しかし…。

ガァン！！

ハイドが装甲を展開し、それを防ぐ。

「ハイドさん！」

「いい加減…」

そう言ったハイドはサリエルの正面に飛び上がる。神機を振りかぶり…。

「墜ちろ！！」

ショートブレード刀身とは思えない力でサリエルを頭から叩き斬り、無理矢理地面に落とす。

「アリサ！今だ！」

「！はい！」

ハイドの力に驚いていたアリサは我にかえり、神機を構える。

「喰らえ！！」

「隙ありです！！」

二人の神機がサリエルを捕喰した。肉を引きちぎった二人は一気にバーストする。

『うおおおおお！！！』

二人は神機を変型させてコウタとサクヤに向けて二発ずつ撃ち渡す。

「いくわよ！！」

「おし来たぁぁぁ！！」

そして今度は互いに向けて…。

「渡すぞ！」

「どうぞ！」

リンクバーストを発動した四人は一気に仕掛けた。

ハイドの剣撃でサリエルのスカートと脚が破壊され、サクヤとコウタの射撃で頭が破壊される。

「決めるぞ！！」

再びハイドが神機を銃に変型させて、アリサ、コウタ、サクヤとともに濃縮アラガミバレットを放った。

光の奔流に飲み込まれ…後に残ったのは、無数の風穴が開けられたサリエルの死骸だった。

ハイドが神機を剣形態に戻して、目標の沈黙を確認した後…ポケットから各隊長に支給される携帯電話を取り出す。ヒバリに電話をかけ、一言…。

「ミッション完了…帰投する」

それは、新たなリーダー誕生の報告となった。

二十九喰：リーダー（後書き）

最近なんか話が長くなっていくような気がしてます…

もっと上手くまとめれたらな…

三十喰：権利と義務（前書き）

正式に隊長に任命されたハイドの話です。

三十喰：権利と義務

ミッションを終えて、ハイド達はエントランスに戻ってきた。
カウンターへ行くとハイドにヒバリが話しかけた。

「ハイドさん、支部長がお呼びです」

「あ、はい。…え～と…」

ハイドのどうしようかなといった表情にアリサが口を開いた。

「いいですよ、ハイドさん。報告書は私が記入しますから」

「そっか…じゃあ、頼むよアリサ」

「はい！」

アリサに報告書の提出を頼んだハイドはエレベーターに乗り、役員区画へと向かった。

目的の部屋に到着したハイドは、支部長室に入るのは始めてだっけ？と身なりを整える。（別に乱れているわけではないが）

コンコンとノックすると、中から久しぶりの声が聞こえてきた。

「誰だ？」

「神霧ハイドです」

「君か。入りたまえ」

「失礼します」

バシュっとドアが開き、部屋の中に入ると、シックザールが椅子に深々と腰掛けていた。

ハイドが近づくと、シックザールが口を開く。

「期待通り、滞りなく任務を完遂してくれたようだね…まずは祝辞を述べさせてもらおう。リーダー就任、おめでとう」

「ありがとうございます…」

ハイドは軽く頭を下げて礼を言った。

「さて…君に足を運んでもらったのは、他でもない。リーダーの権限と、義務について…触れておこうと思ってね」

シックザールはいつものように机に肘をつき、両手を口の前で組みながら話した。

「まずは権限の強化だ。君には、リーダー専用の個室が与えられる。前リーダーであるリンドウ君が使用していた部屋だ…」

「！」

リンドウの部屋に移り住むと聞いて、ハイドはピクリと反応する。

「その際…ターミナルにアクセスして、使用者権限を更新しておくように。今まで閲覧が許可されていなかった資料が、確認できるようになっているハズだ…。情報を開示、共有することを我々が決断した…この意味を、よく理解しておいてくれ。そう…これは我々、フェンリルからの信頼の証…願わくば、裏切らないでほしいものだ…」

シックザールの意味深な言葉を聞いたとき、リンドウの姿を思い浮かぶ。

「さて、次は義務の方についてだが…君には通常の任務の他に、リンドウ君が遂行していた『特務』を引き継いでもらう……」

次の言葉が続かず、シックザールが考え込むような仕種をしたので、ハイドは首を傾げた。

「……細かい話は、追って伝える。今日は君も、疲れていることだろう。ご苦労だった、これからもよろしく頼むよ」

「はい」

シックザールの話が終わったようなので、ハイドは執務室を出る。

緊張が解けると、一気に空腹を覚えるハイド。部屋に荷物を移動させる前に、食堂でも行こうかなと考えていた時だった。

「ハイド！」

「えっ？あ、ツバキさん」

いきなり後ろから、ハイドはツバキに呼び止められた。

「お前に伝え忘れていたことがあった」

「？何ですか？」

ハイドはなんだろう？とツバキに聞き返す。

「本日、一八〇〇にお前の新しい部屋に荷物が届けられることになっている」

「荷物…ですか？」

「そうだ。明日からはそれを使って任務に臨んでくれ」

ツバキはニヤっと笑みを浮かべて立ち去った。

「？」

ハイドは訳が分からず、遠ざかるツバキを見ていた。

「……」

食堂での食事を終えたハイドは、リンドウの部屋の前に来ていた。

（今日からここが…俺の部屋…）

ハイドはゆっくり手を伸ばし、ドアの開閉スイッチを押す。

リンドウの部屋は予想に反して綺麗に整頓されていて、窓には夕焼けの海が映しだされていた。

そして、部屋と同じく綺麗なベッドの脇の棚には、今の世界では希少となった酒瓶がズラリと並んでいる。…どうやら封を開けてはいないようだ。リンドウがミッションの報酬として貰ったのだろうか…。

壁にはダーツの的が掛けてあり、三本の矢が刺さっている。

ハイドはしばらく部屋に見入っていたが、ドアを閉じてロックをかけた後、自分の荷物が入った鞄を床に置く。

すると、ベッドの下に箱がいくつか置かれていることに気がついた。これか、とハイドは箱を開き中を確認する。

「これは…」

翌日ハイドは目を覚ますと、顔を洗って支度を始めた。

昨日届けられていたのは服だった。これを着て任務に臨めとツバキは言ったのだ。

ゆったりと幅が広く、脚の動きを制限しないズボンを穿き、ベルトを締める。

肌触りの良いニット地のダブルジップジャケットに袖を通し、ジッパーを上げる。その際、コウタやアリサ達には見せていないが、いつも身につけている、チェーンを通した指輪を服の中へ隠すように入れる。

更にダークブラウンのジャケットに袖を通して、両袖の端を二の腕で綺麗に折り曲げる。背中にはフェンリルの紋章や、背骨をイメージした留め金があしらわれている。

余談だがこのデザインには「アラガミとの命のやりとり、他者の犠牲の上に成り立つ世界」というメッセージが込められているとか。

機能性の高い、黒い軍用ブーツを履き、ズボンの裾を中へ入れる。

最後にグレーのレザーグローブを装着し、鏡の前に立つ。

（…おかしいとこは…無いよな…よし）

ハイドは部屋を出てドアをロックすると、エントランスへ向かった。

「では、第一、第二、第三部隊合同ブリーフィングを始める」

ツバキは自分の管轄する部隊を全員招集して、朝のブリーフィングを始めた。

これだけのゴッドイーターが一同に集うのは珍しく、エントランス

に異様な空気が流れる。

「あ、あの…ツバキさん」

コウタが手を挙げた。

「何だ？」

それにツバキが聞き返す。

「あの…ハイドがまだ来てないんスけど…」

コウタもアリサ達も、いつもならちゃんと時間には来ているハイドが今日は珍しく遅刻したので心配していた。

「ああ、そのことなら心配いらない。『少し遅れて来い』と言ってあるからな」

ツバキはサラリと言った。

「えっ？」

「そろそろ来る頃だな」

とツバキが言った時、エレベーターが動く音がした。

やがて全員がエレベーターを注視する中、ゆっくりと扉が開き…中からハイドが現れた。

皆口が半開きになっていたので、ハイドはやっぱりどこかおかしい

のか?と自分の身体を見直した後…。

「え～と…どうですか?」

と聞いた瞬間、様々な感想が飛んできた。

「おおぉ～!!いい!似合うぞハイド!!」

タツミは大絶賛した。

「心なしか…逞しく見えるな」

ブレンダンも後輩の成長に驚く。

「凄くカッコイイです、ハイドさん!」

カノンも素直に褒めた。

「なん…だとっ!あれは隊長専用だろ!?なんでハイドが…!」

「隊長になったから着てるんじゃねえか。そのくらい分かるだろ…」

シュンが納得いかずに声を荒げ、それにカレルが冷静につっこむ。

(くそっ…『新型』には最初から出世のレールが敷かれてるってか…)

内心は冷静では無いようだが…。

「ふふ、まあまあ二人ともそのくらいにしておきなさい…。…私も、

素敵だと思うわよ…ハイド」

ジーナも、言われた方はかなり照れる褒め言葉を述べる。

「似合うぜリーダー！」

「はい！どこもおかしくありません、凄く似合ってますよ！」

「……」

コウタとアリサは絶賛するが、ソーマだけは何も言わなかった。

「フ、第一部隊のリーダーに相応しい風格も出てきたか？」

「本当に…似合ってるわよ、リーダー」

ツバキとサクヤは感慨深げにハイドを見て感想を述べた。

ハイドの着ている服は、各部隊長にのみ支給される軍服で、リンドウが着ていたものと一緒のデザインなのだ。

違うことと言えば、ハイドがジャケットなのに対し、リンドウがロングコートだったことぐらいだろう。

ハイドは（一部を除く）皆の喝采に少々照れながらツバキの横に立ち、全員の方を向いた。

「もうみんな知っているとは思うが、昨日の任務の完了をもって、神霧ハイドが第一部隊の隊長に就任した。では、新しい隊長に一言挨拶してもらう」

そう言ってツバキはハイドを見た。ハイドは姿勢を正すと口を開く。

「この度、第一部隊隊長に任命された神霧ハイドです。極東支部の主力である第一部隊のリーダーとして、皆さんを引っ張って行きたいと思いますが…俺はまだ経験不足です。…だから…皆さんの力を貸して下さい！」

ハイドの頼みにほぼ全員が頷く。

「よろしい。では本日の各ミッションについての話に移る……」

ツバキの言葉で、新しい一日が始まった。

三十喰：権利と義務（後書き）

第三十話ということになりました。そして、突然気づきました……。

『主人公のキャラ紹介してねぇ！！！！』

という訳でキャラ紹介です

：神霧ハイド（１８）
フェンリル極東支部初の新型神機使い。コウタと同時期に入隊。
メディカルチェックにて、非常に高い潜在能力が確認される。
神機使い候補に選ばれる前は、今はアラガミに襲われ破棄されている外部居住区Ａ１３エリアに住んでいた。

アラガミの急襲により、両親と妹を目の前で無惨に喰い殺され、自身も危うく殺されるところをとあるゴッドイーターに助けられた過去を持つ。

その後はそのゴッドイーターの配慮で、アナグラに一番近いエリアに移り住んだのち、適合者に選ばれる。

三十一喰：お土産（前書き）

ようやくハイドの外部居住区時代の仲間登場です。

三十一喰：お土産

ハイドは隊長に就任した次の日、いきなりツバキに「少しは休暇を取れ」と言われ、急遽非番になった。

一日何もすることが無いのは、ゴッドイーターに選ばれる前以来だな…と考えたとき、ハイドはふと思い出す。

外部居住区のみんなにお土産を買って持っていくという約束を。

コツコツ貯めてきたお金もある程度まで増えていた。

（ちょうどいいや、今日持って行こう！）

ハイドは早速計算を始めた。

（外部居住区の食糧供給は『一週間分』ってことになってるけど、どう考えてもあれは四日分くらいしかない…とすれば一ヶ月をだいたい四週間として３×４で１２…そこに二日プラスで１４日分の食糧を持って行こう…あとは衣類とか生活用品だな…）

あれこれ計算しながら買い物をしていたハイドは、途中でコウタとすれ違う。

「よう、ハイド…って何だその荷物！？」

ハイドが台車で押していた荷物を指差してコウタが驚く。

「お土産だよ。外部居住区にいたときに世話になったみんなに渡す

んだ」

「そうなんだ！俺も家族にお土産買っていくんだけどさ～…その度に母さんと妹が喜んでくれるんだよ！やっぱさ～…いいよな、そういうの」

「ああ…じゃあ俺、もう行くよ！ミッション気をつけてなコウタ」

「おう！また明日な」

そう言ってハイドとコウタは別れた。ハイドは荷物を落とさないよう紐で縛り、台車の借用書に記入して、アナグラのゲートから外部居住区へと向かった。

外部居住区の光景はわずか一ヶ月程しか経っていないのにすごく懐かしく感じる。

ハイドは台車を押しながら感慨深くその町並みを眺めていた。

『居住区』とは言っても、物資が少ないこの世界では、廃材を使って建てられた小屋が乱立しているだけであり、住民たちは実にわびしい生活を強いられている。

ハイドが以前住んでいた場所も、その小屋の内の一つだった。今、そこではハイドと同じように、家族を失ってしまった人間が五人で生活しているハズだ。

目的の小屋までたどり着くと、軽くノックする。

「…誰…？」

生気の無い声が中から聞こえてきた。ハイドはこの声の主を知っている。

ドアがギギィ…と開くと、髪がボサボサの十歳の少年が現れた。

「マルク！久しぶりだな！」

「……ハイド兄ちゃん！？」

マルクと呼ばれた少年の顔は驚きに彩られた後、喜びの笑顔に変わった。

「ハイドが来たってぇ！？」

ドドドド…と四人がドアに駆け寄る。

「久しぶりだね、みんな」

ハイドが明るく挨拶すると、その四人も喜びを爆発させる。

「おお～ハイド！！元気にしてたか！？」

「ええ、なんとか無事に生きてます、バルトさん」

バルトと呼ばれた男は、スキンヘッドの４５歳の男性だ。小屋のリーダーのような存在であり、ハイドの面倒も見ていた。

「やっぱり一ヶ月会わないと、見違えるわね…」

ハイドを目を細めて見つめていたのは、ステラという２４歳の女性で、夫を失いこの小屋に流れ着いた。家事全般を担当している。

「なあなあハイド、フェンリルでの話聞かせてくれよ！」

「主に食糧供給について！」

そうハイドに詰め寄るのはトウヤとマヤの双子兄妹だ。ハイドより三つ下…つまりコウタと同じ１５歳だ。常に風に吹かれているような、癖のある黒髪が特徴で、普段はステラのお手伝いをしている。

「その話は後。ほら！約束通り、お土産持って来たよ」

ハイドが台車を小屋の中に入れると、ワァァと子供たちが喜ぶ。

「食糧は１４日分、あとは寝具とその他生活用品です」

ハイドはステラに箱の中身を説明する。

「助かるわ～。ありがとうハイド！でも、ちゃんと量を気にして食べないといけないわね」

そう、足りるのかどうかは分からない。何せ育ち盛りの子供が三人もいるのだ。自分たちがあまり食べ過ぎると、今度は子供たちが食べれなくなる。

「なんにせよ、これで当分心配はいらねぇな！」

ハイドの肩にバシッと手を置いてバルトが笑いながら言った。

「すいません、本当はもっと早くに持ってくる予定だったんですけど…入りたての頃は極貧生活だったので、物を買う余裕がなかったんです…」

ハイドが申し訳なさそうに言うが、バルトは気にしない。

「いいってことよ！どっちにしろお前は、ちゃんと約束を守ってくれた…自分の生活も命懸けで苦しい時に…こっちも無理言ってすまなかったな、ハイド…」

ハイドにお土産を真っ先に頼んだのはバルトだった。そのことをハイドに謝る。

「それこそ気にしないで下さい。俺を受け入れてくれたんですから…当然のことです」

その時マルクがハイドの服の裾を引っ張った。

「ハイド兄ちゃん！フェンリルの話聞かせて！」

「ああ…それじゃあ、何から話そうかな…？」

ハイドはとにかく密度の濃かったこの一ヶ月間を、バルトたちに話した。

適合試験直後の訓練や、戦場の恐怖、いろんな仲間との出会い、一人のゴッドイーターの殉職、リンドウの行方不明、アリサの介抱と

支援、部隊長就任…。いくら話しても話のネタは尽きなかった。
みんなハイドの話に興味津々で、あっという間に時間は過ぎていった…。

「まあ…こんな感じかな？」
ハイドが話し終えると、全員溜め息をついた。
「すげえ生活してるな、ハイド…」
バルトが話のあまりの濃さにびっくりしてハイドに言った。
「うん…よく身体壊さないね…」
ステラも、話の途中で出てきたスケジュールを聞いて半ば呆れていた。
「まあ、『ゴッドイーター』ですし…」
ハイドは苦笑いして答える。
「ねぇねぇハイド！」
マヤが突然尋ねる。
「何？」

「ハイドとその『アリサ』って人、付き合ってるの？」

「えっ？…あ…いや…」

マヤの言葉にハイドどもると、茶化すようにトウヤが追撃する。

「おっ！焦ってる、焦ってる！付き合ってるんだ～」

ニヤニヤしながら言うトウヤ。それにハイドは冷静に対処する。

「付き合ってないよ…良くて、『仲間として信頼しあってる』ってくらいだから…」

「嘘だ～。だってすごい可愛いんでしょ？その子」

「それはそうだけど…でも、トウヤとマヤが考えてることは何もないよ……今はまだね」

目線を逸らしてハイドが言った。それにマヤがしつこくつっこむ。

「『今はまだ』ってことは『いつかそうなりたい』ってことなんじゃないの？」

年頃の女の子は、どんな世界でも色恋沙汰に興味があるのか、グイグイくる。

「そうは言ってないよ。俺はただ『可能性がある』って言っただけ。人間は、明日何が起こるかわからないんだ。…アリサといつかは恋人になってるかもしれないし、そうじゃないかもしれない…そう言

ったただけだよ」

「む〜〜……」

マヤは頬を軽く膨らませて、ハイドをジト目でみつめる。

（昔からハイドは本心を突かれると饒舌になるな〜…）

バルトとステラはハイドを見ながら同じことを考えていた。

彼のことを十歳の頃から面倒見ている二人には、わかりきったことだった。

「さって…そろそろ帰るかな？」

立ち上がるとマヤが「こら〜逃げるな〜！」と言ったが、軽くスルーしてハイドは扉を開ける。

外は日がすっかり沈み、星がいくつか見えはじめていた。

「…じゃあ、また時間ができれば、お土産持ってここに来るよ」

ハイドがマルクたちの頭をそれぞれ撫でながら微笑んで言うと、バルトが口を開く。

「無理はするなよ？」

「わかってますよ」

「身体には気をつけてね」

ステラは心配そうな顔で言う。

「はい、ステラさんも気をつけて」

そしてハイドはみんなに手を振って、アナグラへと歩いていった。

バルトとステラは、遠ざかるハイドの背中を見つめながら不安に思っていた。

ハイドの言った言葉が頭に残っているのだ。

『人間は一日先の未来がどうなっているのか分からない』ということは、人が生まれた時からずっと続いてきたことだ。

しかし二人は、『明日ハイドが死んでしまったら…』などとは考えたくなかった。

特にバルトは、引き取ってから八年…長い間一緒にハイドと暮らしてきた。愛情が湧かない訳がない。

ステラは一緒に暮らしていたのは四年だけだったが、ハイドのことをすっかり家族として認めていた。

二人にとってハイドは息子も同然なのである。…もちろんマルクもトウヤもマヤもだ。

「頑張ってねハイド…」

ステラはそっと呟き、ハイドの姿が見えなくなるまで見送った。

三十一喰：お土産（後書き）

今まで一度も書いてなかった文を書かせていただきます。

「アドバイス・ご感想お待ちしております」

今まで書くのを忘れていました…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9966x/

神を喰らう者～夜明けの開花～

2011年11月24日01時20分発行